

ハイスクールU×0

あいーんチョップ[°]

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男は憎んだ。力を奪つても居場所を奪えなかつたことに赤い龍は嘆いた。自分を本来の主から異物が奪つたことに男は恐れた。自分に宿つている力が強大ということに

プロローグ

第1話

目

次

赤い龍の憤怒

光の王子

旧校舎のディアボロス

歪んだ物語

足りないピース

光の化身

穢れた者たち

戦闘校舎のフェニックス

繋がり

修練せし眷属

勝利を望む者たち

敗北の謎

紅の炎

それぞれの思い

使い魔の森

月光校庭のエクスカリバー

悩める者と愚者の焦り

聖剣と幼なじみ

騎士の決意と愚者の失態

狂気のバルパー

闇のリング

朱乃の涙とイッセーの弱音

137 128 121 115 108 101

91 86 79 74 64 54 48

39 30 24 17 10 7 1

停止教室のヴァンパイア

総督と魔王の会合

プールとドラゴン

汚染の魔獸

大変、シスコンたちが来た！

後輩バンパイアを救え

先代オーブ

明かされた過去

愚者の裏切り

冥界合宿のヘルキャット

黄昏と協力者

パーティへようこそ

206 201

195 184 178 171 165 157 150 144

プロローグ

第1話

「じゃあこれでいいんじやな？」

「ああ、OKだ」

暗闇の空間で2人の男が話していた。1人は青年でもう1人は年をとつた老人だった。

「しかし、なぜこんなことを？お前がやっていることはこの世界を搔き回すだけだぞ？」

「違うね。俺はスケベしかとりえのない変態主人公からヒロインたちを汚されないよう救済するだけだ」

老人は青年に忠告するが青年は口角を上げ、歪んだ笑みを浮かべながら自分の行為が間違つていないと正当化していた。

「まあいい。くれぐれも悪用するのではないぞ？」

「分かつたよ。そんな心配するなって。じゃあな」

青年はどこ吹く風を吹きながら光の粒子となつて老人の前から消えていつたが老人のほうは青年が約束通り守るのかどうか疑問を感じていた。

「本当に大丈夫かのお。ま、主人公の力だけによかつたがこの力まで授けてしまつたら一体どういうことになつていたかって……な、なんじや!?」

老人は本来先ほど旅立つていった青年に授けるはずの力が封じてあるだろう光の玉を見るとその光の玉は膨張しており今にも爆発しそうなほどの振動を放つていた。

「な、なんじゃこれは一体どうして○○○の力が……うわっ！」

老人は戸惑うと光は大きな光を放つ同時に大きな衝撃を生み老人を吹っ飛ばし、光の粒子となつて先程の青年と同じく消えていった。「どこへ行つたんじや!?あの力はある世界には余りにも強大すぎる

!!

老人は魔法陣のようなものを展開し探索してみたがその力は発見

できなかつた。

「グス…ヒグツ…なんで…」

ある森で1人の男の子が泣いていた。その幼い体は傷だらけであり、先ほどまでに殴られたような形跡があつた。

「なんで兄弟なのにあんなヒドイことをするの？」

この子が泣いている原因是双子の兄にあつた。

この子の双子の兄は両親がいなくなつたのを確認したら突然人が変わったかのように豹変し、罵詈雑言の嵐や殴る蹴るなどの暴力をふるつてきた。

「お父さんやお母さんに言つたら更にヒドイ目に遭わせてやるつ、て言うしどうしたらいいんだよお」

少年はお腹をさすりながら森の奥へ進んでいくが何もない。しかし少年は何かに導かれるようにその森の奥へ進んでいった。一見すれば何の変哲もないただの森なのにだ。そう、普通の森だつたら……

ニヤー

「…ニヤンコ？」

不意に猫の声が聞こえたのでその場へ行くと2匹の猫がいた。

「ひ、ヒドイ怪我！今すぐ治さないと……イタツ！」

「フシュー！」

少年が怪我を負つた白い猫を触れようとすると黒い猫が護るように庇い少年の手を引っ搔いたが、少年はそんなことを気にせずどうるか戸惑つていた。

「どうしよう…………そうだ！」

少年はポケットに入れて魚肉のソーセージを取り出して猫に近づけさせた。

「ホラ、僕は君を傷つけたりなんかしないよ。だから安心して」

「ニヤー？」

黒猫は敵意がないと察したのか少年の手に近づいてソーセージを食べた。

「ニヤフーン♪」

「えっと…落ち着いた？僕の家に来ない？その猫も怪我をしてるし、家にはお父さんやお母さんもいるからその猫ちゃんの怪我も治療できるよ？」

「フーン？」

「えっとダメならダメでいいよ、気が向いたらでいいから……『ようやく見つけたぜ』『え？ガツ！』

少年が後ろを向くと同時に何者かが殴り倒し、怒りの表情を浮かべながら2匹の子猫に近づいた者は明らかに人間ではなかつた。コウモリの羽を伸ばしながら濁つた色の何かを纏つていた。それはまるでおとぎ話に出てくる、悪魔、のようだつた。

「フシユー！」

「そんなに威嚇しても全然怖くねえな。さつきと俺の主のところに……あん？」

悪魔は足元に違和感を感じてその方へ見ると少年が悪魔の足にしがみ付いていた。

「ち、近づくな……その猫は怪我を……グツ！」

「うるせえんだよ、クソガキ」

悪魔は少年が怪我をしているにもかかわらずゴミを払うかのように少年の頭をその大人の足よりはるかに大きい足で踏みつけた。しかし悪魔はその行為をやめなかつた。

「オラオラア!!さつさと離せよクソガキ君よお！勢い余つて殺しちまうぜえ!?」

「そろそろやめたらどうだ？」

(助かった!?)

少年は突然聞こえた声に対して希望が芽生え、その声の主に助けを求めるようとした。

「お願ひです！この猫たちを助けて……グハツ!?」

「黙つてろよ、クソガキちゃん？」

少年に帰ってきたのは腹の蹴りと罵倒だけだつた。その蹴りで少年の体は紙飛行機のように吹つ飛び木々に叩き付けられた。

「やつと見つけたのかよ」

「遅すぎるぞ」

「だらしねえな」

次々とコウモリの羽を羽ばたかせながらやつてくる者たちが現れた。おそらく悪魔の仲間だからこの者たちも同じく悪魔なのだろう。「ようやくだ猫ども、さつさと駒を受け入れて俺たちと同じ悪魔になりやがれ」

「ニヤン！ ニヤーン!!」

「ニヤア！ ニヤーン!!」

猫たちは少年に泣き声を出すが少年は蹴られた衝撃で意識を失いかけていた。それを示すかのように少年は指をピクリと動かしていなかつた。

「さあてさつさと、悪魔に転生させて……ああ？」

「ハア、ハア、ハア……」

悪魔が疑念に思つたのは少年が大怪我負つていてもかかわらず立ち上がつていることではなく、少年を見たら寒気を感じたことだつた。

(このガキはなんだ!? どうして俺が恐れている!?)

「そろそろ殺してやるとするか」

そんな主の様子をつゆ知らず少年にトドメを刺そうとした。他の仲間たちは少年とその悪魔のことを見もせずに猫と自分の主の方へ視線を向けた。

ブシャツ!!

辺りに生々しい音が響き渡つた。

悪魔と猫たちは少年があの悪魔に殺されて血が吹き出た音と思つたのだろう。現に猫たちは目を閉じて顔を伏せていた。

「おい、ガキの死体はどうする……なんだと?」

悪魔は仲間と少年の方へ見るが予想とは違つた風景が広がつてい

た。

「…………」

少年に最後の一撃を与えたとした悪魔の頭部はなくなつておらず、次第に粒子となつて消滅した。

「テメエ！あいつに何を……」

「…………」

少年は次に来る悪魔に手を向けて悪魔に光の玉を当てた。光の玉に当たつた悪魔は光の粒子と共に泡のように消滅した。

「し、死ねええ！」

他の悪魔たちも少年を黒い玉で殺そうと攻撃するが、少年の放つ光の玉がそれを飲みこんで悪魔たちを消滅させた。

「テメエ、光の神 セイクリッド・ギア 器を持つてたのか!?」

悪魔たちの主は少年に動搖しながら問うが少年は焦点の合つてい目を悪魔に向けるだけだつた。

「くたばれええええ！！…………あがあ？」

悪魔は手下たちより遙かに強力な黒い玉を放とうとするが自分が倒れかたことに疑問を感じた。からうじて残つた意識で自分の体を見るとその体には穴が空いており、その穴から光が漏れ出した。

「な、なんなんだよ…………お前は…………」

悪魔が少年を尋ねる前に光と共に消滅した。少年はそのことを何も口に出さず悪魔の様子を最期まで見続けた。

「あれ、ここは？」

少年が目を開けると見慣れた天井が目に映つた。そこは少年の家だつた。

「イツセー！目が覚めたの（か）!?」

少年の父親と母親が名前を呼ぶと何で自分がこんなところにいるのかを聞くと

「ニヤー！」

二匹の猫が少年の体に飛び込み少年の体に自分の顔を擦り付け、最初の警戒がなかつたかのように少年に甘えた。

「その猫ちゃんたちに感謝しなさいよ」

「え？」

少年の疑問に母親が答えた。

「その猫がね私の服を咥えて引っ張つてね、何かなと思って付いて行つたら大怪我したあなたがいたのよ。母さんびっくりしちゃつた」

「ニヤーン♪」

猫たちは自分たちが助けたんだぞと言わんばかりに鳴き少年の体にくつ付いた。

「死ねばよかつたのに絞りカスが……」

双子の兄は弟を忌々しそうに誰もが聞こえないように咳いた。本人にとつては。

「ニヤ……」

猫の姉妹は聞いていた。兄の囁きを

赤い龍の憤怒

「俺たちやつたよなドライグ?」

「ああ、よくやつたよ相棒」

巨大な赤い龍の足元に茶髪の青年が倒れており龍は涙を流しながら青年を讃えていた。

「ドライグ、今までゴメンな。変なあだ名で呼ばれたり変な方法でパワーアップしたりして」

「フン、あの時に關しては俺もトラウマができるほどのヒドさだったがお前だつたから別にどうつてことない」

「ハハハ、何気にヒドイなドライグ」

青年が申し訳なさそうに言うと赤い龍は鼻水がいっぱいの鼻を鳴らしながら悪態突くが本人に悪気はなく寧ろ誇らしげに言つた。

「ドライグ、俺たちはどんなことがあつてもひつくり返した。格上と戦つても伝説の化け物と戦つてもいつもお前と一緒に乗り越えて行つたよな」

「ああ……」

「何度も死にかけたけどお前がいつもいてくれたよな」

「ああ……」

「お前とのこれまで色んなことあつたけど、俺たちはいつも一緒だ」「相棒……もういい……」

青年が楽しそうに笑うがそれの邪魔をするように青年の体が砂のように崩れていく。

「ドライグ、お前は、最後まで、大切な……」

「相棒!」

大切な相棒だつたぜ

その一言を皮切りに青年は完全に消え、赤い龍だけがその場に取り残され赤い龍は子供ように泣き出した。

「ウオオオオオ——————ン!!!!」

今まで泣いたことはあつた。けれどそれはいつも乗り越えたもの
だがそれは耐える事はできない。

赤い龍は泣いているが心の中で青年を讃えた。

さらばだ!! 最愛の相棒よ!!!

さらばだ!! 最高の赤龍帝よ!!!

赤い龍は泣いた。災害の雨のように聖書のノアの洪水のように涙
が、いや、魂が枯れるまで泣き続けた。

「オギヤー！ オギヤー！」
『……………？』

龍は目を開けるとそこには見知らぬ風景が広がっていた。
兵藤さん！ 頑張ってください!! お腹の赤ちゃんとお父さんに安心
させましょう!!

!!

赤い龍の耳に聞き慣れた名が届いた。これは偶然にしては出来す
ぎるものだと直感したのだ。

この光景は一度見たことがある。それに兵藤…………間違いない
い

赤い龍は胸を躍らせながらある男の再誕を望んだ。

相棒！ もう一度俺と一緒に

しかし希望は絶望に変わった。

「ああ、一正！」

…………？ 一正？

赤い龍の頭は疑問だらけであり現在の状況を理解できなかつた。

「兵藤さん！ もう一人が出てきますよ!!」

「はい、さあ出て来い一誠!!」

！？一誠だと…………

赤い龍は絶望した。本来宿つていたはずの宿主に宿つていなかつたことと、今宿つている宿主に違和感を感じたことだ。

『これは悪い夢だ覚めてくれ!!』

そんな赤い龍の思いを踏みにじるかのように現実は叩き付けられた。

『ククク、さあてどうやつてこの絞りカスを殺してやるかな』

本来なら赤ん坊なら単純なことしか考えないのにも関わらずこの赤ん坊はドス黒い思想にまみれていた。そして何より気になる言葉が出た。

『絞りカス？ コイツ！ 僕を相棒から奪ったのか!?』

赤い龍は憤怒した。黒い欲望の宿主に本来の宿主から自分を奪つたことを

光の王子

「イッセー君！遊ぼっ！」

「待つてよイリナ！」

「ニヤー！」

公園ではしゃいでいる二人の子供は無邪気に遊んでいた。黒い猫と白い猫は子供たちを見守るかのように見ていたが、やがて子供たちの遊びに混ざった。

『なんでだよ！なんで今までのことがバレたんだ!?』

公園の影から憎悪の目で少年を見ているのは少年と似ている顔をした男の子だつた。

『あの猫どもが来てからだ！父さんと母さんが俺が今までやつたのがバレて段々と俺のことを信用しなくなつたのは!!』

少年は歯を鳴らしながら拳を握るが時すでに遅し。茶髪のショートカットの子はこの子の本性を知られていた。

『クソつーこうなつたらイリナは諦めて他のヒロインを攻略してやる！まずはアーシアからだ！他のヒロインは原作通り進めて手に入れてやる！』

男は邪念を浮かべながら計画を練つていくが

『何故だ……何故相棒じやなくこんな奴なんだ』

男の中の赤い龍は悲しみに明け暮れていた。悪夢なら早く目覚めてくれと今の現実を受け入れることができなかつた。

何故だ……こんな仕打ち余りにも最悪だ。これなら前のあだ名で苦しんでいた時の方が何倍もマシだ。

赤い龍は自分が殺したはずの神に願つた。本来の主に帰してくれとせめてこんな奴から俺を抜いてくれと

「ここが姫島神社？」

「そうよ、こここの巫女さんはね、あなたたち兄弟が産まれるよう毎日安産を祈つて舞つていたのよ」

「へー…………うん？」

鳥居のところに一人の女の子が大人の巫女と遊んでおり少年は誰だろうと思った。

「ここにちは朱璃さん」

「あらここにちは兵藤さん。今日は息子さん一人？」

「はい、一度挨拶をとほらイッセー」

「えつと兵藤一誠です。初めましてどうぞイッセーと呼んで下さい！」

イッセーが挨拶すると何がおかしかったのか朱璃という女性はクスクスと笑いだした。イッセーは戸惑うばかりだ。

「ごめんなさいね、あなたつたらあの時一生懸命に参りしていたお父さんにそつくりだつたから」

朱璃は少しイッセーをからかいつつあるがその言葉に嘘はない。
『目元はお母さんそつくりでそれ以外はお父さんそつくりね。でも罪作りの男になりそう♪』

朱璃がそう思いつつ自分の娘を前に出した。

「ほら朱乃、この人たちにご挨拶しなさい」

「ひ、姫島朱乃です」

朱乃という少女の様子がおかしいと思つたイッセーは朱乃に近づいて挨拶しようとした。

「えつと、僕は兵藤一誠。朱乃ちゃん大丈夫？」

「ごめんなさい！」

朱乃に急に謝られて戸惑うイッセー君この子は人見知りで他の人のように言つた。

「あらあらうふふ。ゴメンねイッセー君この子は人見知りで他の人を受け入れるのは時間がかかるのよ」

朱璃は怖がる朱乃の頭を撫でながらイッセーを励ました。

「さあイッセー、時間も時間だしそろそろ帰りましょう。お父さんと一正が待つてるわよ」

「うん！」

イツセーは母親の手を繋いで姫島神社を離れた。

「どうしたの朱乃？まだ他の子たちと遊べないの？」

夕暮れになり晩餐を済ませたあといつものように朱璃は朱乃の髪を手櫛で梳かす。

「うん、だつて私人間じやないなんてあの人たちに知られたら私だけじゃなくお母さんも化け物つて呼ばれちゃう」

「そんなことないわ。朱乃はお父さんの綺麗な翼と私の髪をしてるんだもの、誰もそんなひどいこと言わないわ」

朱璃は朱乃の頭を撫でて勇気づける言葉を言つた。

「朱乃、女の子にはね全てを受け入れる王子様が現れるの。王子様なら朱乃がどんな子だろうと抱きしめてくれるわ」

「本当に!?」

朱乃は朱璃の言葉に眼を輝かせたが突然朱璃の顔が険しいものとなり、朱乃は不安になつた。

「お母さん？」

「朱乃、お母さんと逃げるわよ！」

母の変わりように戸惑う朱乃だつたがその言葉の真意が分かつた。

イヤ原因が来たと言うべきか

「朱璃、その化け物をこちらに渡せ」

「嫌です！この子は何も罪はない!!」

突如刀を持つた集団が部屋の中に来襲したのだ。朱乃は自分が狙われ、胸の中には恐怖に満ちていた。

「お母さん！」

「朱乃！お母さんことはいいから早く逃げなさい！」

なんとか神社から境内まで逃げた朱璃たちだつたが既に囮まれており、絶体絶命の危機に陥つてしまつた。

「朱璃よ、その化け物は我が一族の汚点だ。それを渡せばお前だけは助けてやろう」

「この子は化け物じゃない！」

朱璃は否定し男たちを説得しようとするがリーダー格が痺れを切らしたのか刀を構えた。

「もういい！貴様も我が一族の恥晒しだ！その化け物と一緒に死んでしまえ！」

「朱乃っ！！」

朱璃は朱乃の前に立ち覚悟を決めて目を瞑つた。朱乃は自らの運命と出生を呪つた。

「死ねええええ…………グオツ!!」

朱乃の目に映つたのは白い光が自分たちを斬ろうとした男に当たつた瞬間だつた。

「な、なんなんだテメエ!?」

朱乃是光が飛んで来た場所を見るとそこには手を向けて佇んでいた見知つた少年がいた。

「イッセー君？」

思わず名前を呼んでしまつたが突然の来訪者によつて極限状態になつた男たちはイッセーの名前など聞く余裕がないのか刀を持ちながらイッセーに襲い掛かる。

「ハアッ！」

イッセーは光の弾を浴びせながらパンチやキックなどで応戦し徐々に数を減らした。

「クソッ！せめて化け物だけでも!!」

下つ端は札に力を込めて朱乃に狙いを定めた。

(今ならあのガキは化け物を守れないはず！)

邪念が籠つた札は黒い火球となり朱乃を襲い掛かり朱璃は庇うために前に立つた。

「なんだと？」

いつの間にかイッセーは朱乃たちの前に立ち、両手を突き出して光の壁を出し火球を防いだ。

「お前で最後だ！」

イッセーは最後の下つ端に光の弾を当て襲来者たち全員を倒した。

「朱璃さん！朱乃ちゃん！大丈夫ですか⁈」

イッセーは朱璃たちに近づき様子を伺おうとした。

「イッセー君後ろ！」

「ウアアアアア!!!」

朱乃はイッセーに叫ぶが連戦により油断したイッセーは最後の敵に気づくことができず、刀で袈裟がけされ血が吹き出した。

「チツ、役立たずどもが最後まで俺の手を煩わせやがつて」

「あ、あなたは！」

不意打ちをした男は鬱陶しそうに朱璃の言葉に反応した。

「鳳凰！」

「おいおい、兄を呼び捨てかよ妹よお」

姫島鳳凰は朱璃を蹴り捨て、朱乃の首を掴み持ち上げた。

「やめて！その子に手を出さないで!!」

「がつ、くつ…………」

朱璃の必死の訴えに鳳凰はますます苛立ちの顔になり、怒鳴りながら答えた。

「うるせえな安心しろこのガキ殺したらお前も殺してやるよ」

「ううっ！」

伯父の言葉に反応した朱乃だが首を掴まれた上にいつの間にか施された封の札により力を発揮できなかつた。

「お前も一応姫島の当主候補だからな、このガキ殺せばお前も当主になれるかもしね。だから本家には化け物を庇つた上での不慮の事故つてことにしつければ俺は一気に当主になれるぜ」

鳳凰は首を掴んだ手の力を強め、歪んだ顔で刀を朱乃の心臓を目掛けて刺そうとした。

ガキンンッ！

強い金属音がその場に鳴り響き一人以外はフリーズした。その一

人は鳳凰ではなく

「ハア、ハア、ハア…………」

「お前、なんで立つていられるんだよ!?」

血を出しながら剣で刀を止めたイッセーだった。

(妖刀村正の呪いは悪魔でも致命傷を負わせるんだぞ?!のになんでお前は生きていられるんだ!!)

鳳凰が戸惑っていたがその隙がイッセーの反撃を許した。

イッセーは持っていた剣に光の力を籠めて鳳凰を斬ろうとするが

鳳凰は村正で防ごうとした。

バキン!

朱乃と朱璃を殺すために姫島から無断で持つて来た自慢の妖刀村正はイッセーの剣により無残に破壊され、致命傷を負った鳳凰は呆然とした。

「な、なんだよこれ……なんで姫島の当主の俺が……」

自分の中では既に当主になっていた鳳凰だったが、その実態は幻想と現実を区別できない妄言を吐く哀れな道化だつた。

「ガキイ……お前はもう終わりだ……俺たち姫島を敵に……したんだからなあ……今度はお前の家族もろとも……」

負け犬の遠吠えをする鳳凰だったが最早その命は

「終わるのはお前だ

イッセーによって斬り裂かれた。

「イッセー君! イッセー君!」

「ハハッ、痛いよ朱乃ちゃん」

朱乃は命の恩人であるイッセーに抱きしめるがイッセーは照れくさそうに笑いながら朱乃を抱きしめた。

「イッセー君! しつかり! 今呪いを!」

朱璃は朱乃を落ち着かせイッセーの体に手を添えて呪いを解けないにしても進行を抑えようとするが、目を疑つた。

「呪いが消えてる?」

朱璃は今起こっていることに驚きながらもイッセーのケガを手当してし、なんとか刀傷を消した。

「お母さん、イツセー君の両親に連絡しないと！」

「分かったわ、朱乃とりあえずイツセー君の家に電話を！」

朱璃は朱乃に電話をかけるよう伝えイツセーの治療に専念した。

「朱乃、お母さんが言つた通りでしょ？」

「うん、イツセー君は私の…………あれ？」

朱乃はイツセーの嫁になるのを決心し朱璃の元へ行こうとしたがポケットに何かが入っているのに気が付き手を入れると

「これは？」

そこには赤と紫の銀の人には近い何かがカードに映っていた。

旧校舎のデイアボロス

歪んだ物語

「母さん、行つて来るよ」

「母さん、行つて来ます」

月日は流れイッセーたちは高校生となり地元の駒王学園に入学した。イッセーは昔の臆病さはなくなり精悍な男となつた。

一正はイッセーをいつか自殺させて本当の主人公になるという哀れな道化っぷりに拍車が掛かつた。

(クソツ！クソツ！クソツ！あのクソ猫たちを殺してコイツのせいにしようとしたのにいつの間にか消えやがつて！まあいまづは原作通りアーシアを手に入れてやる！)

「イッセー先輩。おはようございます♪」

校門にたどり着くと白髪の女の子がイッセーに近づきくつつくと猫のように甘えた。

「あの、塔城「白音です」白音さん学校なんだしあんまりくつつかないでつ……うわつ！」

「にゃん♪」

イッセーが驚いたのは背中を誰かが抱きしめて当たつた感触である。そしてだんだんと顔を赤くした。

「にやはは！相変わらずイッセーの反応は可愛いにゃん♪どうかなお姉さんの」

イッセーに抱き付いているクセが強い黒髪の美少女は艶っぽい顔をしながら

「お・つ・ぱ・い・の感触は？」

男なら誰もが虜になるだろう聲音でイッセーに呟き、イッセーは赤面になる。その様子を嬉しがりイッセーの手を取り自分の胸元に入れようとするが

「あらあら、朝から随分お元気ですこと」

鈴を転がしたような声が黒歌を止めるがイッセーの顔は信号のよ

うに赤から青に変わった。どうやら声の主を知っているらしい。

「イッセー君、朝の学び舎で不純異性行為はダメですわよ。それと早く私のイッセー君から離れて下さいまし泥棒猫姉妹さん？」

「ひ、姫島先輩。そんなことを言つては「鼻の下を伸ばしてゐるイッセー君は黙つてて」 はい！」

「チクシヨーー！ 学園三大お姉様の塔城黒歌様と姫島朱乃様だけじゃなく学園のマスコットの白音ちゃんまで！ 羨ましそぎんぞ兵藤!!」

朝からの修羅場に嫉妬する野次馬たちにはイッセーは慣れっこだが。乙女たちの修羅場は慣れっこなかつた。

「いいじやん別に一可愛い後輩とのキンシップだよ？ それに朱乃ちゃんがつてイッセー君とニヤンニヤンしたいでしょ？」

「そうですがここは学校です。そんなことをするならまず2人つきりになつてからです。そういうことでイッセー君行きましょう？」

「え？」

朱乃是腕を組み豊満な胸を押し付けてイッセーの反応を楽しみながらもその見た目からは予想できない力にイッセーは驚くも連行されそうになる。

「待つにやん！ 何堂々と抜け駆けしようとしてるにやん!? まずは私からにやん！」

「イッセー先輩、年上だと何かと緊張しますよね？ ここは年下の後輩にしておきましよう。さあ行きましよう」

「待（ちなさい）（つにやん）白音（ちゃん）」

2人はちやつかり抜け駆けしようとする白音の肩を掴むと失敗したからか白音は小さく舌打ちした。

「なんですか？ あなたたちはそこで言い争つていればいいと思ひますよ。私はイッセー先輩と一緒に登校するだけですよ？」

「むむむ、小癪な！ お姉ちゃんそんな妹に育てた覚えはないにやん！」
「そんな幼い子供と見違えそうな体でどうやつてイッセー君を満足させるのでしよう？ やっぱり年上のお姉さんがリードした方がイッセー君を満足させますわ」

「なんですか？」

「今之内に……」

イツセーは3人が言い争つてゐる隙に教室へ逃げた。

「おいイツセー！なんでお前ばかりあのお姉様たちに気に入られて
んだよ!? 随分と仲良さそうだつたぞ!？」

「それどころかあの学園のマスコットの白音ちゃんまでお前のことを
好きそうだつたぞ！やつぱり昔あの人たちと会つたことがあるだろう
この野郎！」

「おいおい、人を襲つといてそれはねえだろエロコンビ。姫島先輩は
ともかく塔城さんたちは会つたことないよ」

イツセーは悪友の元浜と松田の襲撃を迎撃し伸びてる2人にそう
突つ込むと帰る準備をした。

「ねえ兵藤、あんたの兄さん彼女が出来たらしいわよ」

「兄さんに？」

授業が終わり帰る準備をするイツセーだが女の悪友である桐生藍
華はイツセーに嫌な顔をしながら報告するように説明した。

「随分嫌そうな顔だね」

「当然よ、女人の人もなんであんな男を選ぶかねえ」

イツセーは複雑な顔をしながら桐生に礼を言うと誰にも見つか
ないようにキヨロキヨロしながら帰つた。

「今日のデート楽しかつたね一正くん！」

「俺も楽しかつたよ夕麻ちゃん」

一正是夕麻に化けたレイナーレにワザと殺されてイツセーに代わ
り悪魔になろうと演じた。

「ねえ一正くん」

「（来たつ！）何か夕麻ちゃん？」

一正は今か今かとレイナーレの化けの皮が剥がれるのを待つていたが、ありえないことが起こった。

「忘れてくれないかな？」

「えつ……ガツ！」

一正は原作通りのセリフではないことに戸惑うが、それと同時に首に衝撃が走ったが、なんとか意識を振り絞り後ろを見ると金髪のゴスロリ少女が一正に当て身をしていた。

「ミツテルト、ありがとう。カラワーナ」

「はい、今すぐ記憶を消しますレイナーレ様」

レイナーレたちは一正の記憶の一部を消し、帰還用の魔法陣を展開し町外れの廃協会に帰還した。

「にしてもバラキエル様も人が良いつすよね。恩人の家族とはいえ危険な神器を持つていてるかもしないというのに」

「しようがないわよ、あの人もう少しで奥さんと娘さんを殺されそうだつたんだから。家族を失つた痛みは誰よりも分かつているんでしょう」

「だけどレイナーレ様、その娘である朱乃様はグレモリーとシトリーガ通っている学校にいるのでしょうか？いくら協定が決まりかけているとはいえる危険なのでは？」

カラワーナというスーツをきた美女は心配するがレイナーレはそれを宥める。

「それにしてもドーナシークはまだ帰つてないんすか？アーシアちゃんを早く保護しないと悪魔たちに殺されるかもしないっすよ」

レイナーレたちは他の仲間が帰還するのを待つた。

「ここだな…………」

イッセーは夜遅くに一人で出掛けっていた。イッセーの目の前に映るのは物騒な噂が広がっている廃墟だ。

この廃墟には人が入ると二度と出てこられないという噂が駒王学園で持ちきりになつておりクラスの話題となつていた。

「臭いな…………この様子だと相当人を!!」

イッセーは憤りながらも歩みを進め目的の前まで行つた。立ち止まるところには

「ハア、ハア、ハア……」

そこにはボロボロの姿の美女がいた。何かに逃げているようでイッセーを見つけたら喜んだ表情になりイッセーに近づいた。

「助けて来てくれたんですね!? お願いします! 助けて下さい!」

「大丈夫です。俺は味方です」

イッセーは先ほどの怒りがなかつたかのように笑い安心させるよう美女の頭を撫でた。

「あり…………ガハッ!?」

「ただし正義の味方だ」

イッセーは光の弾を美女に当てると同時に戦闘体勢になり次の攻撃に備えた。

「クソッ！ 何故分かつた!? 演技も魅了も完璧だつたはず！」

「完璧じゃなかつたからバレたんだろ」

「バレたんだつたらもう容赦はしない！ 私の真の姿でお前を喰らつてやるわあああ！」

先ほどの美女の姿から醜い姿となつた。上半身は先ほどの美女だが下半身は四つ足の化け物へ姿を変えた。

「さあて、お前をどうやつて喰らうてやろうか」

はぐれ悪魔バイザーは気付いていなかつた。イッセーはバイザーをすぐに殺すことができるほど力を溜めていたことを。

「ここはやはり先ほど騙して攻撃をしてくれた痛みを何百倍にして返してくれ…………グボオオ！」

イッセーは濃密な光の弾を発射しバイザーの体中に風穴を開けた。

「この状態での戦いは大体慣れてきたな。問題はコイツ以外のカードを集めることか…………」

イッセーは腰に掛けているホルスターから1枚のカードを取り出すと白紙のカードを見て息を吐く。

「さてと早くずらからないとな」

イッセーは用事が終わつたのでその場を去つた。

「部長、ここが例の廃墟です」

「分かつたわ。祐斗は中の様子を探つて来て。黒歌、白音、何か感じとれ…………2人ともどこへ行くの!?」

リアスは騎士ナイトの祐斗を偵察させて女王クイーンの黒歌と戦車ルーカの白音による仙術で人がいないか探知させようとしたが2人は顔色を変えて廃墟に入った。

「イッセー（先輩）!!」

2人はイッセーの名前を叫ぶがイッセーはすでに去つているのをこの2人は知る由もなかつた。

「黒歌！白音！どうしたの!?」

「イッセー、イッセー…………」

「イッセー先輩…………イヤだよおお」

「イッセーつてもしかしてあなたたちと朱乃が思いを寄せている兵藤くん？兵藤くんが一体どうしたの!?」

「イッセーの匂いが残つてゐるにゃん…………」

「イッセー先輩イヤだよおお…………」

「大丈夫ですわ黒歌、白音ちゃん」

「え？」

「あの人ははぐれ悪魔なんかに負けないわ。だつて私の王子様なんだもん」

朱乃是イッセーが死んでいると思つておらず、それどころか恋をす

る乙女の顔になつた。

「そう……ですよね……姉様、私たちもイッセー先輩が生きているのを信じましょう!」

「そうにや!イッセーはちゃんと生きているにやん!白音!あのカードを出してにやん!」

ハイ!白音はナックルガードに仕込まれている猫の顔から1枚のカードを取り出した。

そこには赤と銀の人型が映されていた。

「それって私のカードと同じ?」

朱乃は懐からカードを取り出した。

足りないピース

「イッセー君、イッセー君」

「目を開けるんだイッセー君」

「ん…………あなたたちたちは？」

はぐれ悪魔バイザーを斃したイッセーは明日も早いので帰つてすぐ寝たが目を開けて立ち上がると2人の男がいた。

「どりあえず初めましてイッセー君」

白髪の老人と

「こつちも初めましてイッセー君」

白い軍服のようなものを着た茶髪の男性だった。

「えつと、あなたたちは？」

イッセーは戸惑いながらも質問するが2人の男は首を振つた。
「残念だが今は名乗ることは出来ない。だが私はハヤタとでも名乗つておこう」

「ハヤタさんと同じく名乗ることは出来ないが僕はダイゴ」

「どういうことですか？名乗ることは出来ないって」

ますます頭を悩めるイッセーだがハヤタはその疑問に答える。

「近々君は本当の私たちを知ることになる」

「それまで用心しておいた方がいい。いくら君が力を使えるとはいえる今君はほんの僅かのカケラを使つていてにすぎない」

ハヤタの言葉を理解出来ないイッセーだつたがダイゴの言葉に少し気にはかかった。

「あそこまで扱えるのに結構苦労したんですけど…………」

「ああ、ゴメンね。人の姿の状態だつたらちゃんと使いこなしてよ。ただ君はまだピースを揃えてないからなんだ」

イッセーは傷ついたのを察したのかダイゴは苦笑しながらフオローしつつも本題を言つた。

「ピースが揃っていない？それって…………」

「まずは私たちを手に入れてからだ」

「話はそれからだよ。まずはあの子たちに気をつけてね」

「なんだつたんだあの人たちは…………」

イツセーは混乱しているがそれを加速させるほど嫌なことが襲つた。

「なんでリアスがいねえんだよ!? 本来だつたらリアスは全裸で俺と一緒に寝ていたんだぞ!! 何より悪魔になつてないつてどういうことだよ!?!」

自分の兄が学園のお姉様の1人と寝ていると妄想をしているのを弟は息を吐くが兄の最後の言葉が気になつた。

「悪魔になる? やれやれ兄さんは何考えてんだか」

イツセーはこれ以上付き合つてられないと思つたのか朝食を済ませて学校へ行つた。

「「イツセーエエエエエエ（先輩）（君）!!」

「うおつ！ ちよつとどうしたんですか3人ともつ!?」

イツセーは抗議しようとするが黒歌の豊満な胸で口を塞がれ、右腕は朱乃の魅力的な体に絡まり、左腕は白音の妖精のような体に拘束された。

「良かつた！ イツセーの匂いだよおおお!!!」

「この感じイツセー君に抱かれたのと同じ感覚ですわあ！」

「この手の温かさイツセー先輩のですうう！」

本人たちからしてみれば安心と感動によるものだがイツセーからしてみれば魅力的な女性たちに抱きつかれ冷静でいられなかつた。
(なんでイツセーばっかり！ クソが!!)

遅れてやつて来た一正は狙つていたヒロインたちの一部がイツセーに奪われたことに腹を立てていたがいつか奪つていくのを想像してなんとか無表情を保つた。

「ちくしょうが！悪魔になれなかつただけじゃなく時間にもズレが生まれちまつた！これじやあアーシアに好印象与えられねえじやねえか！」

一正の予定は悪魔になつて契約を取り、アーシアに出会つて良い人を演じて惚れさせる予定だつたがイレギュラーが多すぎて計画が大幅にズレた。

「さてと確かアーシアはこの辺りに……ヒヒツ、いたぜ」

一正是アーシアを原作知識を生かして発見し、コンタクトを試みようとしたが苛立つものを見た。

「アーシアの近くにいる男…………確かドーナシークだつたか？すでに話でもしてたのか？まあいままずはアイツにわざと殺されてアーシアの気を引くとするか」

一正是黒い笑みを浮かべながら2人の近くに駆け寄つた。

「おいそこのおつさん」

「なんだい坊や？悪いんだが私は人探しをしているのでね」

アーシアが一緒にいるのにドーナシークが人探しをしているのに疑問を感じた一正だつたがドーナシークは一正を見ると表情を変えた。

「お前は…………もしや兵藤一正か？」

「そうだよ。それがどうか…………ガツ！」

一正が答えると同時にドーナシークは腹部を殴り氣絶させた。

「ド、ドーナシーク様一体何を…………!?」

アーシアが驚いている隙にドーナシークは氣絶の魔法を唱えアーシアを氣絶させて魔法陣で退散しようとした。

「ハツ！」

「グツ！」

「もう1人も離せ、今度は手加減しない」

イッセーは怯んだ隙に氣絶したアーシアをドーナシークから奪い底いながら次の弾を用意するが

「この場で何をしてるのかしら？」

「チツ！グレモリーか！小僧！貴様はこのドーナシークが殺してやる

！首を洗つて待つていろ！」

突然赤い魔法陣が出現しリアス・グレモリーが出現してイッセーは頭を傾げたが、ドーナシーケはそれを知っているのかバツが悪い表情になつた。

「待て!!」

ドーナシーケは魔法陣を展開してそれを潜つてこの場を去つた。

「グレモリー先輩どうしてここに？」

「朱乃から墮天使側に問題が生じたと連絡が来てね。白音と黒歌に頼んでみたらここに墮天使の反応があつたのよ」

「何故そのことを俺に？言つてもいいことなのでしょうか？」

リアスは本来であれば一般人に教えてはいけないことを素直にイッセーに伝えた。それはイッセーは普通の人間でないことを察しているのだろう。

「とりあえず私と一緒に来てもらえるかしら？」

「…………分かりました。ちょうど時期を伺つていましたから」

イッセーは一刻も早く一正を助けに行こうとしたかつたが敵の情報を持つていないので渢りながらもアーシアをお姫様抱っこして同行した。

「グレモリー先輩、墮天使側は一体どうなつてているのですか？」

「それについては私が説明させてもらうわ」

イッセーはアーシアを目覚めさせてリアスに説明を求めるときとは別の黒髪ロングの美女が現れた。

「あなたは確か」

イッセーは兄の一正が一緒に引き連れているのを目撃したので見知つていた。

「天野夕麻さん…………でしたよね？兄さんの彼女だつたんじやあ」「違うわ、私の名前はレイナーレ。私たちの本来の目的はあなたの兄の監視とあなたたちの家族の護衛よ」

イッセーが鸚鵡返しすると金髪のゴスロリ美少女とスーツを着た美女が現れた。

「私たちはバラキエル様に命じられて恩人のあなたを護衛するようこの町に来たのです」

「だけど仲間のドーナシークがなんでか連絡がつかず探していたんですけど見つからないままだつたんす」

「2人が補足するがイッセーの疑問が2つあつた。

「レイナーレさん、なんで兄さんと接触を？本来だつたら姿を見せるのは駄目なのでは？」

「本当は人間に化けて悪魔に狙われないよう監視したんだけど、あなたの兄が私を見たら急に近づいて名乗つていないので関わらず偽名とはいえ名前を当てたのよ」

「なんですか？」

兄が何故天野夕麻の名前を知っていたんだ？
レイナーレ

「下手に対応出来ないし、もしも人間のあの子がこの世界に関わると危険すぎるのよ」

イッセーの疑問を解消せるようにレイナーレが説明した。しかしもう1つ疑問がある。

「アーシアを狙つた理由は？」

「詳しくは言えないけどアーシアには貴重な神器を持っているからどの勢力も欲しがるわ」

「それと君の兄さんは調査によると強力な神器を宿しているかもしないの。悪魔だつたら無理矢理眷属にさせるかもしれない」

スーツの美女がイッセーに一正のことを説明するがイッセーは落ち着いていられなかつた。

「待つて兵藤くん！君はどこへ行こうとしてるんだい!?」

飛び出すイッセーを抑える木場だがイッセーの力が強いのか引きずられる。

「兵藤くん、落ち着いて頂戴。君のお兄さんは私たちが助けるから君はここで待つていて。朱乃、白音はアーシアとイッセーの護衛をお願い」

「分かりました」

イツセーはなんとか落ち着いてソファーに座るが未だに不安だらけだった。

光の化身

「なんだよこれは？外れる！外れやがれ！」

ドーナシーカに連れ去られた一正は自分が十字架に磔にされたことに気づき暴れるが一般人に過ぎない一正に太い鎖が外れるワケがない。

「クソッたれめが！こうなつたら……おいドライグ！さつさと目覚めて俺に力をよこしやがれ!!」

一正は自分の左腕に怒鳴りつけるがなんの反応もない。

「どういうことだ!?なんで赤龍帝^{ブーステッド・ギア}の籠手^{ブーステッド・ギア}が出ねえんだ!?」

一正は悪魔になつていなくとも自分だつたら人間のままでドライグの力を使えると勝手に思つていた。

「お目覚めかね？兵藤一正くん」

「テメエ！ドーナシーカ!!」

一正がドーナシーカの名を言うと驚いた顔になつたがすぐに元に戻つた。

「まさか私の名前を知つてゐるとは思いもしなかつたぞ。まあ君はこれから死ぬんだからどうでもいいことだが」

ドーナシーカの言葉に動搖するがそれより気になることがあつた。

「なんだと？テメエ、レイナーレたちはどうした!?」

本来の原作通りであればレイナーレがアーシアの神器を奪つてアーシアを殺すのだが肝心のアーシアとレイナーレがいなかつた。

「レイナーレたちは最早どうでもいい。私の本当の狙いはね君だ兵藤

一正くん

「は？」

ドーナシーカが何を言つてゐるのか理解出来なかつた。なんで自分など

「正確に言えば君に宿つてゐる力だ。君はさつきこう言つてゐたよね？『なんで赤龍帝^{ブーステッド・ギア}の籠手^{ブーステッド・ギア}が出てねえんだ!?』と、つまり君はあの赤龍帝で神滅^{ロングギアス}具所有者なわけだ」

自ら墓穴を掘つた一正だがもう遅い。ドーナシーカは狙いを定め

た。

「それじやあ君の神^{セイクリッド・ギア}器を貰うとしよう。これで私はあの腑抜けた
レイナーレに代わり至高の堕天使になれる!!」

ドーナシークは狂気の笑みを浮かべながら術式を組み立てた。

「ここね。黒歌、協会にいる人数は?」

「10から20つてところにや。それと地下には墮天使と人間の気配
がするにや」

リアスは黒歌は仙術を発動を命じて協会の人数と一正の位置を把握させ、次の策を練つた。

「祐斗、あなたはレイナーレたちと一緒に兵藤くんのお兄さんに救出に向かつて陽動^{ソードバース}は私たちがするから迅速に一正くんを連れ戻して!」

「分かりました! 魔劍創造!!」

祐斗は剣を隠密班のメンバーと同じ数を作りその剣を掴むと祐斗の体が徐々に透けた。レイナーレたちもそれを倣うと透けていった。「さて私たちは…………」

リアスは赤黒い魔力を迸らせ標的の天井めがけて

「滅びなさい!!」

魔力を発射すると光の膜のようなものがガラスのように碎け散つた。

「悪魔だ! 殺せ!!」

その言葉を皮切りに神父の服を着た人間が10人ほど現れ銃を構えて戦闘態勢となつた。

「さあて行くわよ!」

リアスは魔力を纏いつでも撃てるよう発射準備をし

「行くにやん!!」

黒歌は気を放出して魔力と練り合わせた。

「ガアアアアアアアアア!!!!」

「アーハツハツハツ！臭い声だ！さてそろそろかな？」

一正は今まで受けたことがない苦しみを受け叫んでいるがそれでもドーナシーカは笑いながら続いている。

「ア……」

一正是糸が切れた人形のように力を無くすと一正の体から赤い光が抜け出してドーナシーカの体に吸収され左腕が変化した。

「フフフツ、これで俺は「兵藤くん!!」おやおや」

ドーナシーカは満足気に自分の左腕を見ていると一正を拘束していた鎖は斬られ一正はレイナーレにキヤツチされる。

「ドーナシーカ！あなたなんでこんなことを!!」

レイナーレはかつての仲間を責めるがドーナシーカは氣にもせずに赤龍帝の籠手を眺めておりレイナーレは目を見張った。

「それは赤龍帝の籠手!?なんであなたがそれを…………まさか!?」

レイナーレは一正を見ると最悪の考えが頭をよぎった。

「あなた……一正くんの神器を抜いたの?」

「ああ、せつかくの神滅具があんな人間が持つなんて神器がかわいそうだからな。俺が有効活用してやるよ」

ドーナシーカは変わらない表情で言うがレイナーレは怒りの表情を浮かべ

「人間から神器を抜き取る…………それが何を意味するかあなたは分かつて いるでしょウ!?」

「ええ、悪魔なんかはともかく人間はすぐに死ぬだろうな」

「なんで……」

「?」

「なんでそんなことをするの!?あなたは私たちを救ってくれたバラキエル様を慕っていたじやない!!だから私たちは恩人のイッセー君を助けるんじやない!!」

レイナーレが叫ぶと突然ドーナシーカは苦しい表情を浮かべ頭を抱えた。

「バラキエル……イッセー……」

「ドーナシーク、正氣に…………!?」

レイナーレたちは心配するがドーナシークから赤黒い闇が発生しドーナシークを包んだ。

「バラキエル……忌々しき墮天使バラキエル!!俺を殺した憎き兵藤イッセー!!」

ドーナシークだつたものは闇から出でくると闇のオーラを纏つた赤い龍を模した鎧が刀身の半分を持つて現れた。

「これは禁バランス・ブレイカ'手ハンド!?なんで奪つたばかりの神器が至るなんてあり得ない！」

「ハハハハハハハハハハ！これが赤ブーステッド・ギア・スケイルメイル龍帝ラム・ディの鎧アーマーか！早速力を試してみよう！」

「「レイナーレ（様）（さん）！」」

恐怖に陥つたレイナーレだが3人の声で正氣に戻り最善策の作戦を立てた。

「カラワーナ！一正くんを安全な場所に連れて避難しなさい！ミツテルトは至急墮天使と悪魔陣営に連絡を！そして木場くん！私と一緒に戦いなさい！」

「そんな！レイナーレ様2人でなんて無理です！ましてや神滅具の禁手相手なんて！」

「そうっす！ここは全員逃げるしか手立てはないっす!!」

カラワーナたちはなんとか説得を試みるがレイナーレは光の槍を作りドーナシークに向ける

「逃げたらこ、らはどうなるの？」

カラワーナたちはレイナーレの気に押され口を噤んだ。

「分かりました……無事に帰つてきて下さい」

「木場くん、レイナーレ様と一緒に戻つてくるつすよ」

「分かつてるよ」

カラワーナは一正を抱きしめて飛んで行き、ミツテルトはそれに付

いて行つた。

「覚悟は出来た？」

「ええ、もうすでに出来てます」

祐斗とレイナーレはそれぞれの武器を構えドーナシークに立ち向かい、攻撃する。

「これで最後ね」

「結構時間が掛かつたにやん」

リアスと黒歌ははぐれ悪魔神父たちを蹴散らし祐斗たちの元へ行こうとした。

「リアスさーん！魔王様たちに連絡をしたから避難を!!」

「早くしないと2人が無駄死につす!!」

突然カラワーナたちが現れ青い顔で言うがその理由が分かった。

「キヤツ!?」

「何にやん!?」

協会から爆発が起こりリアスたちは怯むがなんとか前を見ると

「うつ……」

「くつ……」

血まみれになつた祐斗とレイナーレがこちらに飛ばされた。

「脆弱なあ、クソつたれの悪魔くんと忌々しい堕天使ちゃんよお」

多少の鎧に傷はあるがそれでも余裕があるドーナシークは先ほどまで勇敢に戦つた祐斗たちを侮辱する。

「よくも、よくも祐斗とレイナーレを!!」

リアスは自らの滅びの魔力で攻撃し黒歌は仙術と魔力の融合技を放つがドーナシークには効かなかつた。

「随分と弱い攻撃だな。攻撃つてのはこうするものだろうが!!」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!』

鎧から禍々しい音声が鳴り響くと同時にドーナシークの力が上がつていき赤黒い魔力が膨れ上がり右腕に集中させてそれを放とうとした。

「せめて！」

リアスたちはドーナシークの右腕に全力を振り絞つて攻撃しなんとか右腕を空に向けさせ軌道を逸らした。

「おいおい、せっかく楽にさせようとしたのにそんなに苦しんで死にてえか!?」

ドーナシークは自らの攻撃を防がれたのが悔しいのか激昂した。

「あの方向は！」

「「駄目（です）（よ）イッセー（先輩）（君さん）!!」」

イッセーは廃協会がある方向へ行こうとするが朱乃たちは行かせまいと必死に取り押さえる。

「駄目よ、あなたが死んだら私は！」

「そうです！私だって先輩が死んでほしくありません！」

「レイナーレ様たちだってイッセーさんが死んでほしくないから頑張ってるんですよ！」

「朱乃さん！白音ちゃん！アーシア！あのままじやあグレモリーさんたちが！」

なんとか説得させようとするが3人は一向に応じなかつた。

「どうすれば…………なんだ!?」

突然イッセーの胸から光が飛び出しイッセーの目の前に現れ、自らを掴めと言わんばかりの鼓動を放つた。

「これは……」

イッセーはそれを掴むと光が碎け散り取手が付いた光のリングとなつた。

「え!?」

「何が!？」

突然朱乃たちの体が光り探ると朱乃たちが持つていてる人型が映つたカードが光り出した。

「まさか!!」

『ただ君はまだピースを揃えてないからなんだ』
ダイゴの言葉が頭をよぎった。

「白音ちゃん、朱乃さん！そのカードを俺に下さい！」

「イッセー（先輩）（君）……」

朱乃と白音は俯き考え込むと

「分か（つたわ）（りました）」

イッセーは2人からカードを手に取ると目の前が白くなつた。

「イッセー君、どうやら見つけたようだね」

「イッセー君、君なら僕たちの力を貸せる」

「ハヤタさん、ダイゴさん……俺に力を貸して下さい」

イッセーは目の前の2人に頭を下げて頼んだ。

「イッセー君、君はこれから険しい道を辿るだろう。しかし諦めないでくれ」

「僕たちの力を正しい方へ使ってくれ」

「はい！」

イッセーは誓うと2人は笑みを浮かべ

「それでは見せよう私たちの本当の姿を」

「これからもよろしく頼むよ」

ハヤタとダイゴの体から強力な光を発するがイッセーは目を瞑らずハヤタたちを見ていた。

「私はウルトラマン」

ハヤタは赤と銀の人型になり

「僕はウルトラマンティガ」

ダイゴは赤と紫と銀の人型となつた。

「ハー、フー……」

「イッセー（君）（先輩）？」

イッセーはリングをかざすと突然紫が混じつた宇宙空間となり

「ウルトラマンさん！」

〈ULTRAMAN!〉

「ヘヤアツ！－

リングの中に通すような形で白音から託されたカードを翳すと、輪の部分が青く輝きカードも同じ色の光の粒子に変換されてイッセーの左後ろへ飛んで行くと『伝説の光の巨人』【ウルトラマン】が現れる。

「ティガさん！」

〈ULTRAMAN TIGA!〉

「チャツ！－

続けて今度は朱乃から渡されたカードを翳すと黄色い輝きと共に変換された粒子が右後ろに飛んで集まると『超古代の光の巨人』【ウルトラマンティガ】となり、輪の部分が左右で青と黄色に輝き始める。

「光の力、お借りします！」

イッセーがオーブリングを掲げると二体の巨人も同じ動きをし、持ち手のトリガーを押した。

〈FUSION UP!〉

「シユアツ！－

「チャアツ！－

瞬間、リングの両側にある装飾が展開し、輪の部分が青、黄、紫の順に光を放つと、同じようにウルトラマンとティガもそれぞれ青と黄色のオーラを纏い、光に包まれたイッセーと重なる。

そして足元から光が粒子となつて霧散し、露わとなつた姿は大きく変わっていた。

胸には鮮やかな水色の輝きを放つ光輪があり両肩から背中にかけて黄と銀で彩られたプロテクターを装着した体は赤・紫・黒を主としており、やや青みがかつた白い瞳を持つ銀色の顔の額にあるクリスタルは紫の光を放っている。

それは、とある戦士が伝説の始まりとなつた二体の巨人を、その身に宿すことでの誕生する姿。

名を――

〈ULTRAMAN ORB! SPACIUM ZEPERION

!!

——ウルトラマンオーブ・スペシウムゼペリオン。
イツセーが変身した光の戦士は赤と青の時空間から飛び立つと、廃
協会に向かつて一直線に飛翔した。

「さあてそろそろとどめを…………グオオ!?」

ドーナシークはとどめを刺そうと右腕に魔力を籠めるが突然光の
輪に当たり右腕は斬り裂かれた。

「あれは一体?」

リアスが振り向くとウルトラマンオーブがそこにいた。

「なんだ貴様!?

ドーナシークが聞くとオーブは応える。

「俺の名はオーブ!闇を照らして悪を撃つ!!」

穢れた者たち

「俺の名はオーブ！闇を照らして悪を撃つ!!」

ドーナシークは自らの腕を斬ったオーブを気にせず見続け

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost
!!』

赤龍帝の力を発動させ闇の力を斬られた箇所に集中させて腕を再生させた。

「何が悪を撃つだ。悪魔や墮天使を守つておいて正義名乗つてんじやねーよ！」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost
!!』

ドーナシークは闇の力と自らの光の力を增幅させ、口に集中してビームを放つ。

「ハアアアアアアアアア！」

オーブはそれを察知し両手を水平にして胸に構え光の力を右手に集中させて

「スペリオン光輪!!」

オーブが放つた丸いチエーンソーの形の紫色の光輪はドーナシークのレーザーを簡単に斬り裂き

「ギアアアアアアアアアア!!!」

光輪の勢いは止まらず龍の顔を模した兜の目に直撃しドーナシークは苦悶の声を上げた。

「ウッ……」

祐斗とレイナーレの治療をしていたリアスたちは余りの残酷な攻撃に目を背けようとするが少しでも油断したらこちらは全滅するかもしれないのに出来なかつた。

「ハツ！」

オーブの体に刻まれている紫のラインが光ると一瞬でドーナシークとの距離を詰め

「デヤア！」

ドーナシークを殴ると同時に赤いラインが光り轟音が響いて殴った箇所にヒビを入れた。

「な!? 鎧が!?」

リアスが驚くのも無理はない自分たちの全力の攻撃はヒビ一つ付けることすらかなわなかつたのだから。

「ナメるなこのガキイイ!!」

ドーナシークは翼を拡げ槍のように細く鋭くし風を切る速さでイツセーを襲うがイツセーはバックステップで距離を取り

「ハッ！」

ドーナシークが目は見えないところに追い打ちをするようにイツセーはスペリオン光輪を放つがドーナシークは光輪を生み出す音と空気が斬り裂く音で同じ攻撃と判断した。

「同じ手が3度も通じるはずねえだろ！」

先ほどまで攻撃はおろか自分の鎧が壊された攻撃を3度使われるという屈辱で怒りを隠せなかつた。

オーブが新たに放つたスペリオン光輪は翼を次々と木の枝を切るように翼槍を斬り裂きオーブは追撃しようとしたが

「何!? グウッ!!」

「引つ掛かつたなおい！俺が目が見えねえからって翼を拡げてガムシャラに攻撃したと思つたか!?」

「何!?」

オーブが接近すると突然地面から翼槍が襲いかかりさつきの出鱈目の攻撃と違つて自分の位置を正確に捉えていた。目を再生させないよう赤龍帝の力を使わせず猛攻したのにだ。

「さつきの攻撃は俺は聴力を倍増してさらに翼で地面を荒らしてテメエの足音を反響で聞こえるようにしたんだよ!!」

「グウッ!!」

地中から翼の槍が次々と飛び出しオーブを傷付けてゆく。オーブ

は空中に浮いて不意を突こうとするが更に状況が悪くなる。

『ピコン、ピコン、ピコン』

『シユア……』 『チャア……』

オーブの胸のOの形の水晶が先ほどまで青だつた色が赤になり点滅し、一瞬だがウルトラマンとティガがオーブの体から分離しオーブは苦しみだす。

「ハア、ハア、グアツ!!」

空中に飛んでもカラータイマーの点滅音で位置が手に取るようになってしまい、翼の攻撃の嵐がオーブを傷つけ地に落ちて劣勢となる。

「そろそろ限界のようだな、それじゃあさつさと死ねや！」

「クツ！」

ドーナシークは目を再生して魔力と怨念を籠めたレーザーを放ち目の前に襲いかかるがオーブは翼槍の攻撃とエネルギーの消耗で動けなかつた。

「させません！」

「イッセーくんに手を出さないで！」

レーザーが直撃する手前、上空から火の車輪と雷がレーザーを食い止めた。

「イッセー先輩立つて下さい！」

「イッセーくん！こんな奴に負けるあなたじゃないわ！」

白音と朱乃は力を振り絞りレーザーを食い止めてオーブを援護するが攻撃をしているドーナシークは朱乃の姿に反応し

「姫島……姫島朱乃おおおおお!!」

「な!?」

「朱乃さん危ない！」

名前を呼ばれて殺されそうになる朱乃だつたが白音は朱乃を引っ張り攻撃を避けさせた。

「テメエが……テメエがあの時あの愚妹と一緒に死んでいれば俺は当主になれたんだ！それを……それをあのガキとお前のせいで俺は穢らわしい墮天使の体を使う羽になつたんだ！」

「愚妹？まさかあなたは！」

朱乃是口調や性格、そしてなにより自分とイツセーのことを復讐するには奴しかないと分かつた。

「姫島……鳳凰!!」

「ようやく気付いたかよ、穢らわしい堕天使とそれと交わって出来た化け物が！」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost
Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost
!!』

鳳凰は力を倍増し朱乃を殺そうとするが

「そりいえば残念だつたな。あの兵藤一正とかいうガキの家族にテメエらの息子とクソつたれの兵藤一誠に残虐ショーケを見せられなかつたな！アハハハハハ！」

鳳凰は思い出したように下卑た高笑いをするがそれを許さない者がいた。

「どつちが…………穢れてんだよ…………」

「あ？」

鳳凰が声のする方へ振り向くと、土を握りしめ震えながらも立ち上がるオーブがいた。

「普通に生きていた人間を力を手に入れるために殺し、見下されながらも生きている墮天使をその欲望の器にした」

怒りに震わせながらオーブは光り輝く

「そしてなにより穢れてんのは地位のために罪もない女とその子供を殺そうとし、全てを踏み躡るテメエ自身だ!!」

オーブは傷付いた自分の体を制し、鳳凰と向き合う。

「しつけーな、テメエはさつさと死にやがれ!!」

鳳凰は腕に魔力を籠め振り上げオーブにトドメを刺そうとするが

『ハアアアアアア!!!』

「グオオオオオオオオ!!」

リアスたち悪魔のメンバーと治療が終わつた墮天使メンバーが総攻撃でオーブを援護した。

「魔劍創造!!」
〔ソードバースト〕

「喰らえっす！」

祐斗は地面に手をつけると大量の魔剣が鳳凰の鎧のヒビを通つて貫かせ動きを封じ、ミツテルトは光を籠めた槍を投擲し同じように貫かせた。

「行くわよカラワーナ！」

「ハイ！」

墮天使2人は関節など装甲が薄い箇所に槍を突き刺し、鳳凰の手足を使い物にならないようにする。

「朱乃!!」

「ええ、喰らいなさい鳳凰!!」

リアスはバアルの力の滅びの魔力をフルバーストを、朱乃は墮天使の父の力雷光の力を使い鳳凰を攻め立てた。

「鬱陶しいんだよこの蝇どもおおお!!!」

鳳凰はドラゴンの代名詞とも言える炎のブレスをリアスたちに叩きつけようとする。

「させるかああ!!」

オーブは光の壁を作り鳳凰のブレスを防ぐが徐々に押されて行き

『ピコン！ピコン！ピコン！ピコン！』

カラータイマーの点滅がオーブの危機を知らせるかのように速くなつてゆく。

「ハツハツハツ！とつとと諦め…………なんだ!?」

鳳凰が纏つていた赤龍帝^{ブーステッド・ギア・スケイルメイル}の鎧が粉々に碎けていき先ほどの絶大な力は霧散していった。それどころか

『Transfer!!』

「な！力が漲る!?」

籠手からその音声が鳴ると赤い力がオーブの体を包み込みオーブの力を増幅させた。

「テメエ！何裏切つてんだ!?」

『黙れ！幼き相棒を殺そうとしたお前に誰が力を貸すか!!』

鳳凰は赤龍帝^{ブーステッド・ギア}の籠手に怒鳴りつけると中の赤い龍は本来の相棒を

殺そうとした男は許さないと言わんばかりの怒声を浴びせた。

(どこかに弱点があるはずだ!!)

オーブは目に力を籠めると全てが透けて見え、闇の力が溢れる刀身が鳳凰の胸に宿っていた。

「見えた！トドメだ鳳凰！」

オーブは右腕を上げ左腕を伸ばすと紫の光が広がり光の輪を形成してエネルギーを貯め、十字に組んだ。

「スペリオン光線!!」

放された光線は鳳凰に直撃し、怨念が宿っている刀身をだんだんと破壊した。

「グオオオオオオオオオオ!!!!まだ……まだ姫島朱璃穢れた女と姫島朱乃穢らわしい堕天使を！あの忌々しい兵藤一誠クソガキを殺してないんだぞおおお!!」

「ハアアアアアアア!!!」

オーブはオーバーキルと言つていいほどエネルギーを籠め光線を拡大し、姫島鳳凰の怨念を刀身ごと破壊した。

「ハア、ハア……お前みたいな奴が当主になつたらそれこそ姫島の汚点だバーカ」

オーブの変身は解けイッセーの姿に戻ると激戦で体力を使い切つたのか泥のように眠つた。

「イッセーくん、大丈夫？」

「え……朱乃さん？」

目を覚めるとイッセーは朱乃に膝枕されており、動こうとするがピクリとも動けなかつた。

「無理しないで下さい。今私たちがどうにかしますから」「そのまま寝ててにやん」

「イッセーさん頑張つて！」

白音と黒歌は仙術を発動しアーシアは自らのセイクリッド・ギア神 器

トワイライト・ヒーリング
聖母の微笑みを使ってイツセーの怪我を癒した。

「ありがとうみんな。あの、グレモリー先輩。兄さんは？」

「まだ眠っているわ」

リアスの視線の先には横たわっていた一正がおり、イツセーは悔しい表情になり

「兄さん……ゴメン……」

「兵藤くん」

兄の死を嘆くイツセーにリアスはあることを言う。

「あなたは兄がどんなことになつても受け入れる覚悟はある？」

「え？」

リアスの真剣な表情と目に戸惑うイツセーだがそんなイツセーをたたみかけるように

「あなたのお兄さんを悪魔として転生させれば生き返らせることが出来る。だけどお兄さんは人間でなくなつてしまふ」

リアスは赤いチエスの駒を握りしめてイツセーに問う。

「お願いします！兄さんを生き返らせて下さい！」

「分かつたわ。祐斗！あれを」

「はい」

祐斗が持ち出して来たのは赤い光だつた。おそらく鳳凰が奪つた赤龍帝の籠手だろう。

「これを一正くんに戻して……な!?」

「なんで？」

赤龍帝の籠手はイツセーに近づき何かを訴えかけるように光を明滅する。

「もしかして赤龍帝が兵藤くんを選んでいる？」

赤龍帝の籠手はリアスの考察に答えるように光る。

「…………ゴメン、ドライグ。お前は兄さんのところに行つてくれ」

『!!』

イツセーの訴えに衝撃を受けるドライグだがかつての相棒のわがままを聞き入れたのか一正に近づいた。

「―――我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、兵藤一正よ。

今我の下僕となるため、悪魔となれ。汝、我が『兵士^{ボーン}として転生せよ！』

リアスは魔法陣を展開して駒を一正に埋め込もうとしたが予想外の事態となつた。

「駒が足りない？ どうかこの子赤龍帝だつたわね」
納得した様子で駒を増やし一正を転生させた。

「俺は……あれつ、ここは確か……」

「兄さん！」

兄の蘇生にイッセーが喜ぶが一正の機嫌は良くなかった。
「イッセー、あなたも転生しない？ 悪魔になればあの力も強くなるかもしれないし、長い寿命を得られるわよ」

リアスの勧誘に黒歌と白音と朱乃は喜んだがイッセーは真剣な表情になり

「お気持ちは嬉しいですが：俺は悪魔になりません」

イッセーが断ると一正がニタニタしながら近づいた。

「おいおいお前もしかしてビビつてんのか？」

「ああ、そうだよ。俺はこの力が怖いと思つてる」

一正是へラへラと嘲るがイッセーは深刻な顔で答えた。

「あなたはあの赤龍帝の禁バランス・ブレイカー手に勝ったのよ？ そんなあなたは自分の力を恐れているの？」

リアスはイッセーを問い合わせるがイッセーの表情は依然として変わらない。

「随分と臆病だな。とんだ持ち腐れだぜ」

一正の皮肉に朱乃たちは苛立つがイッセーは普通の青年とは思えない顔で

「この力を扱うのは臆病なくらいがちようどいい」

イッセーからしてみれば真剣そのものだが一正は弱者の戯言と思つたのか

「だつたらその力をよこせよ。せつかくの力がこんな臆病者が持つてるなんて可哀想だぜ」

「バチンツ！」

乾いた音がその場に響き渡った。

「いい加減にしてくれませんか兵藤くん？イツセーくんは命を懸けてあなたの仇を打つたのですよ？」

朱乃は一正に平手打ちをしイツセーのことを思つて庇い立てる。

「つくづく最低な奴にや。ドーナシーケ、イヤ、鳳凰が言つていたことはあながち間違いじやないにやね」

「そうですね。赤龍帝の力がイツセー先輩の元へ行きたいのがよく分かります。赤龍帝がかわいそうです」

黒歌と白音は朱乃に共感し、赤龍帝の籠手に同情するかの目で兵藤一正を責める。

「イツセーくん、気にすることはありませんわ。あなたは優しい人ですもの」

「そうにや。そんなイツセーだから私たちはイツセーののことが好きなんだにyan

「今度は私たちがイツセー先輩を守つてあげます。だから無理しないで下さい」

3人はイツセーを抱きしめてイツセーを癒す。

「……絞りカスが!!」

戦闘校舎のフェニックス 繫がり

「初めましてイッセーくん」

「イッセーくん、初めまして」

「あなたたちは……ウルトラマン?」

イッセーは突然視界が真っ白に変わり、ハヤタたちウルトラマンと会つたのと同じ状況になつたので憶測をした。

「その通り、本名は明かせないが僕の名前は東光太郎だ。いずれ君と戦えることを願つているよ」

赤と青の基調の軍服に左袖に太陽に似た形のバッヂを付けた黒髪の七三分けの男性がイッセーの手を握りながら笑つた。

「僕の名前はヒビノミライ。兄さんたちが世話になつています」

オレンジと銀のが基調の軍服に胸に流星の形をしたCREW G UYSのバッヂを付けた茶髪の青年が挨拶するが気になる言葉が出た。

「兄さん? つてことは」

イッセーの疑問にミライは笑みを浮かべて

「ハイ、ウルトラマンさんたちは僕の兄さんです。ただ血は繫がつていませんが」

「え?」

血が繫がつていないので何故兄弟と? その疑問を察したのか光太郎は当たり前といった顔で

「血縁だけが家族じゃない、強い絆があれば人は皆家族になれる。血の繫がりなんて些細なことだ」

イッセーは光太郎の言葉に感銘を受け、一正の顔を思い浮かんだ。(いつか兄さんだつて分かつてくれる時が来るはずだ)

「ただイッセーくん、君の兄兵藤一正には気をつけた方がいい」

「え?」

光太郎はさつきと打つて変わつて真剣な顔になり、一正の話をしよ

うとするとイッセーは光太郎を見て

「あの子は君の本来の……『イッセー!!』」

突然の言葉に光太郎の警告は遮られイッセーの体は消えていった。

「兄さん、イッセーくんは大丈夫なんでしょうか？」

「言うな。彼はいずれ自分自身で真実に辿り着くだろう。僕たちは彼の相棒の代わりの力となつて見守るしかない」

光太郎とミライはイッセーを心配しながら見守る。

「イッセー！ ようやく目覚めたにゃん！」

「すみません黒歌さん。だけど膝枕をしているのは何故でしよう？」意識を失ったと思つた黒歌は負担を掛けないようにイッセーに膝枕をしていた。顔を見ようとするイッセーだが黒歌の豊満な胸によつて見ることが出来ず、顔を赤くしていた。

「あれあれえ？ イッセー私に興奮してる？ それじゃあお姉さんがそのムラムラを消して『抜け駆けはダメですよ』チツ」

イッセーを誘惑しようとする黒歌だが、リアスと朱乃が来て阻止され黒歌は舌打ちをする。

「これで終わりでしようか？」

イッセーは学園の人間にリアスたちオカルト研究部たちの秘密バラさないよう監視をするという名目でオカ研に入り、現在は雑用していたのだが、突然光太郎たちに呼び出され気を失つていた。

「部長、リアス部長？」

「つ！ 何かしらイッセー？」

この頃リアスは上の空で明らかに何かに悩んでいた。もしかして自分の兄一正が何かをやらかしたのではないかとイッセーも頭を痛めた。

「言つておきますがイッセーくん。兵藤くんで悩んでいるわけではないから気にしなくてもいいですわよ」

朱乃がイッセーの心情を察したのか頭を撫でて慰める。

「や、やめてくださいよ朱乃さん。子供じゃないんだから」

イッセーは照れながら否定するがリアスたち年上らは微笑ましい顔でイッセーを見る。

「朱乃たちはいいわね。好きな人がいて……」

リアスの枯葉が落ちたようなたつた一言に誰も気付かなかつた。

「ハア、結局分からず仕舞いか。こういう時ウルトラマンさんたちはどうするんだろう？」

学校が終わり、自分の部屋に戻ったイッセーはベッドに寝転んでホルダーからウルトラマンたちのカードを取り出して嘆息する。

「体どうしたんだ部長…………ん？」

部屋から突然見たことがある赤い魔法陣が出現し件のリアスが思いつめた顔で現れた。

「部長！どうしたん……うわっ!?」

リアスはイッセーを押し倒し、自分の服を脱ぎ始めた。

「ぶ、部長！何を『イッセー！』」

リアスの剣幕にたじろぐイッセーだがさらに追い打ちをかけるようリアスは

「私を抱いて、今すぐに」

リアスは言い切ると今度はイッセーの服に手を掛けようとするが、イッセーとリアスは何かを察知した。

「体何が？」

「遅かった！」

さすがのイッセーでも何が来るのかリアスはその正体が分かつたのか苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。

「こんなことをして破談に持ち掛けるつもりですか？」

「グレイフィア、あなたがここに来たのはお父様の指示？それともお兄様？」

「両方です」

グレイフィアという名のメイドはイッセーを見ると一気に警戒の目になり全身に魔力を漲らせ臨戦態勢となつた。

「お嬢様！早く私の後ろに来て下さい！」

「ちよつと、グレイフィア!?」

グレイフィアはリアスを自分の背に回し、庇う形でイッセーと対峙し先手を打とうとするが

「待つて！その子は同じ部活の後輩よ!!」

リアスの一言にイッセーに攻撃が当たる直前で止めたグレイフィアだが警戒の色は薄まつていない。

「ありがとうございます部長」

「いいえ、こちらこそごめんなさい。グレイフィア、どうしたの？あなたがそんなに焦るなんて」

リアスが聞くとグレイフィアに聞くと本人はイッセーと彼の腰に付いているホルダーに目をむけて

「その方はただの人間なのでしょうか？不肖ながらこのグレイフィア過去の三大勢力の戦争にて生き残った身。その中でもこれほどの能力を持つた悪魔は魔王でも釣り合いが取れるかどうかです。当然人間などでは見たことがありません」

「戦争？」

イッセーが聞くとグレイフィアの表情は変わらないまま

「あなたが知る必要はありません。そして出来るなら二度とお嬢様に近寄らないで下さ」「いいかげんにして！」

「イッセーは力を悪用したりしないわ！白音と黒歌を幼い頃に悪魔から助けたのよ！朱乃だつてイッセーがいなかつたら母親と一緒に死んでいたかもしれない！」

リアスが真摯にイッセーを庇うとグレイフィアはイッセーの前に立ち

「申し訳ございません兵藤一誠さま。どうやら私はあなたの力しか見ていなかつたようです」

素直に謝罪するリアスの方へ振り向き魔法陣を出し、リアスと共に

にその中に入つた。

「なんだつたんだ？」

暗い闇の中イッセーの独り言が響いた。

「なあ木場、部長は最近イヤなことでもあつたのか？」

後日学校が終わるとイッセーはすぐに部室に行くが、祐斗と合流したので眷属だつたらリアスについて何か分かるかも知れないと聞いた。

「いや、そんな話聞いたことがないけど黒歌さんだつたら何か知つて
るかも。あの人は女王クイーンだから部長の身辺のことだつたら詳しいはず」
イッセーと祐斗はオカ研の部室の前に着くがイッセーは身構え、祐
斗はイッセーの謎の行為に首を傾げていた。

「イッセーくん、どうしたんだい？」

「気付かないのか？明らかに強い奴がいる！」

イッセーが血色を変えて部室に入り、祐斗もそれを倣うが

「まさか、僕がここまで来ないと反応できないと」

祐斗は自分の実力がまだまだ未熟なことを噛み締めるがすぐに部
室に入った。

「なんであなたがここにいるんだ？」

「理由は後で話しますよう。とりあえず落ち着いて下さい」

部室にいたのは、部長であるリアスと副部長の黒歌と朱乃そして白
音と兄の一正と昨日会つたグレイフィアだつた。

どうやら、イッセーが反応したのはグレイフィアの気配だつたらし
い。しかしすぐに別のものに切り替わり、他の場所を視線を変えると
イッセーが今まで見たことがない魔法陣が現れた。

「フェニックス」

誰かが魔法陣の正体を言い、現れたのは

「ふう、人間界は久しぶりだぜ」

スーツをだらしなく着崩してホスト風の男だつた。

「よう愛しのリアス、会いに来てやつたぜ？」

リアスをいやらしい目で見ながらそう言つた。

修練せし眷属

「部長の婚約者のライザー・フェニックス？」

「そうにやん。リアスは純血悪魔だから将来他の純血悪魔と結婚して子供を作らないといけないらしいにやん」

イッセーは黒歌に聞くと昨日のリアスの暴走に納得するが、何故自分が選んだのか混乱した。このことを話すと黒歌たちが暴走してしまふかもしぬないので黙つた。

「グレイフィアさん、あの人本当に貴族なんですか？どう見てもそろは思えないんですが、というかあなた部長の家のメイドなんですからやらしく触っているのを注意して下さいよ」

イッセーはグレイフィアに懇願するがグレイフィアは目を瞑つたまま動かない。

「いいかげんにしてライザー！私はあなたと結婚するつもりはないわ！」

リアスはライザーを突き飛ばし

「おいおいリアス、君は家を潰したくないだろう？それに俺だつてフェニックスの看板を背負つてんだ……お前の眷属全てを殺してもお前を連れてくぞ！」

ライザーが炎を吹き出すとグレイフィアが近づき

「おやめ下さいライザー様。あなたが人間界で暴れるのなら私も黙つていませんよ」

グレイフィアはその髪と同じ色の魔力を漲らせるとライザーの顔色は変わり炎を収めた。

「最強の女王^{クイーン}と呼ばれるあなたと戦うつもりはない」

冷静を装つているライザーだがグレイフィアの脅しで恐れた冷や汗は隠せなかつた。

「止めるのが遅いのではないでしようか？それとも古に戦つた悪魔とは所詮年を取つた老いぼれだから判断するのが遅れるのでしょうか？」

イッセーの皮肉が混じつた嫌味に反応し少し殺氣を出すグレイ

フイアだが、それでもイッセーは止まらない。

「それにこんな奴と部長を結婚させるなんてグレモリーというのは部長を除いて相当な無能のようですね」

「小僧！貴様 「それ以上の侮辱は許しませんよ」」

イッセーの皮肉にライザーは怒るがグレイファイアがイッセーに近づいたので猫のように大人しくなつた。

そしてグレイファイアは先ほどライザーを止めたのと同じくらい魔力と殺氣を出すがイッセーは変わらない表情で

「どうなるとゆうのでしようか？」

イッセーも負けじと殺氣を出すと周囲の物がヒビが入り、心なしか大地が揺れている感覚を2人以外味わい子犬のように震えた。

「イッセーもういいの！自分のことは自分で解決するから!!」

リアスがなんとかイッセーたちを止めてお互いの矛を仕舞わせると全員が落ち着いた。

「お嬢様、旦那様から最後のチャンスがありますがどうしますか？」

「……レーティングゲームでしょ？ 分かったわ。私はライザーに勝つて自分で自由を掴み取るわ！」

リアスが意気込むとライザーは先ほどの余裕を取り戻し

「おいおいリアス、君の下僕の数はいくつだ？ そこの少年は関係ないから除くがたつたの4人。俺のは全員揃ったフルメンバーだ」

自分の眷属を召喚し、自慢するライザーだがイッセーを格上と認識したライザーは小僧から少年と呼んだ。どう見ても情けない姿だがそれより気になることがあつた。

（全員が女性つてうことだ）

イッセーは気を荒立てるがなんとか落ち着かせるが兄の一正是だらしさと羨ましさに溢れた顔でライザーの眷属を見ていた。

「ライザー様ーあの人やらしい目で私たちを見てるー」「気持ち悪いー」

眷属の女の子たちが一正の視線を感じ取り気分を悪くしていたが

ライザーは優越感を感じたのか

（マジか!？）

ライザーは眷属全員と見せびらかすようにキスをするがイッセーと一正を交互に見比べた。

「そこの下僕くんと少年くんはそつくりだな。どういうことだ？」

「その子たちは双子の兄弟で兄の一正が私の下僕よ」

リアスが一正を紹介するとライザーは馬鹿にするような顔で一正を指差し

「ハハッ！ 兄が無能で弟が優秀とはな！ リアスも眷属にする人間を誤ったわけだ！」

ライザーが小馬鹿にしたように笑うと一正は突然立ち上がり

「ふざけんなこの焼き鳥野郎！ 僕の方がそんな奴より強い！」

一正是赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手を出してライザーに殴り掛かろうとするが

「ミラ、やれ」

「はい」

ミラと呼ばれた少女が持っていた棍で一正を突き、一正を沈めた。

その様子を見てライザーは機嫌をよくしたのか

「さすがに足手纏いがいるんじやリアスがかわいそうだな10日くらい期間をくれてやるよ」

ライザーは魔法陣を作り眷属と一緒に帰つていった。

「それではこれで失礼します」

グレイフィアも同じく魔法陣を作り帰還した。

「イッセー、お願ひがあるの」

「察しはつきますがなんでしょう？」

リアスは真剣な顔でイッセーに

「私たちを鍛えて！」

一正を除いたリアスたちはイッセーに頭を下げて頼み込み、イッセーも真剣な顔で

「いいでしょう。もし眷属になれと言つたら断つてましたがそれでも俺は容赦しません。それでもやりますか？」

『はい！』

イツセーの剣幕に物怖じとせずリアスたちは返事をした。
(なんでだよ！なんで俺はこんなに弱いんだ!?なんで主人公である俺がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ!?)

未だに自分が主人公と勘違いしている道化はイツセーに無駄な嫉妬をしていた。

「場所はどこで？」

「私の所有している別荘があるわ。周囲にはいないから修業には最適だと思う」

そんな一正を放つてイツセーはリアスたちを鍛える場所を尋ね、それぞれのトレーニングメニューを練つた。

「よし、それでは行きましょう！部長魔法陣を！」

「ええ！」

イツセーたちはリアスが作り出した魔法陣に入り、リアスの別荘へジャンプした。

「行くぞ木場！」

「来い！」

祐斗のメニューはウルトラ念力で重力を操り、騎士ナイトの力のスピードを封じた上での模擬戦だ。

「隙がありましてよ！」

「クッ！」

朱乃の雷光の攻撃を躊躇が少しの接触でも戦闘不能になるので祐斗の神経は更に研ぎ澄まされる。が

ガラ空きだ！

「ゴフッ！」

油断しているところでイツセーの光弾がヒットし致命傷を受ける。

「アーシア！」

「はい！」

すかさずウルトラ念力を解除し、アーシアに祐斗を回復させるよう指示を出す。

「よし、回復タイムが短くなつた。上出来だアーシア！」

「はい！」

「木場はもう少し不意打ちにも対応出来るように！神経は剣のようにただ鋭いだけじゃダメだ！」

「はい！」

イツセーは祐斗に出来るだけ実戦の能力を高めるため再びウルトラ念力を発動する。

「よし！じゃあ朱乃さん続きをよろしく！」

「うふふ、分かりましたわ。それじゃあ祐斗くん、私も容赦しませんわよ」

「お願ひします！」

祐斗はウルトラ念力に耐えながら朱乃の攻撃をなんとか回避するが、不意打ちが来てもいいように周囲に神経を巡らせる。

「アーシア、君は悪魔になつたのはいいけど本当に良かつたのかい？」

イツセーはアーシアを心配するがアーシアは迷いのない顔で

「私が決めたからいいのです。私もイツセーさんたちと一緒にいて戦いたいです！」

「分かつた。じゃあアーシアには課題を出す

「はい！」

「アーシアには僧侶の力である程度魔法を覚えてもらうよそして

アーシアの最大の武器である回復能力の向上と回復出来る範囲の拡大で神器の聖母の微笑みを使って自身の能力を高め、最終的にはそれを俺みたいに弾丸のように飛ばすのを目指す！」

「はい！」

イツセーは祐斗とアーシアを修業つけると白音の場所へ行つた。

「ハツ！」

「フツ！」

イツセーは白音に光の弾を出し、肉弾戦での修業をつけた。
戦車の駒を持つ者の修業にしては一見地味だが少しでも油断したら
「きやつ!?」

「今度は上からの攻撃にも気をつけろ！こつちは数が少ないので質で
攻めるしかない！」

上空にセットしておいた光の弾を白音にぶつけた。が白音はそん
なに甘くない。

「なるほど、仙術で気配を察知してたか」

猫耳と尻尾が出ていた。白音は仙術を発動し、イツセーの攻撃の氣
配を察知し回避したがすぐさま元に戻る。

「ペース配分も完璧だ。そしてカウンターに蹴りを入れるのもグッド
だよ白音ちゃん」

イツセーは白音に出来る限り仙術を発動させないでペース配分を
考慮して戦闘能力を高めさせる修業をさせた。

「それじゃあレイナーレさんたち！」

「はいはい」

イツセーはレイナーレたちを呼び出して指示しようとすると。

「一人は白音ちゃんと地上で戦つてもう一人は白音ちゃんにたまに攻
撃して下さい」

「分かったわ」

「了解っす」

イツセーはレイナーレたち堕天使に頼んで次の黒歌の元へ行つた。

「ハツ！」

「行くにやん！」

イツセーは光の剣を生み出し、黒歌と模擬戦をした。女王の黒歌にはその高い性能を更に上げさせるために徹底的に基礎上げを望んだ。

「喰らうにや！」

「甘いっ！」

黒歌は仙術と魔法のフルバーストをイツセーに喰らわせようとするが光の剣で薙ぎ払い、黒歌に接近し斬ろうとするが

「クツ！」

黒歌は騎士の力を使つて寸での距離で躱すが服を少し斬られていた。

「ナメないで欲しいにゃん！」

黒歌は華奢な体見た目に反して戦車の剛力を使いイツセーに反撃をしようとするが

「ハツ！」

イツセーは光の壁を作り防御するが黒歌の猛攻はイツセーの光の壁を容易く壊す。

「もらつたにゃん！」

「まだだつ！」

「ふにゃつ!?」

イツセーは剣を地面に突き刺し光の弾を火山噴火のように発射した。

「うううイツセー少しは手加減して欲しいにゃん」

「何言つてんですか黒歌さん。あなたは女王なんですから部長と同じくらい頑張らないとゲームに勝てませんよ」

黒歌はイツセーに言うが事態が事態なので手加減をすることなどできない。下手をすると1人も倒せずゲームに負けてしまうかもしれないというつもりイツセーはゲームに重要な黒歌を鍛えている。

「それじゃあ俺は部長と兄さんのところへ行つて来ます。黒歌さんは少し休んでて下さい

「分かつたにゃ〜」

イツセーはゲームで鍵を握るだろうリアスと問題の一正が待つている場所へ行つた。

「それじゃあ部長はやはり徹底して基礎を固めてもらう上に全体的にレベルアップしてもらいます。そして兄さんは基本まで叩き上げるから覚悟してもらいます」

「分かったわ」

「ちつ」

リアスは素直に頷くが一正は納得していないのか子供のようにふてくされていた。

「まずは部長、あなたはバアル家の滅びの魔力を使ったウイザードタップと聞きます。ですがそのバリエーションが少ないので致命的です」

「ええ、今まで格上と戦ったことがないしバアルの滅びの魔力は誰にも負けないとthought思っていたけど以前のあなたと鳳凰の戦いで自分がいかに弱かつたか実感したわ」

イツセーはリアスがライザーのようにプライドが高く修業が進めないことを予想していたが事が進んで順調に進めたと思ったが厄介な人物が残っていた。

「最後に兄さん」

「……」

イツセーの目を合わせずただただふてくされていた一正だがイツセーは容赦なく現実を叩きつける。

「この中で一番弱いのは間違いない兄さんだ。兄さんは悪魔になつたばかりだし、何の戦闘もしていないから仕方ないと思う。けれど兄さんが持っている赤龍帝^{ブーステッド・ギア}の籠手は所有者が弱ければ単なる宝の持ち腐れだ」

イツセーの容赦ないアドバイスに一正は歯を噛み碎かんばかりに噛むがそれでもイツセーは止まらない。

「兄さんだつて分かるだろう？あのミラつて子は魔力や仕掛けもないただの棍で兄さんを沈めたんだ。俺の見立てが正しいならあの子はあの眷属の中で弱い方だと思う」

「……黙れ」

「だから兄さんには赤龍帝の籠手を禁バランス・ブレイク手化まで行かなくても格段に強くならなければならぬ。兄さんはこのゲームで鍵になるんだから」

「黙れよおおお!!」

イッセーのフォローは一正をかえつて逆上させた。

「部長、あなたは皆さんと同じ兄さんと俺と一緒に4日間修業してもらいます。この修業でお互い何か掴めるかもしません」

「分かつたわ」

「それじやあ兄さん。まずは「くたばれえええ！」フツ！」

一正は赤龍帝の籠手を発動しイッセーに殴りかかるが余裕で捌かれると同時に蹴りを入れられ逆に痛手を受ける。

「ハアアアアアアア!!」

リアスは滅びの魔力を全身に逆らせ何かをしようとしていた。このままでは明らかに危険だろう。

「よし、来い！」

イッセーは伸びている一正を巻き込ませないように位置を変え、光の力を総動員させ壁を作った。

「行くわよイッセー!!」

「その構えは!?」

なんとリアスはウルトラマンオーブになつたイッセーの光線技と同じ構えを取り滅びの力を全身から腕へ腕から手に集中させた。

「喰らいなさい!!」

黒い魔力がオーブの光線と同じ形で放出されその威力は普段放つている魔力とは桁が違うだろう。

「グゥゥゥ!!」

「ハアアアアア!!」

リアスはなんとか押し切ろうとするが

「オオオオ!!
「キヤツ!!」

イツセーは渾身の力で光の壁を強化してなんとか上空へ弾かせた。

「ハア、ハア、まさか俺の技を真似て魔力を一点集中させて放出するとは思いもしませんでした」

「フウ、フウ、私も伊達に上級悪魔じやないもの。朱乃と黒歌に頼んで稽古付けさせてもらつたのよ」

「強いですね部長。それに引き換え……」

イツセーは呆れた表情で兄の一正を見て計画を変えた。

「部長、兄さんを修業する時には常に女王に昇格させておいて下さい」

「分かつたわ」

イツセーは苦肉の策でリアスに頼むと、リアスは目を伏せて考え込むとしぶしぶ了承した。

勝利を望む者たち

「それでは修業も最終フェイズに向かいます！」

『はい！』

修業も4日過ぎ、イッセーの意気込みに全員が張り切るが一正はイッセーを殺さんばかりに睨みつけた。

「皆さんには俺と戦つてもらいます！ 王の部長キングと女王の黒歌さんにはサポートに朱乃さんたち堕天使が攻撃に参加するので気を引き締めて下さい！」

「あのイッセー？ それじゃあ今までの修業とあまり変わらないと思うんだけど」

リアスの質問に頷く一同だが全員の目が変わった。それはイッセーはとんでもないものを出したからだ。

「まさか……」

「そう、最終フェイズは……」

イッセーはオーブリングを翳した。

「ウルトラマンさん！」

〈ULTRAMAN TIGA!〉

一へアツ！－

イッセーはホルダーからウルトラマンのカードをオーブリングに通し、ウルトラマンを呼び出した。

「ティガさん！」

〈ULTRAMAN TIGA!〉

一チャツ！－

続けてウルトラマンティガのカードを取り出し、オーブリングに通してウルトラマンティガを呼び出す。

「光の力、お借りします!!」

〈FUSION UP!〉

一シユアツ！－ 一チャアツ！－

〈ULTRAMAN ORB! SPACIUM ZEPERION

!!

ウルトラマンオーブとなつたイッセーは全員を見る。

「まさか最終フェイズつて……」

「そう、最終フェイズは変身した俺と一対一で戦つてもらいます！」

オーブの言葉に青ざめる一同だがすぐに切り替わる。

「まずは僕からだ！ てやああ！」

祐斗は最初の頃より速くなつたスピードでオーブに斬りかかる。

「ハツ！」

オーブの体に刻まれた紫のラインが光るとそれを上回るスピードが出て祐斗の背後に回り攻撃しようとするが

「させるか！」

「何!?」

祐斗は剣を地面に刺したと同時に地中から剣を生み出し、オーブの追撃を阻止した。

「黒歌さんから聞いた君の技を僕なりにアレンジさせてもらつたよ」「いいぜ！ そうこなくつちゃ！」

祐斗は悪魔の翼を広げて空を飛び、オーブもまた空中へ向かう。

「ハアアアア！」

祐斗は修業で強化されたスピードでオーブを翻弄しながら斬ろうとするが

「スピードもよくなつたし意外な攻撃も良い。しかし……」

「なつ!?」

「まだ剣の鍊成が甘い。これじゃあライザーの攻撃を防げない」

オーブはスペリオン光輪で祐斗の剣を容易く真つ二つにした。

「クツ！ 魔劍創ソード・バ……」「遅い！」 グアツ!!

祐斗は新たな魔剣を作ろうとしたがオーブの強烈なボディーブローが決まり、地に落とされそうになるが

「まだだ！」

祐斗は痛みを堪えて高く飛翔し、オーブより高く上昇すると

「オオオオ!!」

「おいおい」

祐斗は巨大な魔剣を作り突き刺す形でオーブに突進をかけた。

「いくらパワーがないといつてもそれじゃあ自慢のスピードを殺す單なる自爆特攻じゃねえか！」

オーブはスペリオン光輪で巨大な剣を真つ二つにするがある違和感を感じた。

(感触が軽い?)

スペリオン光輪が魔剣を斬り裂き終わると祐斗はそこにいなかつた。

「まさか!?」

(よし、かかつた!)

祐斗は中身がない張りぼての剣を作り、巨大な劍作つたというオーブを油断させるための愚行を演じ巨大な剣で視界を封じさせて自身が透明化する魔剣を作りオーブに近づいて斬りかかる。

(もうつた!)

「見事だぜつ！」

「なつ!? グアアア!!」

祐斗はオーブが何故か自分の位置を把握していたのか分からず迎撃されてしまい、地面へ落ちた。

「やるじゃねーか木場！まさかあんな作戦を立てるなんてな」

「その前に教えてくれないかイツセーくん。どうして僕の位置が分かつたんだい？」

「その理由は風を切る音だ」

「風を切る？…………そういうことか！」

「そう、ステルスは良かつたけど攻撃するとき大振りに剣を振ると当然風が起こり位置が分かつてしまう。爆音が響いてる戦場ならともかく静かな自然の中だ」

オーブのアドバイスを真剣に聞く木場だが、同時に強い剣を作るための鍊成を考えていた。

「それじゃあ次は私にやん！」

5日目は黒歌との戦いオープと黒歌は空中で戦つており、凄まじい攻防を繰り広げていた。

「ハツ！」

「ワンパターンにや！」

オープはスペリオン光輪を放つが黒歌は余裕で避け魔力と仙術のエネルギーを練りながら騎士ナイトのスピードを駆使し、オープに肉薄する。

「喰らうにや！」

「甘い！」

オープはエネルギー弾をショットガンのように放ち範囲を広げた。「隙だらけでしてよ!!」

朱乃は隙ができる黒歌に雷光を放つが

「な、偽物!?」

黒歌の分身に驚く朱乃だがオープは分かつていた。

「そこだ！」

「フツ！」

オープはエネルギー弾を放つが黒歌は僧侶ビショップの力を使つて魔法を強化させた。

「追加よ！」

「喰らいなさい！」

「当たれっす！」

レイナーレたちは光の槍を生み出し黒歌に投擲し、黒歌の防御魔法陣はなんとか防ぐがヒビが入り始めた。

「これでラストだ！」

オープは光線を放ち魔法陣に直撃するとガラスが砕けた音がその場に響いた。

「いない!？」

黒歌はそこにいなく、オープと朱乃たちの視界から完全に消えた。

「どこにいるんだ?」

オーブは地上に降り地面に足をつけるが

「何!?」

「かかつたにゃん!!」

足をつけた瞬間、魔法陣がオーブを襲い拘束した。どうやら黒歌は多数に分身した後魔法陣を仕掛けていたらしい。さつきまでの攻防と回避でよく仕組めたものだとオーブは驚愕する。

「だけど肝心の硬度が少し足りないですよ!」

オーブの体に刻まれた赤いラインが光ると魔法陣は砕け、オーブは黒歌に肉弾戦を仕掛ける。

「にやつ！」

黒歌は戦車ルークの力を使つて応戦するがオーブのパワーと朱乃たちの援護で徐々に不利になる。

「ハツ！」

「ウワツ?!」

オーブは青い光線を使つて応戦するがオーブのパワーと朱乃たちの援護で徐々に不利になる。

「こんな「チエックメイト」参つたにゃん……」

黒歌は魔法で氷を溶かそうとするがオーブは拳を黒歌の前で寸止めしじどう足搔いても勝てないので降参した。

「女王の駒クイーンを上手く使えているのはとてもいいです。騎士のスピード、ビショップの魔法攻撃、ルークの頑強さを上手く使えてます。ですので残りの日数みつちりと俺と実戦してもらいます」

「ううう~了解にゃん」

黒歌は後輩であるはずのイッセーのスバルタさに唸るも気合いを入れた。

「当たつてください！」

「当たつてたまるか!!」

6日目は白音との実戦で白音は仙術を発動しながらオーブに戦車の剛力で攻撃するが、オーブは回避をしながら白音に攻撃する。

「火炎車!!」

白音はオーブに青い炎の車輪を放つがオーブは光の壁を作り白音の火炎車を防ぐがその姿を見た白音は笑みを浮かべた。

「ハアアアア!!」

白音は火炎車を発動したままオーブに突撃をすると自らの攻撃に手を突っ込む。

「ハアアアアア!!!」

「そんな手が!?」

白音は自分の手に炎を纏わせてオーブの光の壁に打撃を加えて光の壁にヒビを入れた。

「フシャアアアア!!!」

白音の攻撃はオーブの光の壁を容易く壊し本体を攻撃しようとするとが

「ウオオオオオオ!!!」

オーブの体に刻まれた赤いラインが光り、腕を組んで白音の攻撃を防御した。

「ハア、ハア……とんでもない技を生み出したね。壁を作らざるをえない技を出して持続させて壁の耐久力がなくなつたらそれに拳を加えて威力を倍増した攻撃をするとわ」

オーブは肩で呼吸しながら白音を褒める。

「にゃん♪」

大好きなイッセーに褒められ白音はご機嫌になる。

「それじゃあ兄さん、赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアも最初の段階まで覚醒したから次は譲渡の能力を目覚めさせよう」

「……分かったよ」

修業も7日目に入り一正は赤龍帝の籠手を発現し、女王に昇格しました。

「くたばれやああ!!」

「おいおい！まだ倍加が不完全だ!!」

「ウルセエ！俺が！俺が主人公なんだ！俺はオリ主なんだ！お前は主人公じゃないんだあああ!!」

一正是せつかく溜まつた力で魔弾を放つが照準せずに出鱈目に放つので無駄に時間が過ぎる。

「兄さん！とりあえず落ち着いて!!」

「黙れえええ!!」

一正是魔弾を放つと運が良くオーブに正確に当たるようなルートだがわざわざ喰らうほどオーブは甘くない。

「フツ！」

「テメエ当たれよ！せつかく狙つてやつたつうのに！」

「いいかげんにしろ！」

一正の子供のそのものの駄々にオーブは堪忍袋の緒が切れたのか変身を解いてイッセーに戻る。

「レーーティングゲームは実戦の試合だ！攻撃なんて相手がわざわざ喰らうわけねえだろうが!!」

「ウルセエ！そもそもお前の力が反則なんだよ！俺にもその力渡せ！」

一正是イッセーのホルダーに手をかけるが

「ギヤアアアアアアアアアアア!!？」

突然電撃が走り一正是吹っ飛ばされた。これは

「ウルトラマンさんたちが怒つているのか!?」

イッセーはホルダーを見ながら予測をしていたがそれよりある感情が支配した。それは

「兄さん…………なんで分かつてくれないんだ！」

(相棒……俺もいいかげん思い出して欲しいよ)

兄の愚行に弟は嘆くばかりだがそんなイッセーに助けを求めるよう

にドライグは嘆いた。

「それじゃあ部長！あなたを徹底的に鍛えます!!」

「手加減はしませんわよ！」

「行くわよ！リアス・グレモリー!!」

「張り切るつす!!」

「容赦はしませんわ!!」

オーブに変身したイッセーを筆頭に朱乃たち堕天使はレーティングゲーム最大の弱点でもある王のリアスをライザーに勝てるようには鍛えようとする。

「来なさい!!」

リアスも魔力を纏い、イッセーたちと本気の戦いに臨む。

「ハツ！」

「ただの魔弾じゃあ話になりませんわよ！」

朱乃是雷光を使いリアスの滅びの魔力と相殺させようとするがリアスは明らかに何かを狙っていた。

「拡散！」

「な!?」

「まさか!?」

オーブと朱乃是拡がった魔力に驚いたが紙一重に躲したがリアスは更にオーブたちを驚愕させる。

「続きはこれよ！」

リアスは滅びの魔力を円盤のように丸くする。この技はオーブが散々放つた技だ。

「あれって……」

「イッセーくんの」

「スペリオン光輪!?」

「そんなものまで!?」

「円盤みたいだけど明らかにヤバイっす！」

狼狽える墮天使だがオーブはリアスが自分の技を真似ているのは知っていたのでなんとか平常を保つた。

「スペリオン光輪！」

リアスの円盤とオーブのスペリオン光輪がぶつかり合い爆発が起ころうがこのチャンスを逃すリアスではなかつた。

「ハアアアアア!!!

滅びの魔力を全身に漲らせ、腕に集中させ最後に手の部分に集めてある構えを取る。

「どうどうモノにできのたのね」

「あんな技まで!?!?」

「悪魔なのに十字つすか!?!?」

「ただの上級悪魔じゃなくなるわね」

朱乃たちはリアスを賞賛しオーブもそれに応えるつもりか同じ構えを取る

「スペリオン光線!!」

「喰らいなさい!!」

光線と魔閃がぶつかり合い、さつきの爆発と比べ物にならないくらいの衝撃がその場に拡がつた。

「それじやあ俺が教えるのもここまでです！皆さんの勝利を願います！」

「負けないでください！」

「頑張ってね！」

「最後まで油断しないで！」

『はい！』

イッセーたちはレーテイングゲームを鑑賞することができるV.I
Pルームでリアスたちをゲーム開始まで見送った。

「あれなら勝てるな」

「そうね。よほどの油断とミスさえしなければリアスたちは勝つわ」

「ただ……大丈夫なのイッセーくん？」

レイナーレの言葉を察したのか気まずくなるメンバーだ。おそらく

く

「兄さんがどうなるか……か」

一正が暴走して眷属の邪魔になるかもしれない。今までの行動を見ると一目瞭然だ。

「味方になつてくれないだろうが神様に祈るとしましようか」

イッセーは神にリアスたちが勝てるよう祈った。

敗北の謎

『リアス・グレモリー様のリタイアを確認……このゲームライザー・フェニックス様の勝利です』

リアスは炎に包まれ涙を流し、唇を動かしながら光の粒子となつた。

「どうしたことだ？」

イツセーの言葉はレーティングゲームの結果ではなかつた。むしろその過程に疑問を持つた。

「あれだけの攻撃を受けてなんで平氣だつたんだ？」

これまでの流れはこうだ

序盤戦で白音、一正が体育館で3人の^{ボーン}兵士と戦車と戦い、逃走したと油断させ黒歌は体育館ごと仙術と魔力のフルバースト攻撃をしてリタイアさせた。

しかし相手の女王のユーベルーナ^{クイーン}が油断した白音と一正に攻撃し、2人は倒れたと思ったがそれは幻であり油断したユーベルーナに仙術で攻撃する白音と黒歌であつた。

倒れそうになるユーベルーナだが胸元から小瓶を取り出してそれを飲むと傷が完治しており、魔力も回復していた。

聞くところによるとフェニックスの涙という回復アイテムで傷はおろか魔力まで全回復させるらしい。

形成逆転かと思いきやユーベルーナの腹部に剣で貫かれたような傷ができ、ユーベルーナはリタイアした。祐斗が透明化して油断したところに一撃で仕留めたのだろう。

そして黒歌は3人と離れライザーと戦うためにリアスと合流する。倍加の力を温存していた一正は祐斗と白音に譲渡し、残りの僧侶と兵士を一気に殲滅させたが金髪のツインテールの少女はライザーの元へ行つた。

最後にライザーと集団戦をするオカルト研究部たちだがここからがおかしかつた。

一正の力で強化した黒歌と白音の合体仙術が直撃し、少しほ痛手を

受けたと思つたが何もなかつたかのようにならずもライザーがいた。

ならばと祐斗は魔剣を突き刺し地面から大量の魔剣を生み出してライザーを串刺しにするがライザーはなんとも思はないが祐斗は笑みを浮かべ指を鳴らすと魔剣が爆発した。どうやら魔剣は爆発する能力だつたりらしい。

油断からの不意打ちが決まり喜ぶ祐斗だが爆炎から炎が現れ、祐斗に直撃した。そこには傷を負つていらないライザーがいた。

アーシアは祐斗を回復させるがそうはさせないとライザーは回復中の2人に炎を放つ。アーシアは祐斗を回復させてすぐに突き飛ばし炎に当たりリタイアした。

リアスはアーシアの仇を取るために件の必殺技である滅殺の魔閃ルイン・クロスショートをライザーに喰らわし爆発した。追撃するため黒歌と白音は再び合体仙術を発動し、祐斗は強力な魔剣を作りそれを投擲し続ける。決まつたかと思ったがライザーは無事のままだつた。

ライナーは一正と祐斗に炎を放ち、黒歌と白音そしてアーシアには腹部に強烈な打撃を与えるリタイアさせた。

必殺技を放ち疲労困憊のリアスに強力な炎を放ちゲームを終わらせた。これがゲームの過程と結果だつた。

「おかしいわね、あれだけの攻撃をまともに受けたのなら最上級悪魔でも倒れるはずよ」

レイナーレの言葉に納得する一同だがそれでも納得出来ない部分がある。

「俺は何も出来ないのか!?」

「俺は何も出来ないのか!?」
テープルを殴り粉々にするイッセーだがこちらからは何も出来ない。

「イッセーくん、私たちではどうすることも『…………失礼します』
朱乃はイッセーを励まそうとするが知つていてる声に口を噤んだ。
「グレイフィアさんとあなたたちは…………」

グレイフィアと共に現れたのはスーツを着た男性と龍の顔と馬の体をした生物と大柄な男性と背中に忠と書いた侍の格好をした男性とメガネをかけた男性と見知った顔がいた。

「レイヴエル・フェニックスです」

そう、この子は確かライザーの眷属として戦っていたはず。なのに何故ここにいるのだろう。それより

「フェニックス？」

「ライザー・フェニックスの妹です」

「なるほど道理で。しかし兄と違つて君は貴族らしいね」

「痛みります」

レイヴエルは申し訳なさそうに会釈する。

「これでリアス様とライザー様の結婚が決まりました」

「それは分かっています。何故わざわざ報告に？」

グレイフィアは無表情のまま

「あなたたちが結婚に納得せずその邪魔をしないようにと釘を刺しに来たのです」

グレイフィアの言葉に怒る朱乃たちだがイツセーは変わらない表情で

「ライザー・フェニックスはあんなに強い人だったのでしょうか？あれだけの攻撃を受けて平気なんていくら不死身のフェニックスでも少しのダメージもないなんて不自然だと思いますが」

イツセーの鋭い指摘で何故かレイヴエルは氣不味い顔になる。何か罪悪感を抱えているようだ。

「その顔、もしかして彼は不正行為を働いたのでしょうか？」

イツセーの追求にレイヴエルは顔を沈ませるがイツセーは2人を余所にVIPルームを出て行こうとする。

「どこへ行こうとしてるのでしようか？」

グレイフィアを殺氣を出して言うがイツセーは止まる気はなかつた。

「あんな卑怯者に部長と結婚なんてさせません。あんな男と結婚したら部長が不幸になるだけです」

「この結婚は悪魔の未来を決める大事な結婚です。あなたが『聞け』なんことが繰り返されるから誰かが不幸になるんだよ」

イッセーの言葉にグレイフィアは憤慨すると誰もが思つた。しかし

「フフツ」

「何がおかしい？」

突然のグレイフィアの笑みにキツく返すイッセーだがグレイフィアはそんなことを気にもせず

「申し訳ありません。あなたを試させてもらいました」

「俺を……試した？」

グレイフィアの言葉に一瞬戸惑うイッセーだがグレイフィアは続けた。

「あなたがもし力に溺れた者ならコレを渡さず結婚が終わるまで私たちが命を懸けて阻止をしました。しかしあなたは自分の為ではなく誰かの為に怒る。そんなあなたなら託せます」

「これは!？」

グレイフィアがイッセーに渡したのはパーティーの会場へ行くためのチケットと頭に2本の角が生えた赤いウルトラマンのカードだつた。

「イッセー様…………これを使つて兄を止めてください」

レイヴエルが渡したのは赤と銀が基調で胸から足にかけて赤いライインがあるウルトラマンのカードだ。おそらくこれが

イッセーは2人からカードを受け取ると視界が白くなつた。

「君ならそう言うと思つたよ」

「やはり君は僕たちのように誰かの為に戦える人ですね」

目の前に光太郎とミライが現れイッセーのさつきの言葉をグレイフィアのように賞賛する。

「光太郎さん、ミライさん、俺に力を貸して下さい！部長を助けたいんです！！」

「ああ！」

「行きましょう！イッセーくん!!」

「イッセー様、聞いて下さい」

視界が元に戻ると同時にレイヴェルはあることをイッセーに伝えるとイッセーは怒りの表情になり、ウルトラマンたちのカードも怒っているのか強い光を放つ。

「なるほど合点がいった」

イッセーは鬼のような表情になり会場へ向かつた。

紅の炎

「始まつちやつたね」

「悔しいですね」

「私も同じですよ」

「同感にや」

祐斗、アーシア、白音、黒歌は悔しい思いに耐えながら自分たち主の結婚を見送るしかなかつた。

「残念でしたね」

祐斗たちが振り向くと黒いショートカットの眼鏡の少女がいた。

「会長」

「あなたたちの戦いは見事でした。しかし今一步ライザーダンに及ばず惜しかつたですね」

祐斗たちは未だに納得できなかつた。なぜフェニックスとはいえあんなに攻撃を受けたのに無事でいられたのか？それにあんなに余裕でいたのはなぜなのか？

祐斗たちの疑問を余所に始まつてしまつた。

「皆様、私はライザー・フェニックスの『その結婚、異議あり!!!』

急な登場に驚く悪魔たちだが祐斗たちはその声を聞くと待つていだと言わんばかりに微笑んだ。

「なんだ貴様は！」

「せつかくの神聖な儀式を邪魔するな！」

兵士の服を着た悪魔たちがイッセーを取り押さえようとするが「待ちたまえ、彼の行為は私が頼んだものだよ。それとグレモリー眷属と彼とライザーケン以外出て行つて欲しい」

紅髪の青年の一言に兵士たちと他の悪魔たちは渋りながらも大人しく立ち去つた。

『サービスクス様！？』

サービスクスの登場と彼の言つたことに一同は驚くがライザーは

サービスクスを説得しようと近づいた。

「サービスクス様、これは一体どういうことでしょうか？私は条件通り

リアスと戦い、勝利しました。それには何の問題もないのでは?」

「反則の勝利なんて問題しかないと思うが?」

イッセーの一言にライザーの顔色は彼の服装と真逆の青色になる
がリアスたちはイッセーが言つたことに疑問が出来た。

「反則? イッセー、どういうことなの?」

「それからは私が言います」

「待て……ウグッ!」

レイヴエルが事の顛末を話すのを阻止しようとライザーだが
イッセーは光の剣を作りライザーの首元に当てがう。

「お兄様はフェニックスの涙を不正に使いましたの。あなたたちに残
り2つを兄様からリアス様へ送ろうとしました。しかし」

「部長たちはライザーが予想出来ていなかほど強くなっていた。だか
らコイツは元々持っていたフェニックスの涙1つと部長たちに渡す
涙2つをバレないように使用していた」

イッセーとレイヴエルが話したのが真実だつたらしくライザーは
床に這いつくばつた。

「情けないな、反則使わなきや女1人を手に入れられねえなんて
……テメエはそれでも男か!?

「そこでだライザーくん、無様な君に最後のチャンスをあげよう」

サーベクスから与えられた最後のチャンスに地獄に仏と言いたい
ほどライザーの顔は輝く

「この兵藤一誠くんを戦い勝利したら今回の件は目を瞑つてあげよ
う。しかし負けたらリアスとの結婚はなしだ!」

サーベクスもライザーの反則について相当頭にきたらしく、リアス
と同じ滅びの魔力が溢れ出た。

「い、いいでしょう。小僧!・さつさと表へ出ろ!」

ライザーの傷付けられたプライドの怒りは格安の線香花火のよう
なくだらない逆ギレの火の怒りだが

「……」

イッセーの内包する誰かの為に怒る誇り高き憤怒は地獄の?のよ
うにウルトラマンたちと共に燃え続けていた。

「イッセーくん」

「行きましょう、あの卑怯者を倒しに」

「ハイ！」

イッセーは頷きながら返事をすると同時に、光太郎たちの体が光輝き本来の姿へと変わる。

「私の名前はウルトラマンタロウ！」

光太郎は2本の角が生えた赤いウルトラマンになり

「僕の名前はウルトラマンメビウス！」

ミライは赤と銀のウルトラマンとなつた。

「小僧！貴様を殺してリアスを手に入れてやる！」

ライザーの三下漂う声を無視し、イッセーは怒りに体を震わせながらオーブリングを翳すとイッセーの周囲は黄色が混じつた宇宙空間となる。

「タロウさん！」

ULTRAMAN TARO!<

一タアアア！－

グレイフィアから渡されたカードをオーブリングに翳すと、赤い輝きと共に飛び立つた光の粒子がイッセーの左後ろに集まると”大いなる意思と力を受け継いだ巨人”【ウルトラマンタロウ】となる。

「メビウスさん！」

ULTRAMAN

MEBIUS!<

一セアツ！一

今度はレイヴエルから受け取つたカードを繋すと変換された白い光の粒子が右後ろに飛んでいき、『無限の進化を遂げ続ける巨人』【ウルトラマンメビウス】が現れると、輪の部分が赤と白の光を放ち始める。

「熱いやツ、頼みます!!」

広げた両腕ごと左に身体を捻つた後に掲げたオーブリングのトリガーを押す。

♪FUSION UP!♪

一タアア！一 一セアツ！一

オーブリングの輪が赤、白、黄の順に輝き、光に包まれたイッセーとそれぞれ赤と白のオーラを纏つたタロウとメビウスが重なる。

そして光が霧散すると、新たな姿が出現する。

赤く彩られた体には胸から肩にかけて炎を彷彿させる金色の模様があり、頭部には雄々しき双角を持つていて、額のクリスタルは黄色く輝いている。

それは師弟が紡いだ燃え盛る炎の絆を体現した姿。

その名は

♪ULTRAMAN ORB! BURNMITE!!♪

一ウルトラマンオーブ・バーンマイト。

戦士は水の波紋から生まれた炎のメビウスの輪による爆発と共に時空間から飛び立つと、不死鳥の名を持つ悪魔と対峙するように降り立つ。

「紅に……燃えるぜ!!」

「姿が変わつたところでフェニックスの俺に人間が勝てるわけねえだろうが！」

ライザーはオーブに自身が持つなかで最大の炎で攻撃するが何も脅威を感じなかつたのか戦士はそれを避けなかつた。

「ハハハハハ!!やつぱり人間のガキがフェニックス……につ!?」

高笑いするライザーを襲つたのは炎を纏つたオーブの拳で重く銳

い拳がライザーの幻想と共に顔面を貫く。

「グボオオ!!」

「フンツ！」

「ガツ！ギツ！ゲエエエ!!」

オーブの攻撃の衝撃に耐えられず吹っ飛ぶライザーだが、オーブは体を捻りながら高く飛び強烈な蹴りをライザーの顔面に放ち、その反動で高く飛び今度は鳩尾に蹴りを入れ反動でライザーのどてつ腹を蹴つた。

「苦しいか？この蹴りはお前が不正に使ったフェニックスの涙の分の蹴りだ。そしてこれは」

「ヒツ!?」

オーブは炎を四肢に纏い、ライザーに接近する。ライザーから見えてみれば地獄の鬼が炎と共に襲ってきたと思うだろう。

「グボオツ！」

「弱いながらも必死にサポートをした兄さんの分！」

右の拳がライザーの顔面を穿つ。

「ゲバアア！」

「戦えずとも皆を必死に癒して戦つたアーシアの分!!」

左の拳がライザーの鳩尾を刺す。

「騎士として剣を振り続けた木場の分！」

「ガツ！グツ！ゴボオ！」

炎のラツシユがライザーの肉体を削る。

「姉妹協力して仙術で戦つた黒歌さんと白音ちゃんの分！」

「ヒギイ！」

ドロップキックがライザーの体を歪ませる。

「そしてこれは！」

オーブは拳を握り締めて両腕を上げ炎を集中させるとライザーは見る影もない顔を晒しながら

「みや、みやて！きよりえはあきゆみやのみりやいでや！おみやへのりょうにやぎやきぎや」

「皆と修行で強くなつてテメエを倒すつづう願いを踏み躡られ最後に

泣いて謝った部長の分だああああ!!!

ライザーの言い訳も虚しくオーブは巨大な火の玉を作り終えていた。

「ストビュームバーストオ!!」

「―――!?」

巨大な炎の玉はライザーを包み込むと爆発し城の中まで吹っ飛び無残な姿になっていた。

「お前みたいな悪魔なんかが増えたらそれこそ悪魔は滅びに近づくだけだバアカ」

オーブは変身を解いてイツセーの姿に戻りリアスに近づいた。

「どうして?」

「え?」

リアスは泣きながらもイツセーに近づいた。

「どうして私を助けたの?私はあなたに何もやれてないのに……強くしてもらったのに負けちゃつたのよ?なのになんで「あなたには」?」

「あなたには兄さんを助けてもらいました。これは悪魔の対価です」

「そう……「なんてね」?」

イツセーの少し冷たい言葉にちょっと残念な気持ちになつたが
イツセーは

「他の悪魔だつたら別にどうでもよかつたです。でも部長だから俺は戦えたのです」

「え………」

リアスの顔は自身の髪の毛に負けないくらい赤くなり顔を伏せた。

「部長は最高な女人の人なんですから。だから部長は誰にも渡しません」

「!」

イツセーの告白まがいの言葉にリアスは少女のような顔になりそして

「んつ!」

「んぐ!」

リアスはイッセーに初めての唇を捧げた。

「イッセー！ありがとう！」

リアスは年相応の笑顔でイッセーに笑い抱きしめた。

「……」

気絶したイッセーに気づかないまま

それぞれの思い

『俺の名はオーブ！闇を照らして悪を撃つ！』

ちがう、お前の名前はそんなんじやない

『紅に燃えるぜ！』

ちがう、お前が使う炎はそれじやないんだ

赤龍帝ドライグがこれまで見たのは目を覆いたくなるような光景ばかりだつた。

それは本来の相棒である兵藤一誠が自分ではなく今まで見たことのない力を使つていたからだ。

「ウルトラマンとかいう名の相棒は力を発揮していないな。もし発揮していたら近くにいたリアス・グレモリーたちは巻き添えを喰らつていただけではなく、その気になれば大陸を1日足らずで滅ぼせる」

ドライグはその実力と戦った経験があつてかイッセーが持つていた力の潜在能力を実感していた。

おそらく全盛期の自分でも勝てないだろう。勝てるとすればグレートレッドかオーフィスしかいない。だけど

「相棒はあるの力を恐れている」

イッセーは自分が持つている力を怖がっていた。異形の姿になるだけではなく、ただの人間が持つには余りにも強すぎる。

「……だけど相棒はやつぱり相棒だ！」

ドライグはイッセーが誰かのために戦うのは生前と変わらないと希望を持っていた。しかし希望が来れば絶望も来る。

『ドライグ！いい加減力を貸しやがれ！』

絶望の名は兵藤一正。イッセーの兄であり、どういう方法を使つか知らないがイッセーからドライグを奪つた張本人だ。

「なんでだ……なんで相棒から離れただけじゃなくこんな奴が宿主なんだ」

今まで人間を見てきたがこんな奴は今まで宿つた人間よりタチが悪い。自分とのことしか頭になく、自分を誰よりも思つてゐる弟を認めずにただ嫉妬をするだけだつた。

「俺も嫉妬しているがな」

イッセーの相棒は自分だけのはずなのにワケの分からぬ力に頼つているイッセーの姿にこれほどない絶望を感じていた。

「ハア、私までイッセーのことを好きになるなんてね」

リアスは胸に秘めている少年のことを思い出すと顔を赤く染めて、枕に顔を埋めてベットに転がる。

最初は兄思いの優しい心を持つた少年としか思わなかつた。

『この力を扱うのは臆病なくらいがちようどいい』

その次は自分より年上ではないかと思うくらい力そのものについて理解していた。その力は人々を救うことも出来るが壊すことも出来る。それを確かに実感している顔をしていた。

「それに……あんなことを言われたら……」

『部長は誰にも渡しません』

その一言を放つた少年は未だ恋を知らなかつたりアスに初恋というものを教えた。

「あの時もうダメかと思つたのに」

自分がレーティングゲームに負けて散々お世話になつたイッセーに涙を流しながら謝つたのを思い出す。

「だけどあなたはそんな情けない私を助けてくれた」

鬼のような顔でオーブに変身してライザーに自分だけではなく眷属たちの分まで殴つたり蹴つたりした。

「イッセー……あのカードは私との運命の赤い糸でもあつたのね」

リアスは子供の頃にいつの間にか持つていたタロウのカードをそろ解釈するが白音と黒歌と朱乃の存在を忘れている。

「イッセー……絶対に堕としてみせるからね♪」

リアスは心に誓い明日早くイッセーに会うために寝た。

「あの方が私の運命の人……」

レイヴエルは秘密裏に撮ったオーブになつたイッセーとライザーの戦いの映像を見ていた。

自分の兄がボロ雑巾のように痛めつけているイッセーに対して何の恨みも持つておらず、むしろイッセーの戦いぶりに惚れ惚れしていた。

「あんな素敵な殿方……このまま他人のままなんてイヤですわ。どうにかしてお近づきになりたい……」

レイヴエルはフェニックスの名の通り胸に秘めた熱い炎が燃え盛る中イッセーに恋い焦がれていた。

「眷属にできないでしようか？でもリアス様はすでに眷属にしていそ
うです」

レイヴエルはなんとかイッセーと一緒にいたいと望む。可能であれば親しい関係になりたいと思っていた。

「それにしても……」

レイヴエルは憂鬱な顔になりながらある部屋の扉を見る。

「情けないですわ……リアス様に倍の涙を渡してそれでも勝つと豪語していたのにあまつさえそれを使つて反則勝ちなんて恥ずかしいです」

引きこもつているライザーがいるであろう部屋を見ながら頭を抱えていた。

「ああ、みんなも元気でね」

とあるマンションの一室で木場祐斗はある人たちと連絡を取つていてポケットから青と赤のウルトラマンのカードを出した。

「ゼロさん、あなたをイッセーくんに渡します」

イザイヤは自分たちを救つてくれた恩人に自分の主を救つた恩人にこのカードを託そうとした。

「それにしてもすごい驚いたなあ。まさかゼロさんの他にもウルトラマンがいたなんて」

祐斗はオーブのこれまでの戦いを思い出しイッセーを賞賛するがある疑問が募つた。それはイッセーのカードを渡した人物についてだ

「確かスペシウムゼペリオンのウルトラマンさんが白音ちゃんと黒歌さん、ティガさんが朱乃さんだった。だけどなんでバーンマイトのタロウさんはグレイフィアさんが持つていたんだろう? メビウスさんだつて誰が渡したんだ?」

カードの詳細について悩む祐斗であつたがウルトラマンゼロは答えてくれない。

「なあイリナ、そのカードは一体何なんだ?」

青いショートカットに緑のメッシュを入れた美少女は茶髪のツインテールの美少女に聞いた。

「これ? これはイッセーくんとの繋がりだよ」

イリナと呼ばれた女の子はウルトラマンに似たカードを見ながら自分の幼馴染との再会を楽しみにしていた。

「……イリナ、私たちは仕事のために来てるんだから私情を挟んじやいけない。それに本来私たちは裏の住人だ。そいつとはあまり関わるな」

「ゼノヴィア、そんなこと言わないでよ。私はイッセーくんに会える

までずっと待つてたんだから」

「やれやれ、少し会うだけだぞ」

ゼノヴィアは嘆息し、親のようにイリナに許可した。

使い魔の森

「使い魔？」

「ええ、あなたは眷属じやあないけど持つていても損じやないし、疑つているわけではないけどオーブの力だけじや心許ないかと思つて」「……分かりました。それじゃあ俺も行きます」

リアスの提案に首を傾げるイッセーだが厚意を無下に出来ないので参加する。

「リアス、終わつたかしら？」

「ええ、今終わつたところよソーナ」

現れたのは眼鏡をかけた黒髪のおかっぱに近い髪型の少女と茶髪の青年だつた。

「確かあなたは生徒会長の……」

「はい、人間界では支取蒼那と名乗つてますが本名はソーナ・シトリーです。こちらは兵士^{ポン}の匙元士郎です」

「よろしく」

匙と呼ばれた青年は頭を下げ挨拶しイッセーも挨拶しようとする

「兵藤一誠です。悪魔ではありませんがよろしくお願ひします」

イッセーの挨拶にソーナは頷くが匙はおかしそうにする。

「悪魔じやないのになんでこんなところにいるんだ？」

匙の少し失礼な質問にムツとするリアスだがソーナはそれをフオローする。

「匙、失礼なことを言わないように。兵藤くんはただの一般人ではありません。だからこの場にいるのです。それに……」

ソーナはイッセーを一瞥し

「彼は上級悪魔のライザー・フェニックス氏を圧倒し、フェニックス氏がイカサマしなければリアスたちは負けずに勝つていたほど強くなつていました。その修行をしたのも彼のおかげなのです」

「ええ!あのプロのフェニックスを圧倒したんすか!?てつきりイカサマがバレて結婚が中止になつたと思つたのに!」

匙はイッセーを見ながら驚くと機嫌をよくしたのかリアスはフフ

ンと鼻を鳴らす。

「そう言えば使い魔はどうやって手に入れるのですか？」

「ああ、それはねーー

「イッセーさん！ よろしくお願ひします！」

「こちらも頼むよアーシア」

既にアーシアたちは使い魔の森に来ていたらしくイッセーたちが来るまで待機していた。

「そのドラゴンがアーシアの使い魔なのか？」

「ハイ！ 蒼雷龍のラッセーくんです！」

アーシアは青い小さなドラゴンを抱きかかえながら説明した。

「それじゃあ……誰だつ!?」

「うおつと!」

イッセーは気配を発していた木の枝にいたナニかに光の弾を発射したがそれに驚いた者が木から飛び降りた。

「おいおい、随分とファンキーなことをしてくれる坊主だぜい！」

「あんた誰だよ?」

イッセーは自分の攻撃を躱したからただの相手ではないと察したのか光の剣を生み出し、構える。

「落ち着いてイッセーくん！ この人は使い魔のプロフェッショナルのザトウージさん！ 敵じゃないからやめるんだ！」

「え、 そうなの？」

祐斗はなんとか羽交い締めをしてイッセーを止め、イッセーは光の剣を消した。

「ふう、驚かそうとしたらこっちが驚かされるとは思わなかつたぜい」「すいません、敵だと思ってつい……」

「ああー、いいつてことよ。それにしても気配を絶つた筈なのにピンポイントで当てるとはかなりの実力者だな?」

「いえ、それほどでも」

ザトウージはイツセーを褒めるがイツセーは自分はまだ未熟だと自覚しているので素直に受け取れなかつた。

「それで今回のお客はかなりの実力者の男前に金髪の美少女シスター、それと冴えない茶髪の二人組かい」

冴えない二人組という言葉に反応する一正と匙だがイツセーの実力を知つているからか文句が言えなかつた。

「それじやあどんな使い魔にする？強いの？速いの？それとも毒持ちかい？」

「イヤ、初心者に優しいものをお願いしますよ」

「同じく」

「お願いします」

「へいへい、しょーがねーな。美少女シスターが頼みとあつちやあ断れねえぜい！」

一正と匙とアーシアがお願いするとしぶしぶザトウージは案内した。

「……使い魔つて随分個性的なものが多いんですね」

イツセーがこれまで見てきたものはボディービルダー選手大会で優勝できるほどの筋肉の鎧を纏つたワインディーネと主ですら殺しかねない凶暴な猛毒ヒュドラだった。

「イヤ、アイツらは本来出て来るのは稀なんだぜい」

「どういうことですか？」

イツセーが聞くとザトウージは顎をさすり

「さつきまでのアイツらはまるで何かから逃げているようだつた。そんじよそちらの雑魚じやあ返り討ちにしてしまうほど強いアイツらが逃げるとなると魔王クラスの実力者がいるかもしけねえ」

ザトウージが使い魔のリストを取り出しリストからある魔物の写真を見せながら説明する。

「龍王最強のドラゴン天魔の業龍^{カオス・カルマ・ドラゴン}ティアマット。性別はメスだがコイツは魔王ですら敵わないと言われるほどの強さを持つていて」

ザトウージは険しい顔になりながら青いドラゴンの写真を見せる。一同も最悪期のケースを予想したのか全員が身構える。

「ティアマットは赤龍帝を恨んでいてその所有者を殺そうとするほどだ。そのティアマットは……」

ザトウージが振り返るとそこには

「そうそうコイツがティアマット…………でええええええ!?」

さつきまで説明していたザトウージはティアマットを見るなりイッセーの後ろに隠れる。

「待ってください、このティアマット……」

「なんでこんな傷だらけなんだ!?」

イッセーはティアマットの体を見るが匙は驚いていた。

「アーシア!とにかく治療を!」

「は、はい「いらない!」

アーシアはティアマットを治療しようとするとティアマットはなげか断つた。

「お前ら…早く逃げろ!」

「逃げろ? 一体どういう……うわつ!?

突然大地が揺れたかのような地響きが起こつた。イヤ断続的に続いているとなると地響きではない。これはまるで「何か巨大な奴が来ている?」

イッセーの疑問に答えるかのように、ソレは姿を現した。

「ピポボボボボボボボ…」

「なに、アレ…」

リアスが、そう思うのも無理はなかつた。

現れたソレは滴に近い形をした山吹色の発光器官を持つ黒い胴体からは白と黒で彩られた四肢が伸び、顔には目や鼻がなく、胴体と同じ発光器官が縦に入つており、くの字に折れ曲がった角が頭頂部から

生えている。

イツセー達は知らなかつたが、その正体はかつてハヤタと同化したウルトラマンを倒したことから最強の怪獣とも言われた存在——宇宙恐竜 ゼットンであつた。

「ゼットオオン・・・」

「ソイツから離れろ！」

ティアマットが叫ぶより早くゼットンが足を出し、イツセーを踏み潰そうとする。

ズドオオン!!

イツセーがいた場所に怪獣の足が乗せられ、ティアマットはイツセーが死んだと思い目を瞑つた。

「テヤア！」

『ゼットーーン!!』

ティアマットは目を開けると長い生涯で見たことがない怪獣が見えたことがない巨人に蹴られ沈められていた。

「俺の名はオーブ！闇を照らして悪を撃つ!!」

オーブは追撃のスペリオン光輪をゼットンに放つ

パキン!!

「イッセーのスペリオン光輪が!?」

リアスたちが目にしたのはゼットンが両手の甲を伸ばすとバリアが発生しオーブのスペリオン光輪が簡単に碎かれてしまつた。

「ハアッ！」

オーブの紫のラインが光り一瞬でゼットンの距離を詰めて赤いラインの剛力でゼットンを攻撃しようとするが

「なつ!?」

『き、消えた!?』

オーブのパンチは空を切り、不発に終わるがオーブはゼットンを見つけるために周囲を見る。

「グハッ?!」

『ゼットーーン』

ゼットンは体当たりを仕掛け、オーブを押し倒す。

「グツ！」

「イッセー！」

リアスの攻撃を筆頭にソーナたちもそれぞれの攻撃をゼットンの背中に当てる。

「デヤア！」

オーブは膝蹴りでゼットンを引き離し距離を取る。

「スペリオン光……!?」

オーブはスペリオン光線の構えを取るがゼットンはバリアとは違う身構えをし、オーブは察知したのか攻撃を中断した。

『ゼットーノン』

「フンッ！」

ゼットンは一兆度の火球を放つがオーブは高く飛び後ろに回転すると同時に額のクリスタルと胸のカラータイマーを光らせる。

「タロウさん！」

ULTRAMAN TARO!<

－タアア！－

「メビウスさん！」

ULTRAMAN MEBIUS!<

－セアツ！－

「熱いやツ、頼みます！」

FUSION UP!<

－タアア！－ 一セアツ！－

ULTRAMAN ORB! BURNITE!!<

今姿では太刀打ち出来ないと分かつたオーブはスペシウムゼペリオンからバーンマイトに変えた。

「ハアツ！」

オーブは強烈な蹴りをゼットンに喰らわせ着地する。

「紅に燃えるぜ！」

オーブは拳に炎を纏わせ、ゼットンに炎のラッシュを叩き込む。

「ストビューム……何!?」

オーブはライザーを倒したストビュームバーストを発動するがま

たもやゼットンは瞬間移動をしてその場を消える。

「クソツ！どこ……グオオ!!」

オープの背中に火球が当たる。いくら炎のウルトラマン2人の力を借りているとはいえゼットンの火球はバーンマイトの耐熱を上回る。

『ピコン、ピコン、ピコン』

ータアツー ーシヤツー

オープのカラータイマーが青から赤に点滅しオープからタロウとメビウスが分離しかける。

『ゼット……!』

トドメを刺そうとするゼットンだが突然レーザーがゼットンに当たりゼットンは苦しむが更なる攻撃が襲いかかる。

『ギイ!』

『グオオ!』

『グオアア!』

ゼットンの足元に吹雪が当たり、身動きが取れないゼットンに2匹の怪獣がゼットンに体当たりを喰らわせる。

『新しい怪獣?』

リアスたちが目にしたのは4匹の怪獣だつた。

『クオオ!』

鳥の頭をした巨大なロボットのような怪獣

『ギイ!』

二本の長い角を持つた牛のような怪獣

『グオオ!』

1本の角を持つたトリケラトプスのような怪獣

『グオアツ!』

背中に無数の氷の棘を持つた怪獣

この4匹の怪獣はオープと並びゼットンを睨みつける。

「ありがとう!それじゃあ行くぞ!」

オープの言葉に頷いた4匹は散らばり、ゼットンを中心に五角形の

形となる。

『クアツ！』

鳥のロボットの怪獣は額からビームを放つがゼットンはバリアを張り無効化させる。

『ゼット……!』

ゼットンは歩き出すと滑り出した。よく見ると地面が凍つており、アイスバーンとなっていた。

どうやら氷の怪獣がゼットンがバリアを張っている隙に地面を凍らせていたらしい。

「喰らえ！」

『ギイ！』

牛の怪獣はオーブに持ち上げて貰い、上空からゼットンへのしかかるがそれだけでは終わらない。

『ギイ！』

牛の怪獣から電撃が放たれ、ゼットンは徐々に苦しみ出す。

『クアー！』

鳥のロボットは腕が変形し、銃のような形となり炎の弾丸をゼットンに喰らわせる。

『ゴアア!!』

トリケラトプスの怪獣は地中からゼットンに突撃し、ゼットンにダメージを与える。

『ゼットーーン……』

『トドメだ！』

オーブが構えを取ると体が発火し、地面を凍らせていた氷が一瞬で蒸発した。

『ストビュームダイナマイトイオ!!』

オーブの炎を纏つた体当たりにゼットンはダメージを負いすぎた体で避けることは出来ず直撃し、木つ端微塵となつた。

「スゲージやねーか兵藤!!アレならフェニックスを圧倒したのも納得したぜ!!」

「分かつた……分かつたからあんま叩くな。体に響く」

「あ、悪い」

匙は興奮の余りイッセーの体を叩き褒め称えるが、イッセーはゼットンのライザーの炎と比べ物にならないほどの火球を喰らつたのでダメージが残っていた。

『クアアツ!』

「どうやらアイツら4匹はお前さんの所に行きてえらしいぞ?」

「イヤ、4匹と1人だ」

ザトウージが説明するが突撃現れた青髪の美女が否定した。

「もしかしてティアマットさん?」

「ああ、私はティアマットだ。確かイッセーと言つたな?」

「はい」

イッセーが頷くとティアマットは近づきイッセーの手を取る。

「お前は何故あの時避けなかつた?」

「避けなかつた?」

リアスはティアマットの質問に疑問を感じていた。しかしティアマットはイッセーに問い合わせ続ける。

「あの赤い姿の時お前はあの怪獣に不意を突かれていたが、お前だったら避けることが出来た筈だ」

ティアマットは真剣な顔で問い合わせるがイッセーは当然のように「部長たちもいたしなによりアンタは怪我してただろう?避けれわけねえだろう?」

「ブツ、あははははは!」

ティアマットは笑いだしたがすぐに真剣な顔になりイッセーに跪いた。

「いいのか?」

「ああ、やつてくれイッセー」

ティアマットが言うと他の怪獣たちも頭を下げた。

「それじゃあ、これから頼む」

イツセーが手を差し伸べると4匹の怪獣たちは光だし、薬のアンプルのようなものに変化してイツセーの手元に渡りティアマットはオーブリングに酷似した紋章が右腕に宿つた。

月光校庭のエクスカリバー 悩める者と愚者の焦り

「ここにちは、イッセーくん」

「よつ、後輩」

「ウルトラマンさんたち……今度は誰があなたたちを持つてているのですか？」

イッセーの目の前に現れたのは茶色のライダースーツを着た白髪と髭が生えた長身の老人と民族衣装を着た黒髪のくせつ毛の青年だった。

「まあツレないことを言うなよ。そんなんじや俺たちみたいになるのは2万年早いぜ」

イッセーはゼットンの戦いで如何に自分が未熟なのかを痛感し、誰かを護るために強くなる必要があった。そのためウルトラマンたちに居場所を聞こうとするが青年にごまかされた。

「それはさておきイッセーくん、君は赤龍帝についてどれくらい知っているかな？」

「唐突に何を聞くかと思えば……10秒毎に自分の魔力や能力を倍加させることができる上にその倍加の力も他者に与えることができるんでしょ？」

イッセーは自分が持つているブーステッド・ギア赤龍帝の籠手の情報を言うと2人は呆れたように嘆息する。

「言い方が悪かつたな。君は赤龍帝の籠手に宿っている龍についてどれだけ知っている？」

「それって赤龍帝のことですか？」

「そうではあるがそうじやない。正確にはドライグのことだ」

「ドライグ？」

「お前はおかしいと思わなかつたのか？今まで赤龍帝のことなんて聞いたことがないのになんでそのドラゴンの名前を知っていたんだ？」

「それは……!?」

青年の問いにイツセーは疑問を感じるが突然何かが襲つた

『行くぜドライグ！』

『応！』

『

「イツセー（くん）！」

「ハツ！」

2人の声に目覚めたイツセーだがその顔色は明らかに良好ではなかつた。

「悪い、急すぎたな。だけどイツセー、いずれお前はドライグのことを思い出す。その時は覚悟しとけよ」

「……はい」

イツセーは呼吸を整えてその場を後にした。

「赤龍帝……ドライグ……

ムニユン

「あん……」

「え？ うわああああ!?」

手を伸ばすと手に柔らかい感触があつたので見てみると

「んんつ……イツセー……」

そこには全裸のリアス・グレモリーが寝ていた。イツセーが触ったのはリアスの豊満な乳房だつた。

「と、とにかく手を……」

イッセーは乳房から手を離そうとするが

「……触つて」

リアスに手を握られ強く押し付けられた。

「ちよつ、ぶ、部長!？」

イッセーは弾力溢れる柔らかさに戸惑うがリアスは顔を赤くしながらも笑いながらイッセーの耳元で

「私を……メチャクチャにして……」

リアスはイッセーを押し倒し唇に唇を近づけようとするが

「「「何をしているの（でしよう）（にや）（のですか）？」」「」

イッセーは顔色を悪くしながら振り向くとそこには背景に鬼を備えた美少女たちが誰もが見惚れるほどの笑顔で立っていた。

「えつと皆さん？これには深い理由が」「「イッセー（くん）（さん）（先輩）は黙つて」「すんませんした！」

少女たちの一言にイッセーは口を閉めて中からの騒ぎ声を無視しながら部屋を逃走した。

「なんでこんなことに……」

「クソッ！お前どうとう学園三大お姉様をコンプリートしやがって！
1人くらい分けやがれ！」

「俺に白音ちゃんを渡せこの野郎！」

「縛られてんのにそこまで元気なのは逆に驚きだよ」

イッセーは2人が懲りずに覗きをするので逃げているところを先回りして縄でふん縛つたがそれでも尚元気だったので呆れを通り越して感心していた。

『ありがとうイッセーくん！』

『どういたし まして、それじやあ後はよろしく』

女子のクラスメイトたちはイッセーにお礼を言うとすぐに変態2人を体育館へ連れ込んだ。

「ま、待つてくれイッセー！」

「友達だろう!? 助けてくれ！」

2人は地獄の蜘蛛の糸に縋るかのようにイッセーに助けを求めるがイッセーは菩薩のような笑顔で敬礼し

「骨は拾つといてやる。だから……逝つてこい」

変態2人は蜘蛛の糸が切れた罪人のような絶望の顔になりながら女子たちに連行される。

「あの……皆さん……そろそろ離れてくれま『イヤ』：：はい」

放課後部室へ行つたイッセーは朱乃と黒歌たちに強引にソファーに座らされ体は彼女たちの魅力的な体に触れているので顔を赤らめていた。

「あの、離れてくれ『イヤよ』」

朱乃たちにやんわりとお願ひするが朱乃たちはイッセーの言うことを聞く気がないのかますます密着し豊満なバストや柔らかな体の感触にイッセーはますます顔を赤くする。

「……イッセー」

「うわっ!？」

リアスの冷ややかな声にイッセーは振り向くと

「あなた……言つたわよね……『部長は誰にも渡さない』つてつまり私はあなたのものでもあり、あなたは私のものもある」

般若のような顔のリアスが仁王立ちで佇んでいた。

「それなのになんてあなたは私をほつたらかしにして他の娘たちにデレデレしてるとかしら!？」

「イテテ！痛いっす部長！耳が取れちやいます！」

イッセーはリアスに耳を引っ張られて痛がるが朱乃たちが密着しているので脱出できなかつた。

「部長、明日には球技大会控えてるのですが……」

「そろそろ終わらせて下さいよ」

「そりだつたわね。それじゃあ行くわよ皆！」

祐斗と一正の言葉を聞くとリアスはイッセーの耳を離し、ミーティングをするためにイッセーと一正の家に向かうよう全員に指示した。

「これが小さいイッセーね」

「かわいいです〜」

「私より小ちやくてかわいいです」

「今のイッセーはかつこいいけどこのイッセーは食べちゃいたいくらいかわいいにゃ～色んな意味で」

「ふむ、私たちは小さいイッセーなど知らないからな。これは新鮮だ」
球技大会のミーティングをするために一旦イッセーと一正の家に集まつたのだが急にイッセーの母親がアルバムを持って來たのだ。

「おい祐斗、いい加減離せ」

「ゴメンね、部長たちにイッセーくんが暴れないように止めておくよううに言われてるんだ。そうしないと僕は殺されちゃう」

「…………分かつたよ」

祐斗が青い顔で説明するとイッセーも乙女たちの怒りの恐ろしさを知つてゐるのか祐斗に同情した。

「そういうえばティア、アンタをボコボコにしたあの怪獣は一体何だったんだ？」

事を見計らつてイッセーはゼットンのことをティアマットに質問

するとティアマットは神妙な顔になるが無理もないだろう。

「お兄様に連絡したんだけど過去にもあんな怪獣の前例はないって

言っていたわ」

「他の神話の怪物は見て来たがあんなのどちらにも属さないな。それとイッセーが私以外に契約した怪獣たちも見たことがないものばかりだ」

リアスは魔王である兄に連絡をし、ティアマットはこれまで見て来た魔物たちと比較したが該当がつかなかつたらしい。

「イッセー先輩のスペリオン光輪がガラスのように碎けてしまうほど のバリアなんて考えもつきませんし、なによりあの図体で瞬間移動なんて神話の域を超えていますよね」

白音の説明は大きさだと思われるがあれば最上級悪魔どころか下手をすると魔王でも太刀打ち出来ない可能性があつた。

「もしかして、オープに関係あるのか？」

イッセーはオープリングとホルダーを見ながら言うとリアスたちは複雑な顔になる。これまでオープの力を頼ってきたのが裏目に出たのかかもしれないと思つたのだろう。

「まあ今悩んでも仕方ありませんし、いつかオープの全てが分かるかもしれません」

イッセーがフォローすると全員の顔が明るくなり、空気が変わつた。

「そういえば明日球技大会でしたよね」

「そうねそれじゃあポジションを決めるとしましよう……あら？ 一正、どこへ行くの？」

「あ、ポジションは部長が決めといて下さい。俺はドライグと意思疎通できるかどうか確かめたいんで」

一正是自分の部屋に戻るが、彼がいなくて精々する者と力を理解することに感心する者に別れるが誰も一正の瞳の奥に秘めたドス黒さは見てなかつた。

「ドライグ！テメエ本当は起きてるんだろう！」

（そうだが？）

一正は自分の部屋に入ると赤龍帝の籠手を展開してドライグに場違いの文句を言うがドライグ本人は何も言わず何食わぬような声で心の中で返事をする。

「テメエ一体何のつもりだ!? ロクに力も貸さねえし【譲渡】だつてギリギリだつた！俺はお前の主なんだぞ!？」

（奪つておいて何が主だ？）

「なんのつもりなんだよ!？」

ドライグは沈黙して一正の言葉にしらばつくれて『まかそうとする。

（お前は相棒…イヤ、弟の兵藤一誠から俺を奪い取りお前が相棒のフリをしているのが分からんかったのか？）

ドライグは一正にとつて最も知られたくないことを心の中で言うが一正に意味はないと理解しているがそれでも続ける。

（その上相棒を迫害し最終的に自分が手を汚さぬように自殺に導こうとするが猫たちによつてお前が迫害しているのを両親に見られ本性を知りあえなく自分の地位を壊した）

ドライグは嘲笑うように一正を馬鹿にするが一正は猫たちに殺意を抱いていた上に自分が持つていたもう一つの特典に怒りを抱いた。『なんで洗脳も効かねえんだよ!? アレはニコポやナデポと同じようにヒロインや念のためのモブキャラを味方につけようとしたのに!!』一正の道化の拍車の掛かりつぶりにドライグは心の中でますます悦ぶがそれでも満たすことは出来なかつた。

聖剣と幼なじみ

「行くわよソーナ」

「来なさいリアス」

球技大会当日、オカルト研究部の部長のリアスと生徒会の会長ソーナはテニス対決をしており終わりが近づいていた。

「小西屋の全トッピングのせうどん：絶対私のモノにしてやるわ！」

「それはコチラのセリフです。私だって絶対に譲りません！」

リアスとソーナは全力で打ち合うがラケットのガットが切れ

「ひ、ひええええええ！」

応援していた匙の顔面目掛けてボールが隕石のように向かってくるが

「フンッ！」

間髪入れずイッセーがボールをギリギリの距離でキャッチする。

「す、スマニイッセー」

「別に構わない。それとお二方、もうちょい手加減して打つて下さい」

「す、すみません」

イッセーの注意にへコむ2人であつた。

「案外呆気なかつたわね。確かに今回の標的はかなりのランクに位置していたと思つたんだけど」

リアスたちは大公から討伐の依頼をされたはぐれ悪魔が予想より弱かつたことに疑問を感じていたが以前のイッセーの修行のことを思い出していた。

「そ、らへんのはぐれ悪魔なんかに負けるほどヤワに鍛えさせてませんよ」

軽く喋るイッセーだが本当は今朝聞いた夢で出会つた黒髪の青年の真意について考えていた。そう、ドライグのことだ。

(俺は今まで赤龍帝という言葉はこれまでのことの流れで聞いたことはあるがそのドラゴンの名前なんて知つていなかつた。なのになんで俺はドライグと呼んだんだ?)

悩めるイッセーだが誰も答えることはない。ただ自分自身で真実を掴み取るしかない。

「先輩?」

「うわっ!?

心配した白音がイッセーの顔に近づく、が下手をするとキスができるほどの距離だつた。

「だ、大丈夫。だから離れて白音ちゃん」

「むう、人が心配してゐるのに釣れないことを言わないで欲しいですね」
白音は口を尖らせるがその表情には悪い感情は含まれていなかつた。

「早く行くわよイッセー!」

リアスは白音との会話にヤキモチをしたのかイッセーの腕を組み連行する。その光景を見たイッセーに好意を持つ者たちは羨望と嫉妬が含まれていた。

「ハア、ハア、ハア……」

「おやおやもうおしまいかね?」

夜の通路で剣を持った白髪の神父と老人の神父がいた。白髪の神父は息を切らしながら剣を老人に向けるが老人の表情は冷静そのものだつた。

「ふふふ、これでは聖剣の持ち腐れだね?」

「クソッたれがあああ!!!」

白髪の神父の剣にオレンジ色のオーラが宿ると神父は祐斗に劣らないスピードで老人との距離を詰め斬りかかるが

「相変わらず汚い口調だね」

「ガフツ！」

老人は見た目からは想像出来ないスピードで神父の腹に強烈な打撃を与え、神父が怯んだ隙に剣を奪つた。

「さて、聖剣を戴いたし次は君の命を貰おうとするか……ん？」

老人は聖剣を光らせてその場を離れると老人がいた場所に極太の光の槍が突き刺さつていた。

「予想より早く来たか。しかし問題はない」

「今度こそ捕まえてやる」

上空から現れたのは黒い長髪にエルフのような尖った耳、充血したような赤い目の墮天使だつたが羽の数はレイナーレや朱乃たちよりも多い12枚の黒い羽だつた。

「ふふ、いくら君でも足手まといを携えたまま聖剣を持つた私と戦うのは難しいだろう？」

「ちっ！」

老人は煽るように挑発するが墮天使は光の剣を創り出し白髪の神父を片腕で携えながら構えるがどう見ても墮天使側が不利だつた。「まあいい。せつかく聖剣が手に入つたんだこれで失礼させて貰うが残り3本の聖剣もいずれ手に入れれる」

老人は足元に魔法陣を作り潜るとその場から消えた。
「これで奴の手元に3本の聖剣が渡つたワケか。厄介なことになつた」

墮天使は忌々しそうに舌打ちをし、神父を携えながら空を飛ぶ。

「協会から伝令が来る？」

「ええ、そうよ」

リアスはイッセーにそう言うが

「確か悪魔と天使と墮天使は仲が悪くて何か切欠でもない限り接触し

ないんじゃ?」

「イッセー、表向きはそうだけど実際は違うわよ」

イッセーはリアスからこれまでの悪魔の歴史や三大勢力のことを聞いたのだが予想外の展開で混乱するが携帯の着信音で目を覚ます。

「あ、祐斗たちから連絡が来ました。今俺の家に着いていたけどもう1人が抜け出してここに駆け出して「イッセーくん!」うわっと!?」イッセーが携帯の着信メールを見ながら言うと突然背中から知らない者が抱きついた。

「この感触…やっぱりイッセーくんだ! 良かつたあんな最低兄貴の毒牙に負けないで!」

イッセーに頬ずりするがイッセーには何がなんだかさっぱり分からなかつた。

「イッセー、その子はなんなの?」

「いえ!俺この子と会つたことがありますんよ!」

「ひ、ヒドイよイッセーくん! 幼なじみに対してその言葉はないでしょ!」

リアスの霸気に威圧され咄嗟に答えるイッセーだが謎の来訪者はイッセーの言葉に涙を浮かべる。

「幼なじみ? もしかしてイリナ? イヤ、確かにイリナは男だつたはず…」

「女よおおお! この体を見れば分かるでしょ!」

「あ、このテンションの激しさ確かにイリナだ!」

イッセーは何とか幼い頃の記憶を思い出すが来訪者—紫藤イリナの涙は止まらず振り回されたままだつた。

「イリナ、やつと見つけ…どうしたんだ?」

「すいません部長、遅れました」
イリナと同じローブを着た緑のメッシュが入った青髪の美少女と頬に赤いアザが入った気絶した一正を肩を組んで運んだ祐斗が現れた。

「聖剣が奪われた!?」

「そうなのよイッセーくん！」

イリナをなんとか宥めて質問するととんでもないことが発覚し
イッセーは驚く。

因みに一正の頬に痣が出来た理由はイッセーの再会を楽しみにして
いたイリナが兵藤家に入ると一正が気持ち悪い笑みで待つており、
一正の顔を見たら悪寒と幼い頃のイッセーの仕打ちに怒りが爆発し
思いつきり殴ってしまった。

兵藤夫妻は一正の愚行を知っているのでイリナをお咎めにしな
かつた。

「おいイリナ、彼はどう見ても一般人だ。コチラのことをあまり話さ
ない方がいい」

「はっ！ そうだつた！」

「大丈夫よ。イッセーはコツチのことを知ってるし実力もかなりある
から心配しなくとも大丈夫」

リアスはイリナをフォローするが後に後悔する。

「そうだつたのね!? ああ、主よ！ 私を救っていただき感謝します！」

『ぐつ!』

イリナは自身の失敗を聖書の神に救われたので感謝の祈りを捧げ
るがリアスたち悪魔はその性質故にダメージが走つて頭を抑えたり
顔を睨めたりした。

「イ、イリナ！ 部長たち悪魔なんだから祈りとかダメだつて！」

「あ、ごめんなさい！」

イリナはリアスたちに謝り、リアスたちもいいよと許した。

「それで犯人は分かっているのかしら？」

「ああ、犯人はすでに目星が付いているし墮天使側からも有力な情報
が入った」

リアスが質問するとゼノヴィアという名の少女はそれに応える。

「犯人はバルパー・ガリレイという者だ」

「バルパー・ガリレイ!？」

バルパーの名を聞いた祐斗は拳を握り締め下を向き体を震わせる。

「祐斗?」

イツセーは祐斗を心配するが一正は原作のことを知っているので理由は察している。

「君は……アーシア・アルジエントかい?」

「は、はい」

ゼノヴィアはアーシアに気づき名指しをするとアーシアはビクつく。

「どんな傷も治す聖母の微笑みの使い手で聖女と讚えられていたが悪魔を癒して魔女となつた」

ゼノヴィアの言葉にアーシアは震えるが一正はここで庇い好印象を上げるというクズの発想を浮かべていた。

「おい待てよ——

「君のその優しさはきっと主だつて分かつてくれる。だから悪魔になつて辛くなつても主への祈りは忘れないでくれ」

「私も応援するから頑張つてアルジエントさん

「え?」

ゼノヴィアの予想していなかつた言葉に一正は啞然とした。

「それで私たちは不干渉ということかしら?」

「本来だつたら私たちで充分なのだが情報によると私たち相手でもかなり持て余すらしい。だから手を貸してくれ

「な……な……」

原作とは違う流れに一正は本来自分が異物なのに対しイツセーをイレギュラーと逆恨みする。

「イツセーくんを睨まないでくれないかな兵藤くん?」

「イ、イリ「名前で呼ばないで」！」

イリナの冷たい言葉と殺氣で一正の口は閉じる。

（なんなんだよ!?あの猫たちが来てからだ！父さんたちもイリナもう少しで俺の意のままになつたつうのに全部コイツとあのクソ猫どものせいだ!!）

一正の邪悪な気配に黒歌と白音とイリナは寒氣と吐き気に襲われた。

「祐斗、あなたはどうするの？」

「行かせて下さい！これは復讐じゃない、僕たちのケジメをつけに行きます！」

リアスは試す口調で祐斗に訊くが祐斗の意気込みにリアスは微笑み、祐斗の背中を叩き

「それじゃあ行きなさい！イザイヤとしても祐斗としてもあなた自身が決着付けるのよ！」

「はい！」

祐斗は意気込むが一正は混乱したままだつた。

騎士の決意と愚者の失態

「それじゃあ試させてもらおうか」

「望むところだよ」

校庭で祐斗とゼノヴィアは自分の獲物である剣をお互い向けるがイリナの方は

「なんで私もやらなきやいけないわけ？」

「俺の実力を見せるためだよ」

一正は赤龍帝の籠手を展開してイリナと対峙するが肝心のイリナは腐つたゴミを見るかのように一正を見下していた。

「ハアアアアア!!」

「フンッ！」

祐斗は自分が現段階で作れる最強の魔剣で斬りかかるがゼノヴィアは手加減はしないと言わんばかりに渾身の力で剣を振り鎬迫り合いをする。

「テヤツ！」

「ウオオオオ!!」

祐斗は剣のサイズが不利であるにも関わらず自慢のスピードとイッセー仕込みの鋭さと威力を籠めた剣で攻撃するがゼノヴィアは負けんと言わんばかりに剣を輝かせ祐斗と斬り合う。

「これで最後だ！」

「コチラも同じだ！」

祐斗は魔剣に己が持つ全ての魔力を籠めた一撃をゼノヴィアは聖なる光を剣に宿し、お互い斬りかかる。

「そこまでだ」

「うわっ!?」

イッセーは両手に光の剣を持ち2人の剣を止めるが2人はイッセーが急に現れたので驚いて止まつた。

「お前らなあ、これから共闘するつてのに大怪我したんじや話にならねえだろ」

「ごめんねイッセーくん」

「あの攻撃を余裕で防ぐとはなかなかの実力を持つているな兵藤イツセーとやら」

祐斗は申し訳なさそうな顔で謝るがゼノヴィアはイキイキした顔でイツセーと戦いたがっていた。

「これ以上戦つても無駄なんだしこの勝負は引き分けってところでいいだろ。それじゃあ兄さんの方は……あらら」

一正とイリナの方を見るとそこには
「全然弱いわね、大した自信だからどんなものかと思つたけど逆に予想外だったわ」

「ち、く、しよう！」

イリナはゴミを見る目で一正の喉元に剣を当てながら踏んでいた。
「グレモリーさん、あなたの騎士ナイトは借りるけどコレはいらないわ」

イリナは剣をリボンにして腕に絡ませ一正に興味ないと言わんばかりに視線を逸らした。

「祐斗くん、よろしくお願ひね」

「イツセーくん、私行ってきますわ」

イリナは一正がいない口調でゼノヴィアを連れて行き朱乃も同行する。

「イ、イリナ！バルパーがどこにいるのか分かっているのか!?」

「大丈夫よイツセーくん！今日は墮天使とのミーティングだけだからまだバルパーとは戦わないわ！」

「墮天使？」

イツセーはレイナーレたちを思い浮かべたが今回の事情があまりにもデカいのですぐに否定した。

「じゃあねイツセーくん！私あの時より強くなつたからね！」

「ああ！一緒に頑張ろうな！」

思わず返事をしたイツセーだがイリナの“あの時”という言葉が少し気にかかつた。

「あの木場祐斗とやらも強いがイッセーという男もかなり強かつたな」

「フフン、そうでしょ?」

ゼノヴィアがイッセーを賞賛するとイリナは自分のことのように嬉しがり鼻を天狗のように伸ばす。

「イリナ」

「どうしたのゼノヴィア?」

「あの兵藤一正と『その名前を聞かさないでくれる?』すいませんでした!」

ゼノヴィアは悪気はないつもりで質問したがイリナの般若のような顔にすぐに頭を下げた。

「なんでそこまで嫌うのだ?」

「ええとゼノヴィアちゃん、これ以上聞くのは……」

「ハアー、いいですよ」

ゼノヴィアは勇気を出して質問し朱乃はそれを止めようとするがイリナの方は諦めがついたのか溜め息をしながら

「アイツは最低な奴よおじさんとおばさんもよくあんなヤツ家にいさせるとと思うわ」

イリナは怒りに耐えながらゼノヴィアに過去を話す。

「ここにちは兵藤さん」

「ここにちはトウジさん」

イリナが幼かつた頃父親の昔なじみの友達と一緒に会いに行くとある少年と出会った。

「ここにちは、兵藤一誠です。イッセーって呼んでね」

「ここにちは！僕は紫藤イリナ！イリナって呼んで！」

イッセーとイリナはすぐに仲良くなり、近くの公園でヒーローごっこなどをして遊んだりしていた。

「あれ、あの子たちは何だろう？」

イリナはイッセーと遊び続いている間自分たちと同じくらいの子供たちが集まっていた。

「イリナ！離れて『死ね！』ガフツ！」

イッセーがイリナを庇うと子供の1人がイッセーの腹に蹴りを入れそれを皮切りに他の子たちも倒れたイッセーに攻撃する。

「な、何を『まあ、待つてよ』」

イリナが止めようとするとイリナの肩に誰かが手を置く。

「誰？」

「俺は兵藤一正つてんだ。あんな最低な奴よ死んでしまえばいいんだ。誰にだつてヒドいことするんだぜ？」

一正是イリナにイッセーの嘘を教えた。やれ年下の子に暴力を振るうだ、やれ動物を虐めるだなどのイッセーを貶めるようなことばかり吐く。

イリナは半信半疑だったが一正の瞳の奥のドス黒さに何故か目を惹かれた。一正の洗脳の力がイリナを狂わせようとする。

「さあイリナ、俺と一緒に『フシャー！』痛え！」

一正がイリナに近づこうとすると黒と白の猫が一正の顔を引っ搔いた後に噛み付いた。

「一正！またイッセーをイジメてんのか!?」

「テメエこのクソ猫！また父さんを痛えええええ！」

イッセーの父が一正の頭に拳骨を喰らわすと何故かイッセーを攻撃していた子供たちがどこかへ行つた。

「来い！お前は今日晩飯抜きだ！母さん、悪いけどイッセーを治療し

て連れて来てくれ

「そんな！父さん俺は悪くゴエ！」

一正はみつともない言い訳をしようとするが再び拳骨を喰らいすぐ黙つた。

「イリナちゃん、あの子のこと出来る限りでいいから仲良くしてくれないかしら？イッセーはいい子なんだけどあの子はどうも…………」

イッセーの母はイリナに申し訳なさそうに頼むが一正の本性を知つたからには親しくなることは出来ない。

「これがアイツが今までやつて來たことよ。あの猫ちゃんたちがいなかつたらイッセーくんは今『ころいなかつたかもしけない』

イリナの言葉にゼノヴィアは顔を顰めた。よくそんな残酷なことを幼い頃にしたものだとゼノヴィアはそう思い、一正の人柄を理解した。

「そう言えば君のあのカードはいつ手に入れたんだ？」

空氣を喚起するためかゼノヴィアはイリナが持つていたカードの話題を出す。

「うん、確かこのカードはイッセーくんと別れてから少し経つて急に出たんだよね」

イリナは懐からウルトラマンに似たウルトラマンのカードを取り出し咳く。

「案外イッセーがあんなヤツから守るためにイリナに渡したのかもな」

「え、 そうなの？えへへ……」

「それじゃあ私もそうなのでしょうか？」

「え？」

イリナは照れるが朱乃も自分が持つていたウルトラマンについて話し、イッセーがそれを使つて変身することも話した。

「それじゃあイッセーくんに渡しておけば良かつた！」

イリナはもう少しイッセーといられたかもしれない後悔するが

朱乃は少し不安になつた。

（またイッセーくんは強敵と戦わなきやいけないのでしょうか？）

昔より強くなつた朱乃だが鳳凰に乗つ取られたドーナシークとの戦いとリアスから聞いたゼットンの戦いでイッセーがどんどんと強くなる反面で、これから現れるだろう敵もまた強くなると不安になつていた。

狂氣のバルパー

「いよいよだな、祐斗」

「そうだね、僕はイツとの決着をつける」

イツセーと祐斗はイリナたちが待っている場所へ行く。しかし彼らを邪魔しようとする者がいた。

「ふざけんな！主人公の俺がいないんじや話にはならねえだろうが！お前らモブキヤラはすこっんでやがれ！」

一正は下手な尾行をしているが祐斗とイツセーはすぐに気付いているのでどう撒くか考えていた。

「行こう、イツセーくん」

「行くぞ、祐斗」

「な!?」

イツセーと祐斗は目にも止まらぬ速さで動き一正を一瞬で置いてけぼりにし完全に撒いた。

「チツー！こうなつたら先回りをしてガラクタを買ったイリナとゼノヴィアを見つけ出して洗脳して味方につけてやる！」

一正は最後の悪あがきをするがすでに原作とは違うことに未だに気付いていなかつた。

「祐斗、ここがそうなのか？」

「うん、紫藤さんたちからの連絡が正しければここで合つてるはずだけど……」

イツセーと祐斗はあるマンションの最上階のVIPルームの前にいた。どう考へても自分たちでは場違い感が凄まじい。

「とりあえず……祐斗」

「オーケー、イツセーくん」

イツセーと祐斗はそれぞれ剣を創り扉を開けると同時に飛来してきた光の槍を全て碎いて部屋の中に入り剣を突き出すが光の剣で防がれた。

「……回避せざ碎いたのは周囲に被害を出させないためか……フン！ 悪魔側は随分と甘ちやんを送りこんだものだな」

黒い長髪の赤い目の男は光の剣を消すとイツセーと祐斗の行動に嘆息し冷蔵庫から酒を出し一気飲みする。

「あんたこそ俺たちが回避しても大丈夫なように途中で消えるよう仕組んだじやないか」

「無駄な力を使いたくないだけだ。それとお前が例のウルトラマンオーブという奴か」

イツセーが指摘するが男は鼻を鳴らしてイツセーを悪どい表情を浮かべながらジロジロ見る。

「コカビエルさん、そんなこと言わないでくださいませ。あなたはいい人なんですから」

「ありがとうございます朱乃さん。ところでイリナたちは……」

イツセーと祐斗にお茶を差し出したのは朱乃だった。イツセーはイリナとゼノヴィアのことを聞いたが視線を変えると本人たちは猛烈な勢いで食事をしていた。

「コイツらは金を騙し取られて無一文になってしまったから仕方なくメシを出してるだけだ」

一気飲みが終わつたコカビエルは嘆息しながら説明するが本人たちは勢いが収まることなく食いまくつていた。

「それで此処がバルバーがいる場所つてことか」

コカビエルと朱乃を除いたイッセーたちは黒い神父服を着てバルパーのアジトに潜り込んだ。

「手筈通りだと朱乃さんたちがバルパーをここまで追い込んで逃げてきたところを挟み撃ちだつたよね？」

「ああ、その通りだ」

祐斗が確認するとゼノヴィアは聖剣を閉じていた包帯を取り臨戦体勢となるがイリナはイッセーに寄り添つた。

「あ、イッセーくんこのカード……」「イリナ！」キヤツ!?

突然イッセーが自分を押し倒したのでイリナは顔を赤く染める。

「イ、イッセーくん、こういうのは2人つきりの時に……え!?」

イリナがいた場所は破壊されており、イッセーは少し怪我をしていた。

「イッセーくん！「まさかここまで来ていたとは思わなかつたよ」！」

声のする方へ見るとそこには

「ガフッ……」

血まみれになつたコカビエルを引きずつているドス黒いオーラを纏つたバルパーがイッセーたちを見下ろしていた。

「その人を離せ！」

「チツ！ならば離してやる！」

「グッ！」

「バルパーアアア!!!」

イッセーは光の槍をバルパーに放ち攻撃するとバルパーの頬にかすり血が流れるとそれに怒つたのかバルパーはコカビエルを乱暴に放り投げたがイッセーたちはキヤツチした。

「バルパー・ガリレイ！貴様がこれまで犠牲にした人たちの仇を打つ！そのためにこれまで生きて來た！」

「小賢しい！」

祐斗は自分が創れる最強の魔剣でバルパーに斬りかかるが聖剣にあつさりと防がれた。

「喰らえ！魔劍創造！」

「ほう、まさかこんな希少な神^{セイクリッド・ギア} 器^{ソード・ベース}を持つてゐるとは驚いた……がし

かし

祐斗はバルパーの足元に大量の魔剣を創り串刺しにしようとする
がバルパーは顔色一つ変えず聖剣を構え

「な!?

「そんなナマクラで私の聖剣に勝てるとでも思つたかね?」

聖剣を一振りすると祐斗が創つた魔剣はガラス細工のように粉々
に碎け儂く散つていつた。

「フン」

「ガツ!?

バルパーが祐斗に向かつて剣を振ると波動が祐斗に襲いかかり祐
斗は壁まで吹き飛ばされるがバルパー反動したところを首を掴む。
「その口ぶりから察するに聖剣計画のあの時の子供か。まさかここま
で成長していたなんて思いもしなかつた。それでは君を他の先輩や
後輩たちに会わせてあげよう」

バルパーは狂氣の笑みを浮かべながら聖剣を祐斗の心臓目掛けて
刺そうとする。

「ハアツ!」

「おやおや」

瀕死のコカビエルが光の槍を放ちバルパーと祐斗の距離を割いた。

「すみません、コカビエルさん」

「小僧!謝るならさつさと更に強い魔剣を創れ!奴はまだ実力を出し
ていな!」

「フフフ、顔の割には随分と優しいじやないかコカビエル。あの少女
も君が殿を張つて逃しもしたし」

「フン!足手まといがいるんじやいつも通りに戦えないないのでな
!!」

コカビエルは否定しながら攻撃がバルパーには未だに攻撃が当
たつていなかつた。

「さて、そろそろ失敬させてもらうよ。目的はここでは達成できない
のでね」

バルパーは魔法陣を作りそれに通過してこの場を去つた。

「早くアーシアを呼ばないと……」

「俺に構わず早く行つてリアス・グレモリーたちと合流しろ！」

イッセーは携帯を取り出しアーシアを呼びコカビエルを治療しようとするとするがコカビエルは傷だらけの羽を広げ学園の方角へ飛ぶ。

「……皆！行くぞ！」

『（うん）（応）!!』

「あなたがバルパー・ガリレイね？」

「こんばんはリアス・グレモリー。いかにも私がバルパー・ガリレイだ。突然で申し訳ないが君たちには死んでもらう」

リアスと黒歌と白音と仕方なく帰ってきた一正4人はバルパーの来訪に備え学園内で臨戦体勢となつており、ソーナたち生徒会たちは結界を張り被害を出さないようにした。

リアスの殺気に顔色一つ変えずに淡々と喋るバルパーだがリアスは両手に滅びの魔力を籠め、いつでも滅殺の魔閃ルイン・クロスショートを撃てるようになっている。

黒歌は制服から露出の高い和服に変えて体全体に仙術のオーラを纏い構えを取つていた。

白音は黒歌と同じく仙術のオーラを纏い火炎車を宙に浮かばせていつでも発射できるようにしている。

一正是赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアを展開して原作通りにサポートする。

「リアス・グレモリー、気をつける！コイツは俺に致命傷を負わせるほどだ！朱乃是墮天使軍と悪魔軍に増援を頼ませた！」

「分かったわ！」

イッセーが前もつて呼んでいたティアマットは青いドラゴンの姿となつて臨戦体勢となりコカビエル回復しているアーシアを庇うよ

うに立つ。

「純血の上級悪魔に元猫？の悪魔一匹に最強の龍王が相手ならば良い実験データが取れるな。しかしハズレがいるようだが」

「うるせえ！部長！受け取つて下さい！」

『Transfe r!!』

「ありがとう一正。それと私の強さが知りたいのかしら？だつたらコレを喰らいなさい!!」

リアスは手を組んで倍加して強化した切り札の滅びの魔閃をバルパーに向けて放つた。

「こつちも喰らいにや！」

「喰らえ！」

「おおおお!!!」

黒歌と白音は火炎車を発射し、ティアマットはドラゴンの得意技である炎のブレスでバルパーを焼き尽くそうとする。

「ふふふ、実験開始だ」

バルパーは迫つて来る攻撃に焦りもせずに懐から禍々しいオーラで包まれたあるモノを取り出した。

「これは！」

「なんてことだ！」

「ひどすぎる……」

「一体何が？」

イッセーたちが目にしたのは倒れ伏している生徒会メンバーで結界は破壊されていた。

「兵藤くん！」

「会長！」

ソーナたち生徒会はボロボロになつて明らかに疲弊しており、最早

意識を保つのも辛いだろう。

「兵藤くん、バルパーの狙いはあなたです！こんな危険なことあなたに頼める義理ではありませんがバルパーを倒して下さい！」

「いいえ」

イツセーが否定の言葉を出すと生徒会メンバーの表情は曇り出す。「イツセーく「バルパーを倒すのはウルトラマンオーブではあります。 グレモリー眷属の騎士ナイトの木場祐斗です」…!!」

祐斗はイツセーの心なき言葉に声をかけようとしたがイツセーの言葉に祐斗は涙が出そうになつたがこらえてイツセーに恩人おんじんが宿つたカードを渡す。

「イツセーくん……私も渡すわ」

イリナは自身の御守りのカードを渡し手を握りイツセーの帰りを祈つた。

「行くぞ祐斗」

「うん！」

イツセーはカードをホルダーにしまい祐斗と共にバルパーと仲間が待つ場所へ行く。

闇のリング

「はあ、はあ……まさか使い魔の森で出会つた怪獣以外にもあんな化け物がいたなんてね」

「全くにや、どうやら本当にアレの復活があるかもしれないにやね」「イッセー先輩に無理をさせたくないのですが今の私たちじやあサポートがやつとですね」

「フフツ、龍王最強と謳われた私がこんなザマとはな、つくづく化け物に遭遇するな」

リアスたちはバルパーが聖剣を使うのはイリナたちからの情報で知つていたがバルパーがある物を出したらリアスたちは驚くと同時にある化け物と戦うこととなつた。

「さて、そろそろこのパーティーをお開きに……やつと来たか」

バルパーがリアスたちにトドメを刺そうとするが何かに気づき顔を歪ませて視線を変えた。

「お前がバルパー・ガリレイか」

「そうだよ、兵藤一誠くん。それにしてもまだ君は私に楯突くつもりかな?たかが実験のモルモットの分際で」

イッセーがバルパーを睨むとバルパーは嬉しそうに微笑むが祐斗には用済みの道具を見るかの目をする。

「今度こそ貴様が生んだ犠牲の仇を討つ!」

「それでは君にコレを贈ろう」

バルパーの軽口に動じない祐斗にプレゼントを贈るように懷から青い結晶の入つたビンを投げる。

「君たちが犠牲になるはずだつた聖剣計画が台無しになつたのでねだから他にも犠牲になつてもらつた。これはほんの名残りだあの世の土産にするといい」

祐斗が手にすると結晶は光り輝くと同時に雪のように広がり祐斗の周りに浮かび人の姿となつた。

『どうかアイツを倒して欲しい』
『私たちの仇を取つて!』

『君たちなら奴に勝てる!』

光が祐斗を包み込むと祐斗の体から力強い鼓動が鳴り、祐斗はある言葉をバルパーとの戦いのゴングとして放つ。

「行くぞ！ 禁手化！」

祐斗の言葉と同時に白と黒のオーラが祐斗の手に集まり1つの強

大なオーラを放つ剣となる。

「禁手 双霸の聖魔劍!! みんなの絆と力を込めたこの剣であなた

を斬り裂く！」

「それが君の切り札か。それにしても聖と魔が混ざるとはこれも神の影響か」

バルパーはクツクツと笑うと懐からあるモノを取り出す。イッセーと祐斗はそれに目を疑つた。

「俺の……」

「イッセーくんのオーブリング!?」

バルパーが取り出した其れは確かに形状はオーブリングに酷似していたが、装飾の部分は藍色で、輪の部分は赤くなつており、纏うオーラは漆黒の闇そのものと言つても過言ではない程のものだった。

その名は光のオーブリングと対をなすアイテム——ダークリング。

「褒美だ。今度は私の切り札を見せてあげよう」

するとバルパーはいつの間にか持っていた一枚のカードをダークリングに翳す。

「フン」

♪MAGA—GRAND KING♪

オープリングとは異なる禍々しい音声が鳴り響くと同時にカードから解放された闇の粒子が徐々にある姿を作っていく。

そして——

「グオオオオオン!!」

「なんてこつた……」

「生徒会の結界が壊れたのも部長たちが負けたのも納得できる……」

イツセーと祐斗の前に現れたのは、青銅色に染まつた体の左手には三本の鉤爪を、右手には大鍔を装備しており、背中から尻尾にかけては角の様な突起物があり、額には赤い結晶が埋め込まれている土の魔王——マガグランドキングだった。

「祐斗、バルバー・ガリレイはお前が倒せ。俺はこのデカブツを片付ける！」

イツセーはマガグランドキングの元へ駆け付け祐斗は聖魔剣をバルパーに向けて

「今度こそケリを着ける！」

「ほざけ小僧が！」

イツセーはホルダーからある2つのカードを取り出すと目を瞑る。

「人間の名前を言つてなかつたな、私は郷秀樹だ。そしてコイツは「コイツ呼ぼりするな。俺はランだ」
白い空間に郷とランが現れイツセーは2人に近づく。
「イツセーくん、君は今回あくまで怪獣を倒すだけなのかい？」
「はい」

「やれやれ、今回のメインはあのナイトか。まあ、付き合つてやるよ」
ランはイツセーの行動に嘆息するが悪い感情は籠つていなかつた。
「行こう、イツセーくん」
「俺たちの力、貸してやるよ！」
すると郷とランの体が光だし、戦士としての姿に変わる。
「私はウルトラマンジャック」

郷であつた者はハヤタのウルトラマンと似た姿となりー
「俺の名はウルトラマンゼロだ」
ランであつた者は鋭い黄色の双眼に赤と青の体を持つ姿となつた。

「フツ！」

イッセーがオーブリングを構えると青が混ざった宇宙空間となり、イッセーはカードを手にする。

「ジャックさん！」

ULTRAMAN JACK！』

「シユアツ！」

イリナから託されたカードを翳すと、カードが緑の光の粒子となって飛んで行き、イッセーの左後ろに『変幻自在に武器操る巨人』『ウルトラマンジャック』が現れる。

「ゼロさん！」

『ULTRAMAN ZERO！』

「デエエヤツ！」

今度は祐斗から譲り受けたカードを翳すと、青い粒子が右後ろに飛んで集まると『始まりと終わりを表す数字を名に持つ巨人』『ウルトラマンゼロ』となり、輪の部分が左右で緑と青の輝きを放ち始める。『キレの良いやつ、頼みます！』

挙げた右手は胸元に、真横に伸ばした左手は耳元に添える様に持つていった後にオーブリングを掲げ、トリガーを押す。

『FUSION UP！』

「シユアツ！」『デエエヤツ！』

輪が緑、青、群青の順に輝くとジャックとゼロもそれぞれ緑と青のオーラを纏い、光に包まれたイッセーと重なる。

そして光が消えると戦士はまた新たな姿となっていた。

赤・青・黒を主とした体はやや細身で頭部には一本一対のブームラン型の刃を装備しており、額のクリスタルは青く輝いている。それは吹き荒れる嵐の如く数多の技で総てを薙ぎ払う姿。

その名は――

♪ULTRAMAN ORB! HURRICANE SLASH!!♪

――ウルトラマンオーブ・ハリケーンスラッシュ。

戦士は色鮮やかな閃光が幾重にも飛び交う時空間から飛び立つと音もなく着地し、頭部の刃―スラッガーを煌かせながら構える。「光を越えて闇を斬る！」

「グオオオオオオ!!!」

オーブが構えを取る前にマガグランドキングは口元にエネルギーを凝縮しレーザーを放つ。

「フンッ！」

レーザーが当たる直前、オーブは消えた。速さの例えではなく物理的に完全に消えたのだ。

「どこに消えた!?」

「余所見とは随分余裕だね！」

バルパーはオーブを探すが祐斗はその隙をついて攻撃するも聖剣によつて防がれた。

「スラッ！」

「グオオオオオ!!!」

突然現れたオーブはマガグランドキングに 銳い蹴りを何発も叩きつけるが然程ダメージを受けていない様子だった。

マガグランドキングは土を禍々しく乱せし巨大な魔物、または土の魔王獸とも言われた存在。故に防御力もかなり高いのだ。

「ハツッ！」

オーブは頭部のスラッガー2つを飛ばしマガグランドキングの関節など強硬な装甲が薄い部分に攻撃する。

「グオオオオオオオ!!!」

「チツッ！」

しかし関節にスラッガーは当たつたが予想以上の硬度で弾かれオーブの手に渡つた。

「ガアアアアアアア!!!」

「ハツッ！」

「ガアアアアアアア!!!」

「ハツッ！」

マガグランドキングの尻尾による攻撃をスラッガーを当ててそらし再び投擲し、ダメージを与える。

「ギィアアアアア!!」

「芸がない奴め！」

マガグランドキングのレーザーをスラッガーを目の前に回転させレーザーを防ぐと動きを激しくしある武器を創造した。

「オーブスラッガーランス!!」

オーブが手にしたのは銀色のギアレバーと赤いスイッチがある黒い柄にスラッガーを模した刃が特徴的な三叉槍で、その周囲には常に風が吹き荒れている。

「スウラアアアア!!!!」

「ギシャアアアア!!!」

オーブはマガグランドキングにランスで斬り払い、時には強烈な銳い突きを喰らわせるがマガグランドキングには効果がなかった。

「ガアアアアアア!!!」

「ウオツ!?」

マガグランドキングはレーザーを連射しオーブはランスを振り回し攻撃を逸らす。

「ツ!!」

オーブは驚きの声を出すとランスを構える。

「ハハハハハ!!そんな攻撃で私のマガグランドキングの装甲が破れるわけないだろう!!」

「イッセーくんは必ず破るよ」

「はあ、本当にしぶといね」

祐斗の執念と不快な言葉にバルパー若干の苛立ちを積もらせたが

それでも余裕を崩さなかつた。

「まあいいさ。君たちを殺したらあの少年を回収してその力を解読させてもらうままでだ」

バルパーの言葉に動じず祐斗は聖魔剣を構える。

「はああああ!!」

「フン」

祐斗の聖魔剣の一撃に何の苦もせずに弾くバルパーだがその体に少しずつ異変が起きているのを本人は未だに気付いていない。

「つまらない鍔迫り合いも飽きた。そろそろ終わりに……!?」

バルパーが持っていた聖剣の輝きが消えた。それどころか

「ど、どこへ行く!?」

「え？」

「何だ？」

加勢に来たイリナとゼノヴィアの手に渡りバルパーは丸腰となり形勢は逆転した。

「マガグランドキング！」ちらを加勢し……

バルパーの顔は希望から絶望の顔へ変わつた。なぜなら
「ガ……ギ……」

マガグランドキングの体は既にスクランブルに近い状態だつた。

「コカビエルさんや部長たちとティアの必死に残してくれた思いは無駄に出来ないな！」

オーブがランスをマガグランドキングに突き刺した場所は
「ギアアアアアアアアアアア!!!!」

胸にあつた僅かなヒビだつた。

「お前がレーザーを連射したり、尻尾を鞭のように振り回したのはコ

レをかばっていたからか

オープがランスのレバーを引くと柄から刃先へエネルギーが溢れ第一の必殺技が発動する。

「オープランサーシュート!!」

「ギュアアアアアアアアア!!!」

0距離の必殺にマガグランドキングは苦痛の声を放ち、装甲もヒビから穴が空くが貫通まで至つていなかつた。

「ギアアア「フンッ！」ガツ！」

オープはレーザーが発射する口にランスを突き刺しレバーを2回引くと第一の必殺技より遙かなエネルギーが槍に暴れ出す。

「ピックバンスラスト!!」

オープの必殺技にマガグランドキングの頭部は完全に破壊されおり、その姿は明らかにスクラップ寸前であつた。

「トドメだ！」

オープがランスのレバーを3回引くと先ほどまでの技とは比べものにならないほどエネルギーが狂い出し、最大の必殺技を放つ。

「トライデントスラッシュ!!」

オープの目にも止まらぬ速さの連撃がマガグランドキングを粉々にし、闇の粒子に変化すると同時にバルパーの手元に戻つた。

「さてと祐斗は……終わつたらしいな」

オープの視線の先にはバルパーに一閃を決めた祐斗の姿があつた。

「はあ、はあ……こんなことがあつてたまるか

「終わりだバルパー・ガリレイ」

祐斗はバルパーにトドメを刺そうとするがバルパーは最後の悪あがきカリングを使おうとするが

「が…ひゅ……」

バルパーの喉元に光の槍が刺さつており物の言えない死体と化した。

「コカビエルさん……」

「お前がこれ以上手を汚す必要はない。お前は充分にやつた」
祐斗はコカビエルの言葉に涙を流し、胸の中でこれまでの犠牲者の冥福を祈った。

「随分と面白いことになつてるじゃないか」

朱乃の涙とイツセーの弱音

「イツセー、これはどうかしら？」

「えへと、部長の綺麗な髪と相まってすぐ似合つてますよ」

「ふふ、嬉しいわ」

イツセーとリアスは商店街にあるデパートで買い物をしていた。

「何あの人……」

「すげーキレイ……」

「女優か何か？」

遠くからでもリアスを見るのは男性客だけではなく、女性の客もりアスに見惚れ褒め称える。

「あの男の人が彼氏さんかしら……」

「なんか……軍人かなにかかな？」

「抱かれて……やらないか？」

イツセーに見惚れる女性客もかなりいたが本人は最後の言葉を聞かなかつたことにした。

「イツセーは何が似合うかしらね」

「そこまでやらなくてもいいですよ」

「ダメよ、イツセーをよりカッコよくしたいんだもの」

イツセーはやんわりと終わらせようとしたがリアスの真剣な声が伴つた笑顔に封殺された。

「このままずつとデートしていくんだけど明日からは黒歌たちともデートするんだからこれでへばつてちやダメなんだから」

「そうですね」

「……まだあのリングの行方のことが気になつていてるの？」

「……」

リアスの質問にイツセーは沈黙で答えながらバルパーと戦った日のことを思い出す。

「随分と面白いことになつてゐるじゃないか」

突如現れたのは白銀の龍を象つた鎧をつけた男だつた。リ亞スたちはバルパーの増援かと構えたが

「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ白龍皇」

「アンタがそこまでやられるとはな、もう少し早く来れば良かつた」

コカビエルと会話をしたので敵ではないと分かつたのでリ亞スたちはひとまず力を抜いた。

「皆さん、申し訳ございません！來るのが遅れました！」

「朱乃!?」

リ亞スたちが目にしたのは朱乃だつた。どうやらこの男は朱乃が呼んだ墮天使側の増援ならしい。

「味方か。それならもういいな」

オーブは変身を解いてイツセーの姿に戻り体の力を抜いた。

「フフッ、君があのウルトラマンオーブか」

「随分と有名人になつてるな。そこまで暴れた記憶がないんだが？」
「謙遜するな。君の実力は素晴らしいものだ。君の兄が赤龍帝だつたのが非常に残念だが弟の君はそれを帳消しにするほどだ」

白龍皇は兜越しでも解かるほどに一正には落胆の眼差しを、イツセーに対してはキラキラという擬音がつきそうな程に輝いた視線を向けていた。

「俺は今すぐに戦いたいくらいだよ。というかすぐに変身して俺と戦つてくれないか？」

イツセーと白龍皇の会話にリ亞スたちは心配するがコカビエルと朱乃是落ち着いていた。

「そんなことよりさつさとアザゼルに報告へ行くぞ。バルパーの死体は俺が持つていく

「やれやれ。それじゃあこれでさよならだ」

「それでは皆さん、また明日」

コカビエルたちは空を飛び姿が見えなくなると生徒会の結界は消

えてなくなり、空が完全に出ていた。

「そうだ！あのリングをどうにかしなきや!!」

イッセーはバルパーが使っていたダークリングを思い出したがすでに消えていた。

「それじゃあ聖剣奪還の祝いに乾杯!!」

『かんぱーーーーーい!!!!』

イッセーの言葉をスタートにリアスたちオカルト研究部とイリナとゼノヴィアはジュースが入ったグラスで乾杯し、昨日の激闘を祝つた。

「それにしてもイッセーくんがまさかあんな大きいヒーローになつちやうなんて思わなかつたよ!!」

「フム、あれほどの強さはそうお目にかかるものじやない」

イリナとゼノヴィアはごちそうを片手にイッセーを讃える。

「……イッセー先輩。両手が塞がつてるので食べさせてください」

白音は大量のお菓子を乗せた明らかに重そうな皿を両手で持ちながらイッセーに迫る。

「あ、ああ分かつた」

イッセーは白音が持つている皿からチョコレートを取り口に運ばせるとキスを待つお姫様のように目を閉じて上を向く。

「んんっ。美味しいです〜〜」

「ああ！白音ばっかりズルいにやん！イッセー！私にも食べさせてちようだいよ〜〜」

黒歌はイッセーに自らの豊満な胸を当てながら艶めかしい声で頬み食べさせるのをねだる。

「分かつたからそんなにくつつかいでください！ほら、あーん」

「あ～ん。美味しいにゃん♪」

黒歌のわざとらしい演技にリアスたちはやけに良い笑顔でイッセーを見るが本人は冷や汗を滝のように流していた。

「イッセー、黒歌と白音ばっかりズルいわよ」

「え～と？」

リアスはふてくされた子供のように頬を膨らましながらイッセーに文句を言う。

「私だつてイッセーとイチャイチャしたいのに他の娘ばっかり……」

「あの部長：許してくださいよ。俺なんでもしますから」

イッセーの何気ない一言にリアスは目を輝かしてイッセーに抱きつき耳元で

「それじやあ休みの日に私と2人つきりでデートしてね♪」

『どういうこと（にゃん）（ですか）？』

なぜか黒歌たちはリアスではなくイッセーに目元が笑つていない笑みを浮かべながら近づくがイッセーはさらに墓穴を掘る。

「なんでもするから！だから落ち着いて……あ」

イッセーはしまつたと思つたが時すでに遅し

『それじやあデートして（ください）（ね）♪』

イッセーは沈むが下手なことはできないので観念した。

「あ～あ、俺つて全然成長してない気がするな……」

イッセーはジューースを片手に黄昏れていたが知つた気配を感じた。

「イッセーくん……」

「朱乃さん？」

朱乃是罪悪感が入つた表情でイッセーに近づき

「ごめんなさい」

「え？」

朱乃の突然の謝罪に戸惑うイッセーだが朱乃は涙を流しながら話ををする。

「私は今回全然役に立てませんでした。あなたに母様と私を救つてもらつてから10年くらい経ちました」

「そんな役に立つてないなんて……」

イッセーは朱乃を慰めようとするとその涙が止まることがなかつた。

「あなたを守るために父様とコカビエルさんに鍛えてもらつたのですが一緒に戦うどころかあなたの足を引っ張つてばかりです」

「朱乃！」

イッセーは朱乃の肩を掴みそのまま抱き寄せる。

「むしろ逆なんですよ」

「え？」

イッセーの言葉に朱乃は疑問を感じるがイッセーの体が震えていたのに気付いた。

「俺はウルトラマンさんたちのカードを手に入れるまで我流で修行をしました。はぐれ悪魔とも戦いましたし魔獣との死闘も何度も経験しました。それでも俺はどこかウルトラマンさんたちの力を怖がっている」

「イッセーくん……」

イッセーの弱音に朱乃は涙を止めた。

「だけどあなたと黒歌さんと白音ちゃんは俺を兄さんからかばつてくれただけじゃなく俺と親しくなろうとしてる。それだけで俺はウルトラマンさんたちと向き合つて戦えるんです」

イッセーは朱乃と向き合い本音を告げた。

「だから……あなたたちのおかげで俺は人間の兵藤一誠としてもウルトラマンオーブとしてあなたたちと共に生きていけます。だからそんな悲しいことを言わないで下さい」

「イッセーくん……」

朱乃はイッセーに近づき唇を合わせようとする

「抜け駆けはダメよ」

「うおつ!?」

「チツ」

突然のリアスの登場にイッセーは驚くが朱乃是軽く舌打ちをする。「イッセー先輩、私たちはイッセー先輩に何があつてもずっと一緒にです。ウルトラマンになつてもイッセー先輩はイッセー先輩ですから」「そうにやん。白音と私はイッセーとずっと一緒にいたいと思つてゐし、イチャイチャしたいにやん♪」

黒歌と白音はイッセーに抱き着き頬ずりをする。

「私も同じですよイッセーさん。あなたは力に怯えていると言つていますが私たちがその恐怖を和らげます」

アーシアはイッセーの手を包み込み、母親のような顔でイッセーに笑顔を贈る。

「イッセー、今は私たちは足手まといだけ必ずあなたの助けになつてみせるわ」

リアスは笑顔になつてゐるがその瞳は真剣そのものだつた。

「皆……ありがとう」

イッセーは涙を流すのを堪えながらリアスたちにお礼を言つた。

一方一正はパーティーが終わつて夜道を散歩しながら今回の原作の歪みに憤つていた。

「なんでだよ!コカビエルが味方になつてるなんて明らかに原作が崩壊してるだろうが!?.なによりなんでイッセーがウルトラマンになつているんだ!?」

一正是転生する前のハイスクールD×Dの知識だけではなくウルトラマンの知識も当然持っていた。しかし

「あんなウルトラマン俺は知らねーぞ!?他のウルトラマンをカードにして変身なんて通りすがりの仮面ライダージやあるめーし!!」

一正是ウルトラマンオープのことについては一つも知らなかつた。それどころか

「なんでゼノヴィアはアーシアに好意的だつたんだよ!?普通だつたら聖剣を構えてアーシアを殺そうとするはずじやねえか!!」

本来ならアソコでアーシアを庇い、いい男の振りをするつもりだったがまたしても予想外のことが起きた。

「クソッ！こうなつたらまずは朱乃の過去のトラウマを慰めて好感度を上げて油断したところで洗脳してやる!!」

色欲しかない一正の頭に次々と悪足掻きの策を巡らせる。

「不本意だが次の話でアザゼルからドライグとの禁バランス・ブレイク手化ができるリングを手に入れてヴァーリと勝てないまでもなんとか戦つてリアスたちにいいところを見せて後に惚れさせる!」

叶わぬ妄想を吐く一正だが無意味だ。ライザーとのレーテインングゲームの時の譲渡の覚醒もドライグの気まぐれということに自覚している。

「ウヒヤヒヤ！面白そうな才モチャ見いくけつ」

そんな愚者を見て面白そうに笑う十二枚の悪魔の翼を広げて飛ぶ銀髪の男がいた。

停止教室のヴァンパイア 総督と魔王の会合

「いや～コカビエルから聞いていたんだが、やつぱりお前さんのこのリングとカードは実に興味深いぜ！」

「あ～そうですか……」

イッセーは朱乃からコカビエルが使っていたマンションのある場所へ来て欲しいと連絡が来たので訪ねるとひょんなことからマンションのオーナーがイッセーに絡みリングとカードを見せて欲しいと頼まれた。

「このリングとウルトラマンだけか？そのカードを使うとお前さんが変身してウルトラマンオーブになるんだよな？」

「はい。ただ1枚だけじゃあ変身出来ませんし、全てのウルトラマンでOKじゃありません。特定の組み合わせでないとフュージョンアップ出来ません」

「で、どうやつて変身するんだ？つーかお前を連れて帰つてウチのところで解剖していいか？」

「いえ、まずそんな危険なところに行きたくありませんから」「冗談だよノリ悪いな～」

「あらあらうふふ、アザゼルさん。イッセーくんが困っているのでそろそろおやめ下さい」

イッセーが身じろぎ出来ないのは朱乃が抱き着き魅力的な体を押し付けているためだった。ちなみに朱乃はイッセーの反応を楽しんでいた。

「わーつたよ。それと朱乃、こつからはちょっと重要な話をするから席を外してくれねーか？」

「…………分かりました」

アザゼルと呼ばれた男は先ほどのおちゃらけた顔と打って変わつて真剣な顔になり朱乃に頼み込む。朱乃も雰囲気を察したか名残惜

しそうに部屋から出た。

「いくつかの質問に答えてもらうぜ兵藤一誠？」

「はい」

アザゼルの真剣な顔にイッセーも氣を引き締めた。

「お前さんは三大勢力の戦争の結果と【二対の獣】を知っているか？」
「最初の質問ですが部長……リアス・グレモリーから聞いただけですが元々あなたたちは地獄の霸権を求めて戦争をしていたと聞いています。そして魔王やあなたの方トッ普しか知らないある理由で戦争は膠着した。そして魔王やあなたの方トッ普しか知らないある理由で戦争は膠着した。その二対の獣というのは知りません」

「…………分かつた。とりあえず嘘は言つてねえな」

「嘘を言う理由がありませんから」

イッセーの応答に納得したのかアザゼルも力を抜き、先ほどの氣の良いおつさんの顔になつた。

「ええ、そう遠くない内に」

イッセーはこれまで経験した厄介事からおそらくすぐにでもアザゼルとまた会うだろうと感じた。

「なるほど、アザゼルに会つたのね？」
「やつぱりマズかつたですか？」

イッセーは放課後に部室でリアスに報告するとリアスは仏頂面からいつもの顔になるとイッセーに

「一応問題ないけど他の悪魔には喋っちゃダメよ。未だに他の勢力には厳しいのもいるんだから」

「分かりました。……でもこの町では部長と会長以外の上級悪魔はないですよね？」

「それでも、よ。変に弱みを見せたら他の悪魔はあなたを脅迫して無理矢理転生させらるかもしねは」

イッセーはリアスが心配しているのが分かつたのか頷く。

「ねえねえイッセー」

「黒歌さん？」

黒歌はイッセーの背中に抱きつくがいつもより力が弱いことにイッセーは感じた。

「イッセー、本来悪魔は自らの欲のためにどんな悪事だつて平気でやるの。リアスちゃんやソーナちゃんたちみたいな悪魔はほとんど稀にやん」

「黒歌さん……」

イッセーは黒歌の微かに震えている手にそつと手を添えて安心させるために

「大丈夫。どんな悪魔が来てもオーブになつて返り討ちにしてやります。部長たちも黒歌さんも護りますから安心してください」

「イッセー……」

黒歌は顔を上げイッセーに近づく。お互いの唇が重なろうとした

刹那

「姉様、抜け駆けはダメです」

ルーフ

白音は黒歌の腰に手を回し戦車の怪力を発動して黒歌の動きを止めた。

「ありやりや残念。それじゃイッセーまた明日ね♪」

黒歌と白音は部屋から出て行きイッセーとリアス2人となつた。

「それじゃあ部長。また明日「イッセー」？」

イッセーは自分の家に戻ろうとしたがリアスに両手で自分の手を掴まれ動けなかつた。

「イッセー、私はまだ未熟だけどあなたを護つてみせる。だからあな

たは自分を恐れないで

「部長……」

「イッセー……」

リアスの瞳は潤みイッセーの顔に近づくが
「リアス、君も大人になつてゆくんだね……」

「キヤアツ!?」

「……何やつてるんですか」

サー・ゼクスの突然の出現に驚いたリアスだつたがイッセーは気配を察知していたので驚きはしなかつたが照れてはいた。

「お嬢様、もう少し淑女として振る舞いをして下さい。いくら意中の相手とはいえそんなはしたないことは…………」

「もう! お兄様もグレイフィアも少しは空氣を読んでよ!!」

リアスは立腹だつたが魔王が来たからか氣を引き締めた。
「なぜこんな所に? 魔王であるあなたが一介の悪魔に会いに来るのは
いけませんよ?」

リアスは真剣そのものだつたがサー・ゼクスはにこやかに懐からプリントを出して

「明日は授業参観じゃないか。だつたら兄である僕が出ないワケにも
いかないだろう?」

「そんな……グレイフィアね! お兄様に密告したのは!!」

サー・ゼクスの言葉にリアスは先ほどの真剣な空氣から年相応のものとなりグレイフィアを睨みつけた。

「サー・ゼクス様の女王クイーンですかから報告はすべきかと」

そういうことでリアス。僕は必ず参観日に行くから楽しみにして
いてくれ。あ、ちなみにお父様もくるからね

「そんな……またあんな恥ずかしいことが……」

「部長、元気出してくだ「兵藤イッセーくん」?」

頃垂れるリアスを慰めるイッセーだがサー・ゼクスの呼びかけに振り向いた。

「まことに申し訳ないのだが君の家に行つてもいいかな?」
「はい?」

「美味しいですね。一正くんとイッセーくんのお母様の料理は本当に素晴らしいです」

「あらあらリアスさんのお兄さんつたら嬉しいこと言っちゃつて！」

「さあさあ、一緒に飲みましょようよ！」

「イッセーはイッセーの母親の料理を食べながら父親から注いでもらつた酒を乾杯しながら飲む。

「ところでうちの一正是迷惑をかけていませんかね？あの子はどうもイッセーを目の敵にしていて……」

「いえ、少なくともそんな表沙汰になるようなことはしていませんよ。妹の部活の一員としてお世話になつていますから」

父親が一正のことをたどたどしく聞くとサーベクスは安心させる笑みで一正のことを説明した。

「ふう、イッセーくんの両親はいい人たちだ。君が立派に育つたのも納得できるよ」

「ありがとうございます」

サーベクスはイッセーの部屋でベッドで寝ながら両親を褒め称える。

「ところで本当にいいのかな？僕は突然来たようなものだし本来だったら君がベッドで寝るべきだと思うんだけど

「魔王様に布団で寝させるワケにもいかないですよ」

サー・ゼクスの言葉にイッセーはフォローしながら布団に寝る。

「急に申し訳ないのだけど少しいかい?」

サー・ゼクスの真剣な表情にイッセーはある言葉を出した。それは「二対の獣……ですか?」

「やつぱり君は知っていたんだね」

サー・ゼクスは表情をさらに険しくするがイッセーは理由が分からなかつた。

「アザゼルさんからも聞いたんですけどなんなんですかその二対の獣つて?」

「なるほどそういうことか……」

サー・ゼクスは顔を伏せて低く唸るがすぐに好青年の表情になり「イッセーくん、できれば会談の日にリアスたちと一緒に君にも来て欲しいんだけどいいかな?」

「いいですよ。俺も聞きたいことがありますから」

イッセーはサー・ゼクスの申し出を受け、明日のために意識を落とす。

プールとドラゴン

「ここは……いつもの空間じゃない？」

イツセーが目にしたのは白い空間ではなかつた。むしろ逆だ。暗い闇の空が出てる深い森だつた。いつも意識がなくなつて、決まってウルトラマンの人間態が現れてこれからを説明するのだがいつもの白い空間ではなかつた。

「どこかにウルトラマンさんがいるのか？」

イツセーは周囲を観察しながら森の中を進みウルトラマンがいかを探し続けた。

ドゴォン!!

「何だ!?」

イツセーは爆発音の元へ歩むとそこには見知った顔があつた。

「黒歌さんと部長と白音ちゃんと……アイツは誰だ？ それにあのドラゴンは一体？」

イツセーが目にしたのはドレスを着たオカルト研究部のメンバーの一部とティアマトと同じくらいの大きさの紫のドラゴンとそれと戦っているミラとは違う長い棍を持つた中華服を着た茶髪の活発そうな青年だつた。

「あの男は誰だ？ なんで顔が見えないんだ？」

イツセーが一番気になつたのは顔の見えない男だつた。理由は分からぬが男の顔は白いモヤみたいなもので隠されていたが駒王学園の制服を着ていたのでますますイツセーは混乱する。

「部長と白音ちゃんとアイツはなんで黒歌さんと敵対しているんだ？」

イツセーがそう言うのも無理はない。リアスも白音も戦闘体勢となつていたからだ。リアスは全身に滅びの魔力を滾らせているし白音も殺氣と覚悟が籠つた目で黒歌を見据えていたのだ。

「あの男、何をするつもり……何!?」

イツセーは目を疑つた。男が左手に具現化した武器それは「兄さんの……赤龍帝の籠手!?」なんでアイツが兄さんの神セイクリッド・ギア器を!?

イツセーが目にしたのは本来自分の武器であるはずのものを一正が奪い取つたのだがイツセーは知らない。だが何故か違和感がしなかつた。

「なんでだ……なんでこんなきもちが湧き上がつてくるんだ……ってハア!?」

イツセーに頭に酷い痛みと胸に強い苦しさが襲いかかるがあるものを見たらそれらは吹き飛んだ。

「ぶ、部長!? なんで胸を出してるんですか……って、テメエ!! 何こんな状況で部長の胸を触ろうとしてやがる!?」

イツセーは飛び出して男に殴ろうとするがそこで意識は途絶えた。

「テメエ！ 部長の胸を触るんじゃねえ!!」

ムニユ

「いやんつ……」

「あれ?」

イツセーが目覚めて触れた物はリアスの柔らかくも弾力のある芸術品のようなリアスの乳房だつた。

「もうイツセーったら他の男が私に触る夢でも見てたの? 心配しなくても私はあなたのものよ? この胸だつて」

リアスはイツセーが戸惑つている隙に手を取り自分の服をずらして自分の胸に直接触らせようとする。

「イツセーさん、イツセーさんは大きな胸が好きなんですか?」

イツセーは目が笑つてない笑顔のアーシアにリアスの手を振りほどいて必死に否定する。

「まつたく、少しは私にだつて……」

「えつとゴメンなアーシア？つてそう言えばどうしたんですかこんな休日にな？」

「ああ、それはね……」

「学校でプールですか？」

「ええ、ソーナたちにお願いしてみたんだけど掃除をしてくれるなら好きに使つてもいいって」

リアスはイッセーの腕を恋人のように絡みながら学校へ連れて行く。

「俺も掃除を手伝えばいいんですよね？」

イッセーはやる気を出しながら学校へ向かうがリアスは可笑しそうに笑った。

「もう終わらせたのか!?」

「うん、今回の目的はこの頑張りすぎのイッセーくんを楽しませるために僕たちがやつといたから」

祐斗の言葉に驚くイッセーだったがメンバーの中で足りない人物がいた。

「あれ、兄さんは？」

「ああ、一正くんは誘つたんだけど「悪いけど用事があるから無理だ」って言つてた」

イッセーは少し残念な気分だが黒歌と白音は内心せいせいしていた。

「それじゃあみんな水着に着替えましょう！」

リアスの言葉にイッセーたちは男子用の更衣室へ、リアスたちは女

子用の更衣室へ行くがその顔には何かの企みを浮かべていた。

「よしそれじゃあ俺は先に泳いでくるつて言いたいけどウルトラマンさんたちをどうしよう……」

「それじゃあ僕が預かつておくよ」

イッセーはウルトラマンたちのカードが入ったホルダーをどうするかと迷つたが祐斗が親切に預かつてもらうというのでその厚意に甘えた。

「ありがとな祐斗」

「どういたしまして」

「イッセー、ちょっと見てもらえるかしら？」

イッセーは更衣室から出て泳ごうとするがリアスの声がしたので振り向いた。

「どうしまし……っ」

イッセーが言葉を失うのも無理がなかつた。

リアスを筆頭にアーチャーたちも現れそれは魅力的な体に水着も相まって、彼女たちの美貌を引き立たせた。

「誰が一番似合つているか言つて欲しいんだけど」

呆然とするイッセーに苦笑しながらも褒めて欲しいリアスは挑発するような表情で感想を求める。

「いやいや！ そんなことしなくてもみんな綺麗だから大丈夫ですよ！」

「そんな釣れないことを言うと今度からみんなでイッセーの部屋へ行つて水着を着て起こすわよ」

「別に私はそれでもいいけどにや／＼」

イッセーはハイカイエスの選択肢しかない脅迫に近い形の命令に従いなんとかリアスたちを褒めたが何故か木場はゴメンねと心の中で思つた。

「ふう、たまにはこんなのもいいかもな」

「先輩……」

イッセーはプールに浮かんでおり、気ままに流れていたが顔を赤くしながら近づいた白音にどうしたと聞くと

「私、泳げなくて……先輩、教えてくれませんか？」

「ああ、いいよ」

かわいい後輩のためにイッセーは白音の手を取りバタ足から練習させ、徐々に水に慣れるように手伝う。

「イッセー、白音ばっかりズルいにゃ～ん！私にも構つてよ～～!!」

「く、黒歌さん！」

黒歌はイッセーに抱きつきその豊満な乳房の感触で誘惑する。黒歌が着けているのは朱乃が着けてる白いビキニとは対照の黒いビキニだ。少しでも動かせば黒歌の桜色の大切なものが見えてしまうのでイッセーは下手に動くことができなかつた。

「わっふ！」

「姉様、今は私の番です！」

「むう～～！妹のくせに生意氣ニヤ～～！」

黒歌は白音に水をかけられたからかその癖がある黒髪を猫のように逆立たせた。

「あの二人とも……って部長の使い魔？」

幸か不幸カリアスの使い魔のコウモリがイッセーに近づきカリアスの元へ案内する。

「部長、どうしました？」

「イッセー、私にオイル塗つてくれないかしら？」

「えつ？」

リアスはオイルのボトルをイッセーに見せるついでにグラビアアイドルのような際どいポーズで誘惑する。

「それは黒歌さんたちにやらせてくださいよ！」

イッセーは見ないように回れ右をし後ろを向く。

「イッセーつたらいつも戦っているところはカツコイイのにウブなどころはかわいいわね」

「ちよつ、部長！」

リアスイツセーが後ろに振り向いたことにいいことに抱きつき胸を押し付け耳元に息を吹く。

「さあイツセー、どうする？ 私にオイルを塗るかそれともこのままオモチャにされるか選びなさい」

「オイルを塗りますから離れて下さい！」

リアスはイツセーの体を触りながら艶やかな声で言い、イツセーも応じるしかなかつた。

「疲れを癒すためのプールなはずなのになんでこんな疲れんだ？」

あれからイツセーはリアスの他に朱乃たちにもオイルを塗つたのだがその時の女体の感触と艶やかな喘ぎ声に悩まされた。

「ハア～～こんな感じやあコレは扱えねえな」

イツセーはホルダーから白紙のカードをアンニュイになりながらも取り出すが落ち込んだままだつた。

「ウルトラマンさんたちももつと助言して欲しいよ」

ないものねだりをするイツセーだがカードをホルダーに戻し表情を変え光の力を巡らせながら足を進ませ、ある場所へ向かう。

「初めて、ではないな先日会つたんだからな」

「ふふ、やはり気付いていたか」

イツセーが進んだ先には妖しい魅力を持つた銀髪の青年がいた。

イツセーを見るなり満面の笑みを浮かべる。

「素顔では初めましてだな」

「そうだな、あの時は顔を出していなかつたからな」

イツセーは光の力を青年は悪魔の力を身に宿らせながら相対する。互いのオーラがぶつかり合い空間に悲鳴が上がる。

「久しぶりだな白龍皇」

「久しぶりだ。ウルトラマンオーブ」

汚染の魔獸

「なんの用だ白龍皇？」

「ツレないなウルトラマンオーブ？さつきから俺のことを気付かないふりしながら気付いていたじやないか」

白龍皇は苦笑しながらイッセーに文句を言うがイッセーは鋭い眼差しのまま殺氣を放ち

「あれほどの殺氣をぶつけられたらどんな呑気な奴でも身構えると思うが？それと俺は兵藤イッセーだ。ウルトラマンオーブはあくまで変身した姿と力だ」

「そとかそれではこちらも改めて白龍皇のヴァーリだ。以後お見知り置きを」

ヴァーリの殺氣を感じ取つたイッセーは既に臨戦態勢となり光の力を体に漲らせ、いつでも戦えるようにしていたがヴァーリはその様子を見て子供のように笑つていた。

「ふふ、本当に君は最高だウルトラマンオーブ。噂ではあの最強の龍王のティアマットを赤子扱いした化け物を倒したというではないか」「俺一人じゃない。部長やティアたちの協力がなかつたらあの化け物には勝てなかつた」

「随分と謙遜するね。弟の君がこんな強者だというのになんてあんな愚かな兄が赤龍帝なのか理解に苦しむよ」

ヴァーリはやれやれといった感じで困惑するが未だにイッセーに向けて殺氣を出したままだつた。

「俺を怒らせるためにわざわざ出向いて来たのか？だとしたらヴァーリはとんだ暇人ならしいな」

「失礼だなあ。こう見えても俺はちゃんと働いているんだぞ？なんとか休みの時間を削つて君に会いに来たんだ」

イッセーも皮肉を言うがヴァーリの方は笑みを崩さない。

「そこまでよイッセー、白龍皇。あなたたちがこんなところで戦つたらここいら一帯は一時間足らずで更地になつてしまふわ」

ティアマットはイッセーとヴァーリの間に止める形で現れ、リアス

たちオカルト研究部も来た。

「分かつてるよティア。部長たちも抑えて下さい」

イッセーはリアスたちを沈めて戦いを止めたがヴァーリの方は何故かく落胆していた。

「ふう、せつかく戦えると思っていたのだが龍王も加わったとなると分が悪い。ここは一旦引くとしよ……なんだ!?」

「臭つ!? なんだよこりやあ!!」

突然凄まじい悪臭がこの場に漂いイッセーとヴァーリは思わず声を上げながら鼻を摘んだ。

「きゅう……」

「ダメにや……耐えられないにや……」

「白音ちゃん！ 黒歌さん！ しつかりして!!」

あまりの悪臭に鼻がいい黒歌と白音は目を回しながら気絶し、祐斗は風を起こす魔剣を創り、臭いを飛ばしながら2人を介抱する。

「皆！ 大変よ!!」

「レイナーレさん!?」

レイナーレは突然飛んで来て何かを伝えようとしていた。

「イッセーくん！ とりあえずこの魔法陣をくぐつて頂戴!!」

「わ、分かりました」

理由を聞こうとするイッセーだったがレイナーレの必死の形相で聞くことが出来ず無理矢理魔法陣へ入らされた。

「イッセー待つて！ 祐斗！ 黒歌と白音をお願い!!」

「分かりました!!」

「待つて下さいイッセーさん！」

「面白そうだな」

イッセーを心配したリアスとアーシアは魔法陣に入りついて行くがどさくさに紛れヴァーリも行ってしまった。

「……森か？にしては随分とゴミがあるな」

イッセーが到着した森は不法投棄されたゴミやガラクタなどの酷い森だつた。動物が生きていけないほど荒れていた。それだけではなく近くに工場がありその工場の廃棄物が加わり最早言葉に出来ない。

「イッセー！アレを見て!!」

リアスが指し示した方には

「うつぶ……なんだあの間抜けそうな怪獣は？」

その怪獣は大きな丸い目のおかげで多少は愛嬌はあるものの、まるでタツノオトシゴに手足だけでなく、頭頂部や背中に鰓を付けたような姿をしており、なによりもその体臭と吐き出す息はこの世のモノとは思えないほど最悪だつた。

その怪獣の鼻は悪臭を放つ噴射口となつており、その悪臭は水を濁し、空気さえも濁すほどの害獣。水ノ魔王獣【マガジヤツパ】が佇んでいた。

「クアクアクア」

マガジヤツパが歩を進めると悪臭が周囲に拡散し森の花や木々などの植物は枯れてしまつた。

「臭つ！アイツがこの臭いの原因か!?」

「イッセー大丈夫!?あんな臭さの怪獣と戦えるの!!?」

「ハイ……うえ……なんとかやってみます」

心配するリアスに説得力のない説明をするイッセーはオーブリングを出現させ握り締めて構えを取る。

「ウルトラマンさん！」

「ULTRAMAN！」

「へやアツ！」

イッセーはリングにウルトラマンのカードを翳し2枚目のカードをホルダーから取る。

「ティガさん！」

ULTRAMAN TIGA!>

「チヤツ！－

「光の力、お借りします！」

ティガのカードを翳しリングを掲げトリガーを押す。

〈FUSION UP！〉

－シユアツ！－ 一チヤアツ！－

〈ULTRAMAN ORB！SPACIUM ZEPERION

!!〉

「オオラ！」

「グア！」

スペシウムゼペリオンとなつたオーブは時空間から飛び立つた勢

いを利用した飛び蹴りを見舞うと、そのままティガの剛力で追撃しようとするが――

「臭ああ……」

「クアクアクア」

あまりの臭さにオーブは鼻を抑え動きを止めた。その様子が可笑しいのかマガジヤッパは高笑いをしていた。

「フム、せつかくだし助太刀するとしよう。行くぞアルビオン」

『良いだろ。行くぞヴァーリ』

ヴァーリは背中に青い機械の翼を出現させある言葉を放つ。

〔バランス・ブレイク
禁手化!!〕

『Vanishing Dragon Balance Break
er!!』

ヴァーリは龍を模した白い鎧を纏い魔力を全身に漲らせマガジヤッパに強力な魔力弾を浴びせた。

「フム、確かにこの臭いはキツイな」

『ヴァーリ、接近はせずに魔力弾メインで戦え』

『分かっている……なんだ!?』

『くつ！なんだこの吸い込みは!?』

マガジヤッパの体の各所に穴が空き、強烈な風と共にオーブと

ヴァーリは吸い寄せられる。

〔「グオオオオオオオオ!?」〕

2人はマガジヤッパの凄まじい悪臭を直接嗅ぐことになり、あまりの臭さに全身の力が抜かれる。

「ゲエエエ」

「うつぶ……」

「グアアア……」

マガジヤッパの吐息の臭さに思わずオーブとヴァーリは呻くがマガジヤッパはそれでも止めるつもりはない。

「オラア!!」

「クオオオ!!」

オーブはエネルギー弾をマガジヤッパに喰らわせ、ヴァーリを掴んでマガジヤッパから距離を置いた。

「うえつ……すまないなウルトラマンオーブ」

「これ以上お前が戦つても無駄だ。それにお前も限界だろう?」

「……」

ヴァーリは鎧を解除し、元の姿に戻りその場から離れるのを確認したらオーブはカラータイマーを光らせる。

「ジャックさん!!」

♪ULTRAMAN JACK!♪

ーシュアツ!!

「ゼロさん!」

♪ULTRAMAN ZERO!♪

ーデエエエヤツ!!

「キレの良いヤツ、頼みます!!」

♪FUSION UP!!

ーシュアツ!! ーデヤツ!!

♪ULTRAMAN ORB! HURRICANE SLASH!!

!!

スペシウムゼペリオンからハリケーンスラッシュに変えたオーブは鋭い風を纏つた蹴りをマガジヤッパに喰らわせた。

「光を越えて闇を斬る!!」

「クアーーー!!」

マガジヤッパは怒り接近するがオーブはスラッガーを投擲し距離を置きながら応戦する。

「よし、お前も戦えウインダム!!」

オーブは小さいカプセルを放り投げ、使い魔のウインダムを召喚した。

「クアーー!!」

「グアア!!」

カプセルから放たれたウインダムは額のレーザーをマガジヤッパに放ちながら接近し、パンチやキックなどの肉弾戦に切り替える。

「そうち!!」

オーブはスラッガーをマガジヤッパに投擲し、手元に引き寄せてそれらを回転する。

「オーブスラッガーランス!!」

「クアアア!!」

オーブがランスを構えると同時にウインダムはレーザーを放ちマガジヤッパにダメージを与え隙を作る。

「すうつら!!」

「グアアア!!」

オーブはランスをマガジヤッパに突き刺し柄のレバーを2回倒しエネルギーをランスに注ぐ。

「ビックバンスラスト!!」

「グアアアア!!」

オーブの必殺技にマガジヤッパは耐えられずその身を破裂させた。

「戻れ! ウィンダム!!」

「クアーー!!」

オーブはウィンダムに向けて手を伸ばすとウインダムは光の粒子になつてカプセルとなりオーブの手に渡つた。

「二度と戦いたくない相手だつた……色んな意味で」

オーブは変身を解きイツセーに戻ると一秒でも早く体にこびり付いたニオイを取りたいため家に戻つた。

「……今回は俺の完全な敗北だな。まあいい、オーブの力を2つ見れ

ただけでよしとしよう」

ヴァーリは魔法陣を展開し、アザゼルが住んでいるマンションへ向かつた。

「先日はヒドい目に遭つたな。なんだつてあんな吐きそうなくらい臭い怪獣と戦わなきやいけないんだ」

「イッセー、重くなつてているところなんだけど私たちのデート忘れないでよ?」

イッセーはリアスに腕を絡められ自由に動けなくなつてゐるが、振り払うつもりはなかつた。というよりは

「そう言えれば部長。部長にはアーシアの他にも僧侶ビショップがいるんですよ? なんでレーディングゲームやバルバーの時に呼ばなかつたんですけど?」

「そうね……」

リアスは女の子の顔から真剣な顔になりイッセーに説明する。

「その子は持つてゐる力が強すぎるの。もちろん一正のような神滅具ロングヌスみたいな強力な物じゃないけどね」

リアスは僧侶のことを説明しながらイッセーに

「イッセー、あの子を助けるのはあなたしかいないわ。時が来たらその子を助けてちようだい」

「分かりました。俺がなんとかします」

イッセーはリアスの頼みに意氣込み相手の心の闇から救える方法を考えた。

「やれやれ、軽い下見のつもりだつたがとんだ目にあつてしまつた」
ヴァーリは苦笑しながら部屋に戻つて体を洗つていた。マガ
ジヤッパの悪臭は早く記憶から消したいほどのヒドさだつたからだ。
「さて、アザゼルに報告書を書くとしよう」

「ヴァーリ、臭い」

ヴァーリがシャワーから上ると黒のゴスロリの少女がソファー
でお菓子を食べており、匂いに敏感なのか鼻をつまんでいた。

「おやおや、これでも匂いは消したんだけどね。ところで君はココに
いていいのかい？ 仮にも俺らのリーダーなんだから」

ヴァーリの言葉にゴスロリの少女は我関せずと言わんばかりにた
だ黙つていた。

「まあいいさ、君に喧嘩を挑むほど自惚れてはいない。ましてや最強
の

大変、システムたちが来た！

「イッセー、一正！二人でいいもの作るんだぞ!!」

「アーシアちゃん、ゼノヴィアちゃん！下手でもいいから頑張つて作りなさい！」

参観日の授業で何故か英語の授業なのに粘土で工作する授業となり、倒錯していたイッセーだつたがクラスメイトたちは黙々と作業をしていたので黙つてやつた。

（……つつても何作ればいいんだよ。さすがにウルトラマンさんたちやオーブを出すわけにもいかないしな）

イッセーは悩み続けた結果作ったのは
「ホウ！兵藤の弟くんはこれまた素晴らしいモノを作りました！私は生徒の才能を開花しました!!」

『スゲー！』

『カッケー！なんだそのオブジェみたいなの!?』

オープニングを模した粘土細工を提示すると教室にいた人々はイッセーに関心し、イッセーの両親は誇らしげだつた。

授業が終わつた後、リアスと合流し作つた粘土を見せた。
「よく作れたわね。装飾とかもリアルだし、掲げたら本当に動き出しそう」

「兵藤一誠くん」
「あなたは……部長のお父さん？」

イッセーが振り返つた先にはリアスと同じ鮮やかな赤い髪の美丈夫がいた。サーゼクスやリアスと同じ色の髪からしてグレモリーの当主だろう。

「私はジオティクス・グレモリー。君と会えることを楽しみにしていました。そして急ですまないが礼を言わせてくれ」

ジオティクスが頭を下げるが急な展開にイッセーは困惑する。

「あ、頭を上げて下さい！俺は自分の意思での結婚式を壊したんですから」

イッセーはなんとかジオティクスに頭を上げようとすると本人は頑なに上げようとしなかつた。

「お父様、イッセーくんはもう許しています。それ以上下げても逆にイッセーくんに迷惑がかかりますよ」

「む、それもそうかありがとうイッセーくん。君の広い心に感謝するよ」

サーゼクスがフォローするとジオティクスは申し訳なさそうに頭を上げた。

「魔法少女の写真会があるってよ！」

「ウオオオオ!! 魔法美少女オオオ!!!」

イッセーとジオティクスの間に凄まじい勢いで生徒が駆け抜けたがイッセーはなんだと思ったがサーゼクスとリアスは心当たりがあるのか苦笑いをしていた。

「なんだこの行列は？ 一体誰がやっているんだ？」

「こらこら！ こんな通路のど真ん中で写真撮影なんかするな！ とつとと早く教室へ戻りやがれ！」

戸惑うイッセーを他所に匙は生徒たちをどかしこの騒動の中心の人物であるアニメに出てくる魔法少女の格好をした女の子に近づく。「あのー、どなたかの妹さんでしようか？ 出来れば学校でそんな格好はやめてほしいんだけど……」

「えへへ、これは私にとつて勝負服なんだよ。それとこれでも一応君より年上なんだからね」

「あの、なら一層そんな格好はダメなんですが」「やあ、セラフオルー」

サ、サー・ゼクス様!』

匙が困惑するがサー・ゼクスは知人のセラフオルーという名の女の子に近づいた。

「あ、サー・ゼクスちゃん!」

「サー・ゼクスちゃん!?」

「もしかして……」

「おや、どうやらイッセーくんは気付いたようだね」

女の子のサー・ゼクスのちゃん付けに戸惑っている匙に対し、イッセーは何かを感じ取つたらしく神妙な顔になる。

「サー・ゼクスさん、その人は魔王ですね?』

「え?』

「へへへ私のことが分かつちやつたんだ?』

「ティアやグレイフィアさんやサー・ゼクスさんと少し雰囲気が似ていましたからね。さすがに最初は魔王とは思えませんでした』

イッセーが感じ取れたのはこれまでの怪獣との戦いで得た観察眼で、セラフオルーの内包している魔力の質と量でティアマットとグレイフィアとほぼ同等の力を感じ取つた。

「君の言つた通り彼女は僕と同じ四大魔王の一人セラフオルー・レヴィアタンだ。説明しようと思つていたけど必要なかつたね』

サー・ゼクスは笑つていたが匙の方は魔王相手だつたからか顔を真つ青にし、セラフオルーの足元へ跪く。

「も、申し訳ございませんでしたレヴィアタンさま!!』

「いいのいいの♪気軽にレヴィア坦んつて呼んでね♪』

匙は先ほどの無礼を謝るがセラフオルーは全然気にしていなかつた。

「ねえねえサー・ゼクスちゃん。この子が噂のウルトラマンオーブ?』

「そうだよ。彼はウルトラマンオーブに変身して戦う兵藤一誠くんだ』

セラフオルーはイッセーを興味津々な目で觀察し嬉しそうにイッセーの周囲を動く。

「初めてましてセラフオルーさん。一応サー・ゼクスさんの妹、リアス・グ

レモリーの仲間として悪魔たちと協力しています兵藤一誠です

「あはは♪ 礼儀正しいね。もう少し気軽にこうよ私のことはレビュー
アたんって呼んでいいから♪」

あまりの軽さに困惑するイッセーだったが匙の方は気が気がでなかつた。

「あの……「何をしているのです匙」あ、会長」

匙が困惑している最中ソーナが突然現れ匙に嘆息する。

「全く、いつも仕事を迅速に行いなさいと「ソーナちゃん!」

ソーナが匙に注意をするが女の子は関係なしにソーナに近づく。
ソーナは叱り顔から急に真顔になつた。

「うふふ！今日は参観日があるつて聞いたからお姉ちゃん張り切つて勝負服で来ちやつたよ！嬉しいソーナちゃん！？ってあれ？なんで顔を赤くしてるの？もしかしてお姉ちゃんが来て嬉しすぎた!?」
セラフオルーはヒートアップするがソーナは恥ずかしさが比例しているのか顔を赤くしてゆく。

「も」

『も?』

「もうイヤアアアアア!!!!」

ソーナは恥ずかしさが爆発したのか光の速さと言つていいほどの速度でセラフオルーから逃げた。

『待つてよソーナーーーーん!!!!』

『たんを付けないでとあれほど言つたでしよう!?』

セラフオルーは同じ速度でソーナを追いかけ姿を消す。

「リーアたん。僕たちは教室に戻ろうとしようか」

「お兄さま。愛称にたんを付けないでください」

「そんな、リーアたん！小さい頃はあんなに喜んでいたのに!!」

「私はもう子供じやありません!!」

リアスも落ち込みながらもサーゼクスにツツこむがイッセーは同情する。

「……魔王つて厳格なイメージだつたんですけど案外軽いんですね」

他にも言いたいことがあつたのだがオブラーートに包んでイッセーは魔王たちに対して感想を言う。

「……本当に仕事ではキツチリしてるんだけどプライベートではどの魔王さまも恐ろしいほど軽いのよ」

リアスもイッセーと一緒に溜め息をつくがイッセーに思い出したかのように

「イッセー、放課後に来てくれないかしら？」

「はい？」

「引きこもりにあつてほしい？」

「正確には引きこもつてている私の眷属なんだけどね」

放課後リアスと一緒に部室のある旧校舎に向かいながら話を聞いた。

「俺が出来るでしようかね？ライザーミたいなメンタル弱い奴を無理に引きずり出すと余計引きこもりを強めるかもしれませんし」

イッセーがライザーが引きこもつてているの知っているのはライザーの眷属の僧侶ビショップでありライザーの実妹でもあるレイヴエルから手紙が時々送られてくるのだ。それからライザーが引きこもりなのを知った。

「ココがそうなの」

「なるほど、確かにただの引きこもりじゃありませんね」

リアスに連れてこられたのは「keep out」や「立入禁止」などの一般の生徒や部外者の侵入を拒むためにテープやバリケードが立てられた部屋だった。

「あなたならギヤスパーを助けることが出来るかもしねないの。お願いいイッセー」

「分かり 「イヤアアアアア!!!」 なんだ!?」

中からギヤスパーと思われる人物の声が鳴り響き、イツセーはバリケードを蹴りで破壊した。

「大丈夫か!?

「ヒ、ヒイイイイ!!!」

イツセーの目の前に金髪の麗しい者がいた。

後輩バンパイアを救え

「大丈夫か!?」

「ヒ、ヒイイイイ!!!」

ギヤスパーの叫び声に反応したイッセーは鎖が掛けたドアを蹴破り中に入つて周囲を見るが敵らしきものはいなかつた。代わりに

「大丈夫か? 何があつた?」

「だ・大丈夫ですう」

アーシアとは別の金髪の美少女がいた。その濡れた赤い瞳はまるでルビーのような輝きを放つていた。

が、イッセーは何故か違和感を感じた。

「イッセー! どうしたの!」

遅れてリアスたちも部屋に入り様子を窺つた。

「一体どうしたんだ? 何があつたのか教えてくれ」

「ア、アソコにい……」

ギャスパーが指差した先には

「ゴ、ゴキブリイイイ!!!」

アーシアは化け物に遭遇したかのように絶叫するがリアスたちはやれやれと肩を下げる。

「あの、部長? この子がギャスパーなんですか?」

「ええ、その子の名前はギャスパー・ヴラディ。駒はアーシアと同じ僧侶ビショップよ。ちなみにその子は一応……」

ギャスパーの秘密を説明しようとするとイッセーは

「男なんだからゴキブリなんかにビビつちゃダメだろ?」

「え?」

「男なのよ……つてイッセーよく分かつたわね。てつきり女の子だと思つていたと思つたんだけど

「あれ?」

イッセーは疑問に思つたが何故か違和感がなかつた。まるで知つていたかのように

「またか、あの時からずつと何かがおかしくなつてるのは……」

「あの～～」

イッセーはこの頃よく見る夢で何かがおかしいと感じていた。ウルトラマンたちのカードを手に入れる度に段々とおかしくなつてきると思つた。しかしながら、一番おかしいのは

（なんで懐かしいと思うんだ？）

違和感しかないのにソレらが一番しつくりときていた。

「俺は一体……『イッセー！』！」

イッセーはリアスの言葉に意識を覚醒し、ギャスパーの顔を見る。

「そ、そんなに見られると恥ずかしいですぅ」

「イッセー…………あなた、まさかソツチの趣味が…………」

「違います！俺はちゃんと女好きですよ」

リアスは悲劇のヒロインのような悲痛な声で言うが、イッセーはそれを激しく否定するが、リアスたちは悲しそうな顔をする。

「あああもう！分かりましたよ!! 今度の休日皆とデートしますよ」

イッセーの言葉に、リアスたちは獲物を捉えた狩人のような顔になり、イッセーはハツとするが、過ぎた時間は戻らない。

「それじゃあ、イッセー今度はキスしてもらうからね♪」

『私も～～（です）♪』

「イッセーくん、君もいい加減学習しないと」

祐斗はイッセーに「愁傷さま」といった顔でツツコむが、イッセーにその声は届かなかつた。

「停止結界の邪眼？」それがギャスパーが持つ神^{セイクリッド・ギア}器の名前なんですか？」

「ええ、説明より見た方が早いわね。ギャスパー」

「は、はい！」

リアスはどこからか取り出したボールをギヤスパーに向かつてゆっくり投げた。だがそのボールはテレビの一時停止をしたかのよう動きを止めた。

「動きが止まつた!？」

初めて見るイッセーは驚くがリアスたちは知っていたのか驚きはしなかつた。

「これがギヤスパーの神器の能力よ。欠点としては実力がかけ離れているものの時間を止めることが出来ないわ」

「なるほど。すごい能力ですね…………ってどうしたんだ？ ギヤスパー？」

ギヤスパーの視線を感じたイッセーは質問するとギヤスパーは子供のようなキラキラとした目で

「イッセー先輩があのウルトラマンオーブなんですね！ 先輩の戦つている姿は凄いかつこよかったですう!!」

「ああ、ありがと…………つて戦つている姿？」

「ああ、それはね」

リアスはギヤスパーの部屋にあつたパソコンを操作しフォルダに保存しているあるものをイッセーに見せた。それは

「これつて、俺がオーブになつて戦つている映像ですか？ いつの間に」
それはオーブになつたイッセーがこれまで戦つたゼットンやマガグランジングとの怪獣との戦闘映像だつた。

「ゴメンねイッセー。政府の上層部があなたのことがどうしても信用してなくてね？ 『上級悪魔のフェニックスが人間に負けるわけない』と融通が聞かなくて止むを得ずライザーの戦い以降これを撮つて見せたのよ」

「なるほど、事情は分かりました。でもなんでギヤスパーにコレを？」

「それはイッセー先輩とギヤーくんが少し似ているからです」

「俺に似ている？」

白音が言つたことに少し引っかかつたイッセーだがギヤスパーは更に目を輝かせる。

「イッセー先輩はあんなにスゴい力を持つていて本当は怖いのにリアス部長のためにその力を使つて怪獣たちと戦つているじゃないですか。僕とは少し似ていますけど僕は臆病者のままです……」

ギヤスパーは話を続ける度に落ち込むがリアスはギヤスパーの頭を軽く撫でる。

「ギヤスパー、そんなことないわ。あなたはイッセーが戦つているのを見て自分から強くなりたいと言つてたじやないの」

リアスはギヤスパーを励ますとギヤスパーは顔を上げて「イッセー先輩！僕もイッセー先輩と戦いたいです!!僕も……僕も修業に加えさせて下さい!!」

ギヤスパーの真剣な顔での頼みにイッセーは断るつもりはなかつた。むしろリアスの頼みなんだから断るのは毛頭ない。

「ギヤスパー、お前の神器は何より視認しなければ意味がない！まづは俺のスピードに追いついてみせろ!!」
「は、はい！」

イッセーはスペシウムゼペリオンに変身しており、ギヤスパーも目を瞑つており白音は旗を持っておりとゼノヴィアはストップウォッチを持っていた。

「始め!!」

ギヤスパーはオーブを見るがそれよりも早く移動しており、オーブは既にその場から消えていた。

「クッ！」

ギヤスパーはなんとか一秒でも目に映すために周囲を見渡すが完全に追いついていなかつた。

「だつたら！」

「むつ！」

ギヤスパーは大量のコウモリになり目の量を増やし周囲を見渡す。

「ハアアア!!!」

「なるほど、一匹だけでも目にしてスピードを少しでも遅くしたら集団で視線を集中させて神器の力を強めるわけか……だが！」

「ワツ!!」

オーブが力を集中させるとギヤスパーの神器の力による拘束は解かれギヤスパーもその反動によりコウモリから元の姿に戻り吹っ飛んだ。

「ハイつと」

「うう、ありがとう白音ちゃん」

白音は地面に激突する前にギヤスパーを出来る限り体に負担を掛けないようにキヤツチして着地する。

「部長と特訓していたんだろうけどやつぱり格上が相手の場合だと少し拘束するのが今の限界なんだな」

オーブからイッセーへ戻り今のギヤスパーの現状をまとめ上げた。

「うう、すいません……」

ギヤスパーはヘタれるがイッセーは

「何暗くなってるんだ？強敵相手の場合だとその一秒が命取りになるんだ。これから強くなつて伸びしていくつて最終的に止めるようになればいい」

「は、はい!!」

「アメとムチの使い方がよく分かつているね）。まさしく先輩や上司の鑑だ」

拍手と共に現れたのは堕天使の総督のアザゼルだつた。白音は仙術を練り、ゼノヴィアはデュランダルを構える。

「待て、この人からは殺氣がないし何より戦うんだつたら俺に何度も不意打ちしているだろ」

イッセーは2人の前に立ち戦意を諫める。

「そうだぜお嬢ちゃんたち。今のお前さんらじや俺の足元に及ばない……ウルトラマンオーブのイッセーを除けばな」

アザゼルはおちやらけてるがその姿に隙はない。

「そこの吸血鬼、確かにイッセーの指導はいいがそれじゃあ成長の速度は大体予想出来ちまう。劇的な強化をするんだつたら赤龍帝の血を使え」

「それならリアス部長から預かってます。時々兵藤先輩の血を飲んで神器を強化してます」

ギヤスパーは小さいガラス瓶を取り出し見せるとアザゼルはフムと頷き。

「なら話は早えや。血を飲んでだんだんと成長しろ。ところで聖魔剣使いはいるか」

「祐斗は部長と冥界にいます。禁手化バランス・ブレイクの聖魔剣について悪魔の上層部と話しています」

「なんだいねえのか、それだつたら俺は去るとするぜ。あ、シトリーの兵士ボーンの神器の力も使つてやれ。あの神器は余分な力を吸い取ることが出来る」

アザゼルが消えると同時にイッセーはギヤスパーに寄つて

「ギヤスパー、いつ兄さんの血を貰つたんだ？」

「えつと、先輩たちがバルパーっていう人と戦つた後です。僕はリアス部長に強くして下さいって頼んだんですけど朱乃さん経由で赤龍帝の血について知りました」

「なるほど、でもよく兄さんが引き受けたね」

イッセーも一正が数々の失敗と挫折を経て大人になつたのだろうと嬉しく思つた。これなら赤龍帝のバランスブレイクもそう遠くないと思つた。

しかしその甘い考えは幻想だとこれから知る

先代オーブ

「集まつたね」

『はい』

サー・ゼクスの言葉を皮切りにリアスたち悪魔は席に座る。イツセーは襲撃に備えいつでも変身する備えをしていた。

「今回の話は他でもない。先日のはぐれ神父バルパー・ガリレイの件についてだ」

サー・ゼクスはこの前のこと話をすると全員は真剣な表情となる。

「ウチの所属の元エクソシストフリード・セルゼンを完封しただけじゃなく幹部であるコカビエルを魔王獣とかいうとんでもねえ化け物で半殺しに仕掛けた」

「……フリードは性格には問題があつたものの、戦闘能力は同い年どころか年上のエクソシストより優れています」

アザゼルの報告に金髪の天使は目を瞑りながら話すが心境からして複雑なのだろう。問題児の能力が優れていたのだから。

「本題に入ろう。イツセーくん」

「はい」

「申し訳ないが今ここでウルトラマンオーブになつてくれないか？」
「分かりました」

サー・ゼクスの真剣な表情にイツセーは疑う余地なくリングを掴み変身する。

ULTRAMAN ORB! SPACIUM ZEPERION
!!>

スペシウムゼペリオンに変身し、勢力の頭領たちは息を呑む。

「確かにこれなら俺でも敵わねえな。ミカエルお前はどう思うよ？」

アザゼルはオーブの潜在パワーを見抜きコメントするが、ミカエルという天使は何故か

「泣くなよ。コイツのおかげで聖書の神は死なかつたんだ」

ミカエルはかけがえのないものを見たかのような表情でオーブを見ていたが、オーブの方はその理由が分からぬ。

「…………申し訳ありません。ですがこれだけは言わせて下さい」

ミカエルはオーブの目の前まで歩いて

『ミカエル様!』

イリナとアーシアとゼノヴィアはミカエルのとった行動に驚く。それもそうだろう天界の筆頭が一介の人間に頭を下げていたのだから。

「おいおい、ミカエル。お前さんは仮とはいえ天界のトップなんだぞ？いくらウルトラマンといつてもそんなことしちゃ……」

アザゼルは忠告するつもりで言つてゐるのだろうがミカエルはオーブの手を取り

「あなたが、あなたが私たちの主を助けていただきました！あなたがいなければ主は完全に死んでいたでしよう！」

ミカエルはオーブに感謝するがオーブはなんのことか分からなかつた。

「ミカエル様。おそらくイッセーくんはオーブであるけどオーブではありますん」

イリナの言葉にミカエルは頭を上げ

「あなたはあの時のオーブではないのですか？」

「あの時とは一体？」

オーブはなんのことか分からなく、変身を解きイッセーに戻る。

「そんな…………ようやく主が目覚めるかも知れないのに……」

「ミカエル、まずはイッセーに三大勢力のことを教える。話はそれからだ」

ミカエルは一人で泣くがアザゼルは話を進めようとする。

「分かりました。オーブさま……いいえ、兵藤一誠くん、あなたに
三大勢力の戦争あの時に起きたことを話します」

ミカエルは呼吸を整えながらイッセーに説明する。

「ハアアアアア!!!」

「テヤアアアア!!!!」

「オラアアアア!!!」

サー・ゼクスとアザゼルとミカエルは戦場のど真ん中で戦っていた。本来敵対するもの同志が力を合わせて戦っているのは“共通の敵”がいるからだ。

三人の前にいるのは常人が見れば一瞬でショック死しかねないほどのおぞましい形をした巨大な獣だつた。

サー・ゼクスは母の血筋のバアル家の固有の力である滅びの魔力を敵に向けて魂と存在ごと消滅させようとしている。

ミカエルは天使の中で最強の光の力を使い限界寸前まで光を凝縮した巨大な極太の槍を幾度も造り放つていて。

アザゼルは天使と同じ力の光の槍をミカエルと劣らないほどの光の槍を休みなく次々と放ち相手を殺そうとしている。

この攻撃は主神クラスでさえ致命傷を負わせるほどの濃密な攻撃だつた。しかしそれらは

「ギュオオオオオオオオ!!!!」

「水みてえに飲みやがつて！さっさとパンクしちまえつてんだ!!」

アザゼルが言つた通り放つた攻撃は獣は水を飲むかのごとく吸収し、怪我など一つも負わなかつた。

だつたら回りこんで胴体や頭頂などの別の急所を攻撃すればいいと第三者は言うだろう。しかし

「ギシャアアアアアア!!!!」

「チツ！化け物のセットなんて勘弁だ！」

アザゼルが舌打ちするがもう一匹の獣は関係ないといった風に慣れただでさえ混沌と化した戦場を複雑と化してゆく。

もう一匹の獣は頭が11あり、その叫び声だけで地上を揺らすほど

の化け物。この化け物は後に【默示録の皇獣トライヘキサ】と呼ばれ二匹の獣たちを光と闇、赤と白、無限と夢幻というように対になるものがあるようにならなく、無限と夢幻の龍二体を打ち負かした。

この二匹は目があつた瞬間に殺し合いを始めその戦いはかの二天龍とは比べ物にならなく、無限と夢幻の龍二体を打ち負かした。

このままでは世界が崩壊してしまうと予測した三大勢力は一時的に協定を結び、二体の化け物を可能であれば消滅あるいは永久の封印を試みた。

この作戦の要となるのは聖書の神の封印術で化け物の一匹を封印し、戦力を少しでも減らす苦肉の策だ。

しかし結果は最悪な形で迎えた。

「…………」

「主よ！どうか目を開けて下さい!!」

絶世の美女と言つても差し支えのない金髪の天使ガブリエルは涙を流しながら治療の魔法を施し、主君の目覚めを願つた。

「クツ！ドラゴン以外にもこんな化け物がいるとはな！」
「キシャアアアアアアアア！」

「グオッ!?」

コカビエルは悪態を突きながらも極太の光の槍を作り投擲するが青い鳥に似た怪獣は翼の一振りで槍をガラス細工のように粉碎し突風によるカマイタチで逆に攻撃を受ける。

「下がれコカビエル！私とシェムハザでコイツをなんとか食い止める！お前は他の援護に行け!!」

「チツ！仕方があるまい精々死ぬなよバラキエル!!」

コカビエルは別の戦場へ赴き、バラキエルという墮天使は光と雷の力を融合した“雷光”的力を使い青い鳥の怪獣を攻撃する。

「ギイイイイ!!」

「神の炎と呼ばれた私の炎でも敵わぬとは、ラファエル！もつと風をよこせ！」

「これでも全開でやっているんだ！無茶言うなウリエル!!」

「私の氷が一瞬で蒸発するほどの炎なんて赤龍帝のドライグくらいだと思つたんだけどね！」

セラフオルーと炎の天使と風を放つ天使は一つの頭に二つの顔の赤い怪獣と戦つており、セラフオルーは氷の魔法を使って怪獣の攻撃を防ぎ風の天使と天使の炎の攻撃を当てるつもりだつたが怪獣が吐く炎はそれを嘲笑うかのように呑み込んだ。

「グオオオオオオ!!!!」

「この攻撃は……ダメだ操作仕切れない!! フアルビウム、他に作戦はないのか!?」

「無理だよアジユカ！ いくら計算してもコイツらに勝てる作戦なんて思いつかない!!」

アジユカと呼ばれた青年は自らの力であるカンカラーフォーミュラ霸軍の方程式でマガグランドキングのレーザーを跳ね返そうとするが余りにも力が強いのか上空へ曲げるのが精一杯だつた。

サーゼクスと同じ超越者と呼ばれた自分の力が通じないのを悔しがりながらもアジユカは諦めなかつた。

「僕らはもう……」

「クソッ！ここまでなのかよ俺たちは!?」

「主よ、申し訳ありません……」

三大勢力の筆頭たちは魔力も光力も尽き、最早どちらが敗北するか

は目に見えていた。

「ギュオオオオオオオオ!!!!」

獣は口にエネルギーを溜め終え、ソレをサー・ゼクスたち三大勢力に放とうとしていた。サー・ゼクスたちにソレを防ぐ術はもうない。

「キシャアアアア!!!」

「ギイイイイイイ!!!」

「グオオオオオオ!!!!」

仲間たちは他の怪獣を抑えるのに力尽き地に伏していた。生きるか死ぬかのギリギリの命を残して

「グレイフィア……愛しているよ」

サー・ゼクスたちは目を閉じ悪魔からしてみればあまりにも短い最期を迎えた

「諦めるな!!!」

「ギュオオオオオオオオ!!!!」

その声が鳴り響くと同時に太陽より眩ゆい光の球体が獣の攻撃を搔き消しながら獣に傷を与える。

明かされた過去

「え？」

光はミカエルと聖書の神の元へ移動し光から茶色い帽子と茶色いコートを身に付けた男が現れた。

「あ、あなたは？」

「話は後だ」

突然現れた男に驚愕を隠せないミカエルを他所に聖書の神を光の球体で包み込む。

「な、何を!？」

「落ち着けあのままだつたら、ソイツは助からなかつた。死なせたくないならお前はソイツの看護をしていろ」

男は乱暴な口調でミカエルを説得し、怪獣の方へ走つた。

「まさかまたお前らの相手をするとはなつくづく俺の旅は波瀾万丈なわけだ」

「あ、あなたは一体……」

サー・ゼクスは這いつくばりながらも男を見るが、男のほうは一瞥した後すぐにトライヘキサと獣の方を見る。

「お前らはココから離れる。巻き添えを喰らいたくなればな」

男はコートのところからイッセーと同じオーブリングを取り出し、ホルダーからあるカードを取り出す。

「ウルトラマンさん！」

「ULTRAMAN!」

「ティガさん！」

ULTRAMAN TIGA!』

「チャアッ！－

「光の力、お借りします！」

男がイツセーと同じようにオーブリングを掲げると二体の巨人も同じ動きをし、持ち手のトリガーを押した。

〈FUSION UP!〉

－シユアツ！－－チャアツ！－

〈ULTRAMAN ORB! SPACEIUM ZEPERION !!〉

男がウルトラマンオーブ・スペシウムゼペリオンに変身し凄まじい速度で青い鳥の怪獣へ飛行し対峙した。

「ハアッ！」

「キシャアアアアア！」

赤いラインを光らせて凄まじい剛力で怪獣を地へ墜とした。

「グオオオオオ!!!!」

「フンッ！」

マガグランドキングの不意打ちのアーム攻撃を避けて、額のクリスタルとカラー・タイマーを光らせる。

「タロウさん！」

〈ULTRAMAN TARO!〉

－タアア！－

「メビウスさん！」

〈ULTRAMAN MEBIUS!〉

－シヤッ！－

「熱いやつ、頼みます!!」

〈ULTRAMAN ORB! BURNITE!!〉

「セヤッ!!」

「ギュオオオオオオオオ!!!!」

スペシウムゼペリオンからバーンマイトにえたオーブは、炎を両

拳に宿し、イツセー以上の威力を持つたラッシュを叩き込んでマガグランドキングを叩き伏せた。

「オオオオオオ!!!!」

オーブはセラフオルーとウリエルとラファエルを倒した赤い怪獣へ走り、更に姿を変える。

「ジャックさん！」

♪ULTRAMAN JACK!♪

「シユアツ!!」

♪ULTRAMAN ZERO!♪

「デエエエヤツ!!」

「キレの良いヤツ、頼みます!!」

♪FUSION UP!♪

「シユアツ!!」

♪ULTRAMAN ORB! HURRICANE SLASH!!♪

「ハッ!!」

バーンマイトからハリケーンスラッシュへ変えたオーブは、風を切り裂く蹴りで赤い怪獣を切り裂き、他の怪獣を瞬間移動で翻弄しながら攻撃した。

「トドメだ!!」

二本のスラッシュを回しオーブスラッシュガーランスを出現させ、レバーを三回倒しランスにエネルギーを走らせる。

「トライデントスラッシュ!!」

オーブはランスで目に見えない速度で怪獣たちを斬り刻み、トライヘキサと獣に向けて走り出す。

「グオオオオオオオオ!!!!」

「ギュオオオオオオオオ!!!!」

トライヘキサと獣は、大陸を壊せるほどの巨大なブレスをオーブに放つがそれでも避けずに突き進み攻撃に飲み込まれた。

「い、いやあああああ!!!!」

ガブリエルは最後の希望が消えてしまつたと感じ、この世の終わり

と思わせるほどの慄きを戦場に響かせた。サーゼクスたちも見ていられないのか斬首の刑を待つ囚人のように目を閉じた。

♪♪♪♪

「え？」

戦場に似合わないハーモニカのようなメロディーが響き渡ると、ガブリエルの心の中が絶望から希望へと変わった。

「タアツ！」

トライヘキサと獣のブレスを中から斬り裂く、光輝く巨人が現れた。ガブリエルは疲労から視界がぼやけているのかオーブの姿が鮮明に映らなかつた。

「オオオオオオオオオ!!」

オーブが剣を体ごと回すと剣の軌跡から光が放たれ完全な円を作ると光は剣に集まり大地が震える。

「テヤアアアアアアアアア!!!」

オーブが剣を振ると光の閃光が獣とトライヘキサを飲み込んだ。攻撃が終わると明らかに弱つてた。

「こんなで死ぬほどお前が甘くないのは分かつていて。だつたら封印するまで」

オーブは両手を空に掲げると光が集まり

「シユアツ！」

獣は光に包まれ時間が経つと巨大な赤いクリスタルとなつた。

「さて、次はお前だ」

「ギ……」

トライヘキサの目には明らかに恐怖が宿っていた。オーブは容赦なく斃そうとするが

「ハツ！」

「ギイツ!?」

聖書の神はトライヘキサに幾重もの魔法陣を開け、封印の魔術を

施す。

「主よ！これ以上はあなたの身が！」

ミカエルたち天使の抑止に聖書の神は聞く事はなく、その命と引き

換えにトライヘキサを封印しようとした。

「ギイイイイイイイイイイ!!」

トライヘキサは断末魔を上げ、その身を封じられた。

これで良い。私もこれで終わりに「終わりになんてさせない」え？
聖書の神は自分の死を実感しながら目を閉じるが、頭の中で声が響いた。

目を向けるとオーブは自分の胸を掴んでいた。

「な、何を？」

ミカエルの戸惑いに答えず、オーブは掌に光を集め聖書の神にへと放つた。

「あ、主!？」

光は聖書の神に溶け込むように吸収され、聖書の神は呼吸をする。
『ピコン、ピコン、ピコン』

オーブのカラータイマーは青から赤に変わり点滅すると同時に、光と化して聖書の神の元へ向かい、人間の姿になる。

「無理に抜け出しやがって、あのまま待つていればいいものの」

「あ、あの……」

男は呆れながら聖書の神を見るが、ミカエルたちは男を呼び止め
「おいおい、何のつもりだ？」

有無を言わずに土下座した。男はミカエルたちの取つた行動に驚きつつも冷静さを崩さない。

「どうか、主を！ 主を救つて下さい！ 私の命なら喜んで差し上げます
！ 奴隸にしても構いません！ どうか主を……」

ミカエルは必死に男を説得しようとすると、男はソレを止めた。いや、止められたと言うべきだろう。

「俺はもう誰も犠牲にさせない。だからもういい」

「あ………」

男はミカエルの頭を子供のように撫で泣くのを止めた。

「んんっ！」

男は胸に手を当て、光の玉を生み出すと聖書の神に近づく。

「アンタにはコレを預けておく」

「これって………」

男が聖書の神の胸元に置いたのは、銃のマガジンに似た形のハーモニカだつた。ソレを中心に神は光の膜に覆われ呼吸を穏やかにする。「さてと、悪いんだが一つ頼みを聞いてくれ」

「は、はい」

「俺はこれから消えてしまう。だけど何百年か後に俺と同じ力を持つ奴が現れる。ソイツなら聖書の神を救うことができる」

「そこまで待つと思うか？」

「何？」

コカビエルは殺氣立ちながら聖書の神を見て光の槍を創り出した。

「クッ！」

ミカエルたち天使は、聖書の神の命を維持するため力を使い果たし、コカビエルの攻撃を防ぐ術はなかつた。

「いいかげんにしやがれ！」

「グハッ!?」

男がコカビエルを殴ると、光の槍は消滅し攻撃は止まつたがコカビエルは男を睨み付けた。

「ふざけるな！そいつを殺せば俺たちが最強の種族だと証明できる！」

コカビエル以外にも、他の墮天使やサーベクスたち悪魔陣営も聖書の神を殺そうとしていた。

「君には感謝している。だが、それとこれとは話が別だ。これは僕たちが解決しなければならない。憎しみの連鎖を断つにはこれしか方法がないんだ」

悪魔を代表してサーベクスがそう男に告げるが、男はため息をしながら

「フンッ！」

「痛い!?」

男はなんと、サーベクスに親が子供にするかのようなゲンコツをした。

「な、何をするんだ!?」

「その言葉さつきのお前にそのまま返すぜ」

男は当然といった風に答えを言う。

「この戦争に憎しみの心があるなら、争いを憎んでいる心だつてあるだろうが!!」

男の怒りに三大勢力は押し黙る。

「そうやつて誰かが憎みあつてるから、戦争が始まつていつまでたつても終わらない！お前らだつて本当は理解しているはずだろ!! 戦争は憎しみや悲しみしか産むことが出来ない!!」

男の言葉はサーベクスたちを納得させる力があつた。その光景を見てきたかのように男は言つたのだ。

「お前らは本当は手を取り合うことができる。だから協力することができた」

男は怒りから笑みに変わり背中を向ける。

『やさしさを失わないでくれ。弱いものをいたわり、互いに助け合ひ、どこの国の人たちとも友だちになろうとする気持ちを失わないでくれ。たとえ、その気持ちが何百回裏切られようと』……コレはある男の願いだ。男とその仲間たちはどれだけ嫌われても、弱き者たちを護り続けてきた

男は話し続けると姿が透けてゆく。

「ま、待つて下さい!!」

サーベクスは呼び止めるが男は振り向き、笑うと同時に完全に消え去つた。

「あの、待つて下さい」

「はい」

イツセーはどうしても知りたいことがあった。ミカエルたち天界のトップの状態は分かつた。しかし「ゼノヴィア、お前はなんで悪魔に転生したんだ？別にエクソシストのままでもよかつたんじゃないのか？」

イツセーの質問にゼノヴィアは

「君に惚れたからだ」

さも自然なように答えた。

「え？」

突然の告白にイツセーは戸惑うがゼノヴィアは畳み掛けるように「私は最初意気地なしだと思っていた。だけど君は誰かの為に戦い、誰かの為に怒る。私はそんなところに惹かれた」

「な……な……」

ゼノヴィアの恥じらいのない言葉に顔を赤くするがリアスたちの黒いオーラに圧された。

「サー・ゼクスさんたちは二代目の魔王なんですよね？初代の魔王たちは一体どうなったのですか？」

「その話はしないでくれるか？」

話題を変えようとしたがなぜか不機嫌な顔のヴァーリがイツセーを止めた。が、イツセーは納得出来ない。

「…………分かつた。いずれ話さなければいけないんだ」

サー・ゼクスは目を閉じながら怒りを堪えた顔になる。

「先代の魔王たちは…………ある理由があつて亡くなつた」「亡くなつた？」

「イツセーくん、力は望みすぎるといずれ自らを滅ぼすと分かつてくれ

「…………はい」

サー・ゼクスの内心を察したのかそれ以上追求しなかった。

「…………すみません、話を持ちかけてなんですけど少し失礼します」

「イッセーくん？」

「おい、なんか暑くねえか?!」

アザゼルは部屋の温度の異常さに気付き、イッセーはオーブリングを構えた。

「お待ち下さい、ウルトラマンオーブ」

静寂な部屋に鳴り響いたのは女の声だった。部屋の中央に魔法陣が出現する。

「これは旧レヴィアタンの…………まさか！」

サー・ゼクスはその正体を知っているらしく、魔法陣からドレスを着た褐色の美女が現れた。

「旧レヴィアタンの血を受け継ぐ者…………カテレア・レヴィアタン!!」「ご機嫌よう。偽りの魔王たち」

カテレアはサー・ゼクスたちトップに向けて魔力弾を放つが、サー・ゼクスたちは結界を張り攻撃を防いだ。

「ふふ、トップたちがこんなザマとは情けないわね」

虫ケラのように笑うカテレアだが視線はイッセーを外さなかつた。

「カテレアちゃん、なんでこんなことを！」

「そうねえ、今回の目的はあなたたちの抹殺と…………」

セラフオルーはカテレアに訴えかけるが、当のカテレアはどこ吹く風。説明しながらイッセーに近づいた。

「あなたをスカウトに来ました。ウルトラマンオーブ」

イッセーに手を差し伸べながらそう言つた。

「何？」

「あなたは三大勢力が総力をかけても倒せなかつた【二対の獣】を封印しました。あなたの力があれば、この世界をより素晴らしい世界にすることができるでしよう」

「ふざけるな！アンタの顔からは支配しか感じねえよ!!」

カテレアはイッセーを煽るつもりか世界や平和などといった言葉

を強調するが、イッセーはその手を払いのけた。

「おやおや、手厳しいですね」

カテレアはそれでも口調を崩さず、今度はヴァーリの方を向いた。

「あなたも来ませんか？あなたの血だつて世界の改革を望んでいるはずですよ」

「黙れ！俺は奴がトップの組織なんて入りたくもない!!」

ヴァーリは激昂するが、カテレアは冷めた目で見下している。

「案外子供なんですね。イジメられただけで未だ反抗期ですか？ねえ……」

明けの明星の曾孫ヴァーリ・ルシファーー？」

カテレアが言つた名前にイッセーは言葉を失いかけるが、言葉の途中かける気になつたカテレアは察したのか説明する。

「その子の祖父は、私たちの組織のトップをやつています。幼少期に戯れとしてその子を虐待したんですよ」

「黙れと言つている！」

ヴァーリは憎悪の目で睨むがカテレアは気にしていない。

「ちなみにその子の祖父は偽りの魔王のサーゼクスとアジュカと同じく超越者で神 器使いのヴァーリにとつては天敵のようなもの」

「黙れ！俺は奴の……リゼヴィム・リヴァン・ルシファーの首を諦めたわけではない!!」

ヴァーリの怒りは燃え続けているが、カテレアはそれでも言葉を続ける。

「やれやれ神 器無効化の彼にどうやって勝つつもりなんだか」

「なるほど、そこまで死にたいのならすぐに殺してやる!!」

『Vanishing Dragon Balance Breaker!!』

ヴァーリは禁バランス・ブレイク手化しカテレアを襲うがカテレアの方は余裕だつた。

「やりなさい」

「何……グオツ!」

突然の不意打ちに反応ができなかつたヴァーリは、派手に外へ吹つ飛ばされ、その根源に全員が目を疑つた。

「兄さん……これは一体、どういうことだ?」

そこには赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手を展開した一正がいたのだ。

愚者の裏切り

イッセーは眞面目に質問しているが一正はただヘラヘラ笑つているだけだった。その瞳は信念やプライドなど一つも宿つていなかつた。

「ハハッ、こいつらから素晴らしいスカウトが来てな。『赤龍帝のあなたは世界を支配するに相応しい』つてな。ようやく俺を見る目がある奴らが現れたぜ」

一正は高笑いしながらカテレアに近づきながらほざく。

「兄さん、アンタは奴らに唆されてるだけだ。ソイツらは外道の悪魔らしく利用するだけ利用して最後は殺して捨てるだけだ!!」

「おいおい、勘違いするなよイッセー！」

一正是赤龍帝の籠手^{ブーステッド・ギア}を消して懷から

「なんだと………」

「まさかお前が持つていたとはな」

イッセーは驚くがヴァーリはどこか納得していた。

「奴らが俺を利用するんじゃない。俺が奴らを利用するんだよ!!」

バルパー・ガリレイがマガグランドキングを召喚するのに使用し、消滅したはずのダークリングを一正が持つていた。

『MAGA-PANDON!!』

赤い怪獣が記されたカードをリングに通すと突然さつきまで暑かつた室内の温度がさらに上昇した。

「な、なんだアレは!?」

アザゼルが見えたのは外に巨大な炎が浮いていたからだ。おそらくアレが一正が呼び出した怪獣なのだろう。

「まずい！あれでは外の護衛が!!」

サーゼクスが動搖している間に巨大な火の玉からゼットンと同等の火球が護衛の悪魔、天使、堕天使に放たれた。

「ブリズド！ティア！」

「グアアアアア!!!」

「任せろ！」

着弾する前にイッセーはカプセル怪獣のブリズドとティアマツトを召喚し、氷のブレスを吐き炎の力を弱めるとティアのブレスで相殺させた。

「おいおい、せっかく記念に派手な花火をあげようとしたのによ」

一正は悪そびれもなくむしろ邪魔されたかのようにガツカリしていた。その様子がイッセーの怒りを増長させた。

「ふざけるな！命をなんだと思つてるんだ!?」

イッセーは真剣そのものだが一正は罪悪感のない顔で

「お前は漫画やアニメやゲームのキャラが死んだら一々悲しむのか？ アイツらみてーなモブキャラがいくら死んでもどうつてことねえよ」 非情なセリフはイッセーの地雷を踏み抜いた。

「兄さん……イヤ、一正あ！お前をもう兄だと思わないと！」

イッセーの怒りに一正はヘラヘラ笑うだけだがその目には憎悪が宿つていた。

「いいぜ。俺も元々お前を弟なんて思つてねーんだからな」

一正はダークリングを操作して火の球を放出し続けるがイッセーはそれをさせる気はさらさらなかつた。

「ウルトラマンさん！」

ULTRAMAN TIGA!<

一へヤアツ！－

「ティガさん！」

ULTRAMAN TIGA!<

一チヤツ！－

「光の力、お借りします！」

^FUSION UP!<

一シユアツ！－一チヤアツ！－

^ULTRAMAN ORB! SPACIUM ZEPERION !!<

イッセーは通常の変身よりも早くカードを翳しトリガーを押すとその身を変え、戦場へ向かう。

「おいカテレア、早くギャスパーの力を暴走させろよ」

一正がオーブがいなくなつたのを確認するとカテレアに原作知識の作戦の要であるギヤスパーの神^{セイクリッド・ギア} 器の力の暴走を催促したが予想外の答えが返ってきた。

「残念ながらあのハーフ吸血鬼はコカビエルとバラキエルとその娘に護衛されてて、はぐれ魔法使いたちは失敗したそうです」

思わぬ計算外に舌打ちする一正だがすぐに歪んだ笑みを浮かべる。「まあいいさ、こつちも予定のものよりはるかに良いモンを貰つたからな」

一正の言葉に懐に入っているカードが黒く光る。

「闇を照らして悪を撃つ!!」

イッセーはスペリオン光輪を火の玉に放つが直撃する前に攻撃の雨に破壊され攻撃が当たらない。

「イッセー！いくらお前でもこの火の雨は防ぎきれないぞ!!」

ティアはイッセーを心配しているがオーブは怒りに支配されていた。

「だつたら炎には炎だ!!」

ULTRAMAN ORB! BURNMITE!!

スペシウムゼペリオンからバーンマイトに変えたオーブは火のエネルギーを使い火の玉に狙いを定める。

「ストビュームバーストオ!!」

オーブは巨大な炎を火の玉に向けて放つ。途中で火の球が攻撃に当たるがイッセーの怒りが加速するかの如くそれらを呑み込みながら突き進む。

「ギイイイイ!!!

火の玉から変化したのは一つの頭に二つの顔を持つ怪獣だった。

その吐く炎は全てを灰塵にし、纏う炎は全ての攻撃を寄せ付けない熱を放つ【火の魔王獣】マガバンドンが愚者に操られる。

「ギイイイイ!!」

マガバンドンは闇雲に炎を吐くがオープは直撃しても幽鬼の如く突き進み炎の両拳を噴出口に捻じ込んだ。

「俺の怒りはテメエの炎^{それ}以上だ!!」

オープは拳を爆発させるとマガバンドンの口は崩壊しており炎を吐くどころか、呼吸すら難しい状態だった。

「イッセー……一体どうしたというんだ?」

ティアマットの心配はイッセーの怒りにかき消されその思いは届かなかつた。

「ギ…………ア…………」

「トドメだ!」

オープは全身に炎を纏い宇宙恐竜ゼットンを葬った技を放つ。

「ストビュームダイナマイトオ!!」

オープの技にマガバンドンは断末魔を上げることなく消し炭と化し消え去つた。

「ハア、ハア、ハア……」

オープは変身を解いてイッセーに戻ると体力を消耗したのか肩で息をしていたがリアスたちと合流しようとしたが足を止めた。

「なんだ誰も死んでねえのか、つまんねえの」

いつの間にか現れたイッセーの憤怒の元凶である一正は子供のような感じで戦場と化した校庭を見ながら呟くがそれは更にイッセーの怒りを燃やすだけだつた。

「あ～あ、カテレアもアザゼルとヴァーリに殺されちまうし、パンドンもヤラレちまつたし今日はこれまでにしておくか」

呑気に言う一正にイッセーは再度変身して戦おうとするがリアスたちが心配なので深追いできなかつた。

「おいクズ弟。必ずテメエを殺してリアスたちをお前の目の前で奪つてやる。それまで覚悟しておけ」

一正は魔法陣を展開してこの場を去るとイッセーは地面を殴る。手の皮が裂けても憂さ晴らしをやめなかつた。

「イッセー……アイツはもうお前の兄ではない。自分の家族をクズ呼ばわりする奴は家族の資格なんてない」

ティアマットは人間の姿になつて励ますが怒りと悲しみに満ちたイッセーに届くことはなかつた。

「イッセー……一正のことは気の毒だけどあの子はもう立派な反逆者よ」

イッセーが予想した通り一正はサーゼクスたち魔王の判断によつてはぐれ悪魔と認定され、ランクはSSSだった。一正が持つているロングギヌス神滅具の赤龍帝の籠手とダークリングの所持によるものだろう。

「あ、あのイッセー先輩……」

ギヤスパーが近づきイッセーはなんだと思ったが次の言葉に凍りついた。

「一正にイッセー先輩が使うウルトラマンさんのカードを奪われちゃいました。でもあんな怖いウルトラマンさんはイッセー先輩に使つ

て欲しくないです……」

そのウルトラマンは異質だつた。

その事実は後に自ら思い知ることとなる

力を求めた挙句憎しみに任せたまま壊すことしかできない化け物
となるということを

冥界合宿のヘルキャット

黄昏と協力者

「次は私だな……」

白い空間で男の独り言が響いた。

その空間はイッセーがウルトラマンたちと出会う場所だった。一つだけ違うのは

「イッセーくんと会うわけにはいかない」

ウルトラマンの人間態である男はイッセーと会わずに可能であればこのまま会合せずに3つの姿で戦うのを望んでいた。

「幸い奴は転生者によつて奪われた。あとは私がイッセーくんに会わなければそれで良いのだが」

男は願望を吐くがイッセーはいずれ自分と奴の力を使わざるを得ないことになると自分がよく分かつていた。

「オープはウルトラマンになつて日は浅いがあの子はまだ若すぎる」
イッセーの心が崩壊してしまわないかそれだけが男の気がかりだつた。

時は変わり冥界行きの列車でイッセーとアザゼルとヴァーリは冥界へ着くのを待つていた。

本来だつたらイッセーはリアスたちと一緒に行くはずだつたのだがはぐれ悪魔となつた一正の弟と言うだけで同行できなかつた。
「まだ引きずつてんのか？」

アザゼルはイッセーに質問するが帰つてくるのは沈黙だけだつた。
しかしそれ自体が質問の返答なのだろう。

「兵藤一誠、奴は脅迫ではなく自分自身の意思で禍の団カオス・ブリケードへ入つたんだ。だから君が気にすることは無い」

ヴァーリはイッセーを不器用なりに慰めているがその心は晴れる事はなかつた。

「おそらくこれからカオス・ブリケードの対策の会議が始まる。魔王獸の力を持つた奴らに対抗できるのはウルトラマンオーブの力を持つたお前さんだけだ」

アザゼルはこれからのことと説明するがイッセーは煮え切ることはできなかつた。

「そろそろ着くぞ。俺たちがいるとは言え油断するな」

ヴァーリは警告するがイッセーの方は殺氣立つており一部の隙もなく、たとえ敵が強襲してきてもすぐに迎撃できるだろう。正直ヴァーリとアザゼルは怒りの火の粉が自分たちに舞い降りてこないか少し怯えていた。

「ようこそ、イッセーさま」

「君は……」

駅に着いたイッセーの目に映つたのは

「ライザーの妹さん？」

「はい、ライザー・フェニックスの妹のレイヴェル・フェニックスです」

兄と比べ本当の貴族の雰囲気を纏つた彼女は何故か頭を下げた。

「レ、レイヴェル!？」

イッセーは驚きながらも頭を上げさせようとするとレイヴェルは頑なに上げようとしなかつた。

「本当に申し訳ありません! フェニックス家を代表して私が兄の愚行を詫びます! どうかお許しを……」

イッセーはレイヴェルの頭を撫でた。それには侮蔑を込めておらず相手を安心させるための優しさを込めたものだ。

「レイヴェル、とりあえず俺たちを案内してくれないか?」「はい!」

イッセーの笑顔に安心したのかレイヴェルの顔から無駄な力が抜かれ自然体となり、イッセーたちを案内する。

「イッセーさま、どうかご武運を……」

「ありがとうございますレイヴエル。それじゃあ行つて来る」

イッセーはリアスたちが待つて いる部屋の前に立つとレイヴエルはイッセーの手を取り無事で戻つて来れるよう願つた。

「失礼します」

イッセーの目に映つたのはリアスたちオカルト研究部とソーナたち生徒会とリアスたちと同じ階級であろう上級悪魔たちだつた。

「かけたまえ兵藤一誠殿」

「失礼します」

年老いた悪魔の言葉と共にイッセーは椅子に座り姿勢を正す。
「それではウルトラマンオーブの変身者である兵藤一誠が現れたのを皮切りに議題を進めたいと思う」

「コイツは殺すか眷属にすればいいだろ」

中央の人物の言葉と共にリアスたちも気を引き締めた。だがその空気を壊すかのように場違いの言葉が響いた。

その言葉を吐いたのはいかにもライザーと同等かそれ以上の素行の悪さが目立つ派手な姿の男だつた。

「どういうつもりだゼファードル・グラシヤラボラス」

「簡単な話だ。聞けばそいつの兄は禍の団に入つてはぐれ悪魔になつたんだろう? しかも魔王さまたちに危害を加えたそうじやねーか。だつたら兄の責任は弟が取るべきなんじやねーの?」

ケタケタと笑いながらゼファードルという男は愚言を吐くが頭の方もライザーと同等なのかその場の空気を読む事はなかつた。

「さあどうする兵藤一誠？男を眷属に入れるのはごめんだがお情けで俺の下僕にしてやつてもいいんだぜ？」

「いい加減にするんだな」

つくづく愚かなゼファードルの言葉に耳を傾けるイツセーではな
いが耐えられなかつたのか別の悪魔の声が響いた。

ゼファードルの濁つた声とは違う凜とした男らしい声だつた。声
の主は獅子を彷彿させるかのような霸氣を纏い巖のごとく佇む男が
ゼファードルを睨む。

「なんだよサイオラーグ。今は俺がコイツを救おうとしてやつてんだ
……バアル家の無能はすつこんでろ」

「それまでにするんだな。これ以上の愚行は魔王を輩出したグラシャ
ラボラスの恥塗りになるだけだ。だからさっさと座れ」

ゼファードルの言葉に歯牙にもかけないサイオラーグは警告を放
つが愚か者は自分が負けると思つてないのか

「もう一度言うぜすつこんでろバアル家のむ……」

それ以上の言葉を吐けなかつた。何故なら

「やれやれ早速か」

老悪魔は呆れるがどこか分かつていたかのような態度だつた。お
そらく殴り飛ばされ気絶したゼファードルがこうなることをあらか
じめ予測していたのだろう。

「さて、むしろ都合が良くなつたな。ゼファードルの眷属達よ、悪いが
主を医務室へ連れて行つてくれ」

ゼファードルの眷属たちはサイオラーグを睨みながらも主を部屋
の外へ連れて行つた。

「あの馬鹿者はさておき、兵藤一誠よ。貴殿は良くも悪くも三大勢力
の戦争を止めたウルトラマンオーブの力を持つ者。したがつて貴殿
が悪魔になつてしまつたら結んだばかりの協定は一気に崩壊してし
まう」

年老いた悪魔が言うにはウルトラマンオーブは三大勢力の英雄ら
しく独占しようなら一方的に立場が悪くなりその勢力は確実に孤立
してしまうらしい。最悪の場合その勢力は狙い撃ちにされ滅びてし

まう可能性がある。

「そこで兵藤一誠殿。貴殿には中立の勢力に入つてほしい」「中立?」

老悪魔の言葉にイッセーは頭を傾げるがリアスが説明する。

「イッセー、あなたにはカオス・ブリケードと一正が操る魔王獣と戦つてもらいたいの。もちろん力不足だけどどちらからも協力者を逐一出す」

リアスの言葉に納得したイッセーだが肝心の協力者が誰なのかが分からぬ。

「その協力者と言うのは『悪魔側は俺だ』」

そう言つたのはヴァーリだつた。続けざまに朱乃と1人の男性が部屋に入る。

「堕天使側は私姫島朱乃がチームに入ります」

「天使側は私八重垣正臣がウルトラマンオーブ殿と彼らと戦います」

パーティーへようこそ

会議が終わった後イッセーは協力者の内の一人である八重垣と共に冥界を周つていた。

「しかし、八重垣さん。人間のあなたが冥界に来ても大丈夫なんですか？確かに普通の人間には耐えられないはずじゃあ」

「心配は要らないよイッセーくん。ミカエルさまから加護を受けているから呼吸をしても何の問題もない」

証明すると言わんばかりに深呼吸をする八重垣に苦笑いをするイッセーだが未だに心配していた。

「私のことが心配かい？」

イッセーの内心を察したのか八重垣は訊くが黙るしかなかつた。

「心配はいらない。私も覚悟を決めてここに来て いるんだしそもそも妻を一人にするのは二度とゴメンだ」

「それを聞いたらなおさらあなたを死なせはしません」

イッセーは真剣な表情で答えると八重垣も先ほどとは別人になり、寧ろこれこそが本当の顔だと語らせた。

「フツ、私も護られてばかりではない。いざというなつたら首だけになつても敵の喉を噛みちぎるさ」

八重垣の覚悟を感じ取つたイッセーはこれ以上語ることはなかつた。語るとしたら戦場の中だろう。

「お前が兵藤一誠か？」

「そうですけど、あなたはどうちら様で？」

後ろから呼び止められたイッセーは振り向くとそこには小さいドラゴンがいた。しかしイッセーは緊張を解かなかつた。

敵意がないとはいゝ、ティアマットと同じくらいのドラゴン相手に腑抜けているほど気を抜いていなかつた。

「なるほど、冥界の到着から見て いたが一分も油断していないな」

「小さいドラゴンはニビルに笑いながら

「俺は魔ブレイズ・ミーティア・ドラゴン聖龍のタンニーンというものだ。かつてお前の使い魔のティアマットと同じ龍王だった」

タンニーンの自己紹介にイッセーは納得する。おそらく本来の姿はドラゴン化したティアマットと同じくらいのサイズと予測する。

「別にどつて食おうというわけじゃない。力を抜くがいい」

タンニーンはフツと笑いながら言うとイッセーは余分な力を抜いた。

「何故あなたのようなお方がわざわざ？あなたもイッセーくんに危害を加えるつもりでしようか？」

冥界に来てからイッセーは英雄のような目で見られたりもしたが兄の一正がはぐれ悪魔となつたので一部の悪魔からは襲撃もありした。当然イッセーと八重垣は死なない程度にアホな悪魔たちをシメたが

「手厳しいな、まあいい。これから魔王城まで行くが送つて行くか？」
「イッセーくんどうする「それじゃあお言葉に甘えて」え？」

八重垣はイッセーに尋ねるが気にせずにタンニーンに近づいた。
「さあお前さんはどうする？」

「……乗らせて貰おう」

タンニーンはニヤニヤ笑い、八重垣はバツが悪そうにタンニーンに近づく。

「スゲー！まさかドラゴンに乗るなんて思いもしなかつた！」
「ハハハ！俺もウルトラマンを乗せるとは思わなかつたぞ！もしかしたら後々に伝説になるかもな！」

イッセーははしゃぐと元のサイズになつたタンニーンは大笑いする。

「八重垣さん、早くしないとパーティーが始まりますよ」

「……ああ、今行くよ」

八重垣は子供のようにはしゃぐイッセーに嘆息しながらも着いて行く。

「（）が悪魔のパーティーか、なんかヤバい儀式をやりながらやるかと思ったけど普通のパーティーなんすね」

「確かに賑やかなものだ……つと、イッセーくん、僕は適当に楽しむから君は若い者同士で楽しんでおいで」

若干ニヤニヤした顔で八重垣はイッセーと眼に映つたのは離れる。イッセーはなんのことか分からぬが理解するまで時間はかかるなかつた。

『イッセー（くん）（さん）（先輩）』

「あ、みんな……」

イッセーが言葉を失うのは無理がなかつた。絢爛なシャンデリアや食欲を唆らせる食事でさえ飾りにすぎない。そう思わせるほどの魅力、いや、魔力を身に付けたりアスたちがいた。

アーシアは罪と闇を照らすお日様を表したような黄色いドレスを纏っていた。その金髪とドレスはどんな罪人であろうと笑顔で許すアーシアを映していた。

ゼノヴィアはアーシアと対極に悪を裁き、悪を清める水のような青い髪を映えさせるような青いドレスを着ていた。

白音は和ませ癒す子猫のような見た目を強調させ、アーシアと同じ可憐さを現す白いドレスを着ていた。

黒歌は白音とは異なり、男を弄ぶ小悪魔な猫を彷彿させるような黒いドレスを着ていた。戦闘時の和服とは真逆のドレスは妖しい美貌を引き立てていた。

リアスは鮮やかな紅髪を際立たせるような真紅のドレスを纏つていた。鹿のような長い脚と蜂のようにくびれた腰、そして全ての男女を魅了してしまうほどの豊かな胸が老若男女を魅了した。

「綺麗だ……」

イッセーはあまりの美しさに見惚れ声を失つたが

「イッセー」

「は、はい」

リアスがイッセーを正気に目覚めさせるが如く呼び止めイッセーの顔に手を添える。

「みんなはイッセーの感想が聞きたいらしきけど、どうかしら？」

リアスは挑発的な笑みを浮かべながら胸を強調してイッセーを誘惑する。

「ええっとそれはですね……」

イッセーは顔を赤らめながら視線を逸らそうとするが

「にやん♪」

「むぶ!」

黒歌はイッセーの顔に両手を添えて振り向かせてリアスと朱乃と遜色ない豊かな胸に埋もれさせた。

「そんなに恥ずかしいなら私のおっぱいだけ見てればいいにやん♪ムラムラが收まらなかつたならあとでしつぽり『させない（わ）（です）よ』チツ……」

黒歌はそのままイッセーを誘惑しようとするとリアスたちに阻止され舌打ちした。

「今のうちに…………くわばらくわばら」

リアスたちが言い争っている隙にイッセーは気づかれないようにひつそりと抜けていった。

「ふくふく……せつかくのパーティだつてのにこれじや気が休まらないな

いな」

「贅沢な悩みじやな」

イッセーは一人で黄昏れていると後ろから誰かに声をかけられ、振

り返るとホームレスに似た格好をした長い髪の老人がいた。

「貴方は？」

「ふむ、通りすがりのただの老いぼれじゃよ」

老人は長いヒゲを指で弄りながらそう答えるとイッセーを見ながらフムと言うと。

「お主はこのパーティーを楽しんでいないと見た」

「いえ、そう言うわけでは……」

イッセーは否定しようとするが老人の次の一言で口を噤んだ。

「自分には女を惚れる資格はないと思つてているのか？」

「…………」

イッセーは答えない。しかしその沈黙が答えそのものだった。

「ふむ、宗教は違うが迷える子羊に一言。強さだけがお主の全てだと思うな」

「つ！」

言葉に反応するイッセーに老人は笑みを浮かべる。

「光があれば闇があるように、太陽があるように、人には強さがあれば弱さもある」

「…………まあそうですね」

イッセーは老人の言葉にこれまでのことを思い浮かべていた。
「あのおなごたちも誰もお主の強さだけを見ているわけではない。お主の弱さもちゃんと分かつておる」

イッセーは答えない。しかし答えはもう出てた。

「それではおなごたちと仲良くのう」

老人は直感したのかイッセーに問い合わせるようにことをせずパーティー会場へ戻った。

「誰もいないな……」

パーティーアー会場から少し離れた森の奥で薄笑いを浮かべながら歩

いていた。

「今度こそ…………今度こそ僕のものにしてくれる。もう二度と手放さないよ」

男が笑っていたがその顔に付いているのはドス黒い闇が混ざった瞳だった。

「あの薄汚い兵藤一誠には絶望を味わわせてやる」

イツセーの名前を出すと怒りの表情を浮かべたがすぐに薄気味悪い笑顔に戻る。

「待つててね僕の…………」

男は緑の髪を揺らしながらその足を進めた。